
バカと幼なじみと召喚獣

ミニス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと幼なじみと召喚獣

【NNコード】

N9692T

【作者名】

ミース

【あらすじ】

明久の家の隣に住む幼なじみが明久達と高校生活を楽しむ物語です

第一話 クラス分け（前書き）

作者は本作が初書きです

文才等もなく誤字や脱字等おかしいといふものが多く出でてくると思いま
す

第一話 クラス分け

わたし達が文月学園に入学してから一 度目の春、わたしは桜を眺めながら幼なじみと一緒に学校に向かつて上り坂を歩いていた。

坂を上り学校の校門に着くとある声に呼び止められました。

鉄人「おはよう吉井、久多羅木」

声のした方をみるとそこには浅黒い肌をした短髪の男の人人が立つていた。

明久「あ、おはようございます。西む……鉄人」

今挨拶をしたのがわたしの幼なじみの吉井明久。わたしはアキって呼んでる。でもアキ、今のは言い直さなくともよかつたんじやないの？　あ、わたしも早く挨拶しないと。

棗「おはようございます西村先生」

鉄人「吉井、何でわざわざ言い直した。お前は素直に西村先生と言えんのか？　まあいい、受け取れ」

わたしとアキは封筒を受け取った。これはクラス発表だ。確認のために封を切る　けど中身を確認しなくともどのクラスかはわかってる。

鉄人「久多羅木はともかく吉井」

明久「何ですか、鉄人」

鉄人「俺はお前を去年一年みて」

アキは西村先生と話しながら封筒を開けるのに苦労してゐるみたい。まあ見なくてもわかつてゐるはずだけど……。あ、あけられたみたい。

鉄人「喜べ吉井。お前への疑いはなくなつた」

『吉井明久……Fクラス』

『久多羅木棗……Fクラス』

鉄人「お前はバカだ」

久多羅木棗（オリキャラ紹介）

久多羅木棗
くたらぎなつめ

身長が145cmと小柄な女の子。髪は黒色の腰まである長いボーネールで胸がDサイズ。瞳は黒色。目はやや垂れ目で優しそうな感じがある。身長が低いのが悩み。

明久とは小学校の入学前に知り合ってそれからは家族ぐるみの付き合い。明久の家の鍵を持つていたりなぜか明久の仕送りの管理などもやっている。明久と一緒に行動することが多い。そのため明久や雄一の起こしたことによく巻き込まれる。明久達の問題によく巻き込まれていたためか運動神経や体力は明久に近い。ただ明久達と一緒に鉄人から明久達と一緒に逃げて捕まつたとしても巻き込まれているだけなのを鉄人も知っているためほとんどの場合処罰はない。成績はCクラスなのだが明久と一緒にいたがためにわざとFクラスになるように振り分け試験で調整した。優しい女の子なのだが明久関連で暴走することがある。

第一話 自己紹介

明久「ねえ、なつめ」

棗「なに?」

明久「確かになつめて1年の時結構点数取れてたはずだよね。それでなんでFクラスなの?」

棗「アキと一緒にクラスがよかつたからわざとFクラスになるようにしただけだよ」

明久「それは嬉しいけど、もし僕がFクラス以外にいく可能性は考えなかつたの?」

棗「あはは。アキでそれはないよ

明久「ちょっと…? 笑いながら悲しくなるようなこと言わないでよー!」

アキと2人で今はFクラスに向かっています。やつぱりアキとの会話は楽しいね。まだHRまで時間もあるしAクラスを見に行かないか誘われて行くことにした。わたしもAクラスがどんな感じか気になるし。

明久「これがAクラス……」

棗「すごいね……」

はつきり言つてこれ以上言葉が出てこない。みた感じ教室の広さは

普通の教室の3～5倍はありそつ。黒板はなく壁全体を覆つぼむビの
プラススマティスプレイ。ほかにもいろいろと……

明久「……もう、行こうかFクラスに」

棗「……そうだね」

わたし達はFクラスに足を向けた。

明久「これがFクラス……」

棗「すごいね……」

うん。すごいよね。さっきとは逆の意味で。えっと、まず机がちゃ
ぶ台で椅子は座布団。しかも綿がほとんど入ってない。もしかして
畳カビでない？ ほかにもいろいろ……。これが学力カースト制
度の一番下ね。これは酷い。ここまでやるつて学園は何考えてるん
だろ。これ、勉強する環境じゃないよ。

棗「えっと、席はどうでもいいみたいだね」

わたしあは空いてる席に座つて、その隣の席にアキが座つた。

雄一「明久早いな。遅刻するのかと思つていたが。それとおはよう、
久多羅木」

棗「おはよう、久多羅木」

アキの隣の席はゆうくんなんだね。なんだろう、2年でもいろいろ
巻き込まれそうな気がする。

明久「遅刻なんてできないよ。なつめに迷惑かけるし」

雄一「怒らすと怖いしな……」

明久「そだね……」

棗「なんか失礼なこと書つてない」

雄一「気のせいだ」

そんなので納得するわけないでショットをつて追撃しようとしましたんだけど……。

「HRを始めます」

担任らしき人がきた。

福原「おはようございます。2年F組担当の福原慎です。よろしくお願いします」

先生は黒板に名前を書こうとしたが、やめた。どうやらチヨークもなによつた。

福原「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」

秀吉「木下秀吉じや。演劇部に所属しておる」

ん? ひでちやん。同じクラスなんだねー。男だつてわかってる

けど、やつぱり女の子にしかみえないよねー。あ、ひでちやんの自己紹介が終わつたみたい。次は……。

康太「…………土屋康太」

また知り合いだ。なんか知り合いが多いな。

美波「…………です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きは苦手です」

女の子の声だ。よかつたよ女のお子がわたしだけじゃなくて

美波「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったのです。趣味は」

みなちゃんだ。

美波「趣味は吉井明久を殴ることです」

相変わらずだなー。次はアキみたいだね。

明久「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

なるほど、呼んでいいなら呼ぼつかな。しかし、わたしが言つよう早く……。

『ダアア――リイーーン――』

クラスの男性陣からのダーリンコール。なんだろう。気持ち悪くなつてきたよ。アキをみてみたらどうやら同じような感じみたい。

明久「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願ひいたします」

だよね。取り消すよね。あ、もつわたしの番だ。

棗「久多羅木棗です。先程自己紹介していた吉井明久の幼なじみです」

……なんだろう。きゅうに男性陣がカッターを構えたんだけど。照準はアキみたい。

棗「えーっと、みんな落ち着いて、暴力はいけないよ」

きいてくれるかな？ 少し待つてたら一応はわかつてくれたのか、ただの先送りかわからないけどカッターをしまつてくれた。……F クラス、かなり危険かも知れない

棗「とりあえず、よろしくおねがいします」

血口紹介が終わつたと同時に教室のドアが開いた。

瑞希「あの、おくれて、すいま、せん……」

あれ？ なんで？

福原「今血口紹介をしていくといふので、姫路さんもお願ひします」

瑞希「は、はい！ 姫路瑞希といいます。よろしくおねがいします

……

棗「みいちゃん。質問いい?」

瑞希「なんですか。くーちゃん」

棗「なぜFクラスに?」

瑞希「振り分け試験の最中、高熱を出してしまって……」

棗「あー、そんなことがあったのか」

振り分け試験途中退席だから無得点だもんね。しかし、みいちゃんの熱がでたと言った後のクラスの反応はどうなんだろ。例えば……

『そういうば、俺も熱（の問題）がでたせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？ アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ1人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがと』

などなど。Fクラス……」今までとは。大変かも。

あれ？ 気づいたらアキとゆづくんと先生がいない。ビームにいつたんだろう？ 考え事してると周り見えなくなるから注意しないと。みいちゃんが近くにいるし話してようかな。

棗「まさかみいちゃんがFクラスだとは思わなかつたよ」

瑞希「わたしあくーちゃんがFクラスだとは思わなかつたです。同

じ質問をしますけど、なぜFクラスに?」

棗「アキと一緒にいたかったからわざとFクラスになるよ!」
んだよ、「

瑞希「そうですか」

あれ、なんだろ?。なんかみいちゃんが困ってるみたいだけど。あ、
先生とアキとゆうくんがもどってきた。

福原「坂本君、君が自己紹介最後の1人ですよ」

雄一「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のこととは代表でも坂本でも、
好きなようによんでもくれ」

ゆうくんがそう言った後。

雄一「さて皿ひとつ聞きたい」

ゆうくんに視線が集まる。それを確認したゆうくんは教室内を見渡
して皿はその視線を追つた。

雄一「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートら
しいが」

雄一「不満はないか?」

『大ありじゃあ――!』

Fクラスの魂の叫びだった。

第一話 自己紹介（後書き）

はい。素人が無理するものではありませんでした。

棗「そうだね。むりしたね。頑張りすぎる必要はないんだよ」

う、ありがとうございます。今回そんなにうまく出来なかつたから、次は今回
よりは少しでもうまく出来るよう頑張るよ。

棗「頑張り過ぎないよう頑張ってね」

棗「次回は第二話作戦会議の予定らしいですよ。またね」

第三話 戰争への誘導

棗サイド

今のFクラスは興奮状態にある。まあ、気持ちはわかるけどさ。FクラスとAクラスの設備を比べさせたらこうなるよ。しかもそんな興奮状態のなか、更にゆうくんが周りを煽つてゐるし……。

雄二「だろう？ 僕だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『やつだそうだ！』

『いくら学費が安いからと言つて、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎるー。』

雄二「みんなの意見はもつともだ。そこで」

あれ？ ゆうくんが笑つてゐる。しかもあの笑い方……何かたくらんでるときのだ。

雄二「これは代表としての提案だが……FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思つ」

え？ 戰争？ しかもAクラス。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

『久多羅木さんと付き合いたい』

あちこちから悲鳴が……。まあFクラスとAクラスじゃ設備の差と同じくらいの戦力差があるしね。なにせ文月学園の試験は時間制限有り、点数上限無しだし。Aクラスの人達はみんな三桁当たり前だし。この否定的な状況でゆうくんはどうするのかなつと。ちなみにラブ「ールがあつたけどスルー、相手にするの面倒だし。

雄二「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろ』

『何の根拠があつてそんなことを』

雄二「根拠ならあるや。」のクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている

お、クラスの雰囲気が変わった。

雄二「それを今から説明してやる。おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

康太「…………（ブンブン）」

瑞希「は、はわっ」

ついてるね～。顔に畳の跡が。

雄二「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性識者だ」（ウツリーニ）

康太「…………（ブンブン）」

『ムツツリーーーだと』

『馬鹿な、奴がそうだと言つのか…………？』

『だが見る。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そつとしているぞ…………』

『ああ。ムツツリーの名に恥じない姿だ…………』

瑞希「？？？」

みーちゃんはムツツリーーーの由来がわからないせいか、疑問符を浮かべてるね。ムツツリスケベのことだって教えたほうがいいかな？んで、今そのムツツリーーーは、畳の跡を手でおさえてる。

雄一「姫路の」とは説明するまでもないだろう」

瑞希「えつ？ わ、私ですか？」

雄一「ああ。うちの主戦力だ。期待してこる」

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスに引けをとらない』

『ああ。彼女さえいればなにもいらない』

雄一「木下秀吉だつている」

『おお……』

『ああ、アイツ確か、木下優子の……』

雄一「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやつてくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかつたか?』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが一人いるってことだよな!』

クラスの雰囲気がかなりよくなってきたね。士気もかなり上がってるし。

雄一「それに、吉井明久だつている」

……シン

あ〜、凄まじい士気の急降下。

明久「ちょっと雄一! どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ! 全くそんな必要ないよね!」

『誰だよ、吉井明久って』

『自己紹介の時に久多羅木さんが幼なじみだつて言つてたアイツじやね』

『ああ。あの異端者か』

『どうする。あの時は久多羅木さんがやめるよつとついたからやめたけど……』
『殺るか?』

明久「ちょっと待つてよみんな!! 何でカッターなんか構えてるのさー?』

雄二「まあ待てお前ら、まずは」いつの話をきけ。処刑はその後でもできるだろ?」

明久「僕に味方はいないの!?」

うーん。とりあえず、危なくなりそうだつたらまたお願ひしてみようかな……。一度聞いてくれてるからもしかしたらまた聞いてくれるかもだし。

雄二『さて、知らないよつなら教えてやる。』いつの肩書きは《観察処分者》だ』

『……それって、バカの代名詞じゃなかつたっけ?』

明久「ち、違うよつ! ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

雄二「そうだ。バカの代名詞だ」

明久「肯定するな、バカ雄二!」

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試戦で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるつてことになるよな』

雄二「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

明久「雄二、そこは僕をフォローする単語を言つべきたじうだよね

？」

雄一「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う

Dクラスね。みいちゃんがいるし、まあ勝てるんじゃないかな。勝つてFクラスの勢い付けをしようとしてるのかも。さて、わたしはどうしようかな。Fクラスに入るためには全教科40～60点くらいしか取つてないし……。みいちゃんは回復試験を受けるだろうからそのとき一緒に受けてもいいけど……。まあ後で、クラス代表＆参謀のゆうくんにきいてみようかな。

雄一「皆、この境遇は大いに不満だろ？？」

『当然だ！！』

雄一「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

第三話 戦争への誘導（後書き）

棗「なんか今回、ほとんど原作をそのまま使った感じだよね」「うん」

そりなんだよね。まあたまには……

棗「たまにはって……まだキャラ紹介をいれてても四つ目ですよ」

すこません。

棗「それと前回書いたタイトルと違つただけど」

「うちの都合でかえました。予定だったし問題はないとねやへ。……ないといいな。」

棗「まつたく。それじゃあ次は何になるの？」

宣戦布告、かな？

棗「されど、次は第四話 宣戦布告 の予定です。またね」

第四話 宣戦布告

棗サイド

雄二「ロクラスへの宣戦布告の使者だが、明久か久多羅木のどちらかにやつてもいい」

明久「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

わたしが行っておこうかな。いくらなんでもこれは学園、アキが思つてることはそうそうないだろ？

棗「ゆうくん。わたしが行くよ」

雄二「そうか、頼む。開戦は今日の午後からと伝えてくれ。……久多羅木、ちょっと来い」

わたしはゆうくんのところに寄つて少し話をしてから教室をでた。

明久サイド

明久「ねえ、雄二」

雄二「なんだ明久？」

明久「宣戦布告の使者を決める時、僕かなつめのどちらかが行くつて事になつてたけど、僕となつめの二人で行くつて選択肢はなかつたの？」

雄二「それでもよかつたんだがな。一緒に行かせると久多羅木が暴走する可能性があつたからな」

明久「どうしてさ？」

雄二「はつきり言つとだな。明久が使者をやつた場合、確實にロクラスにボコボコにされる」

明久「それがわかつて僕にも行かせようとしてたの！？」

そんな危険なことをさせようとしてたのか。

雄二「当然だ。で、明久と久多羅木で行つた場合、久多羅木の前でボコボコにされるわけだが、そうなつたら久多羅木はどういう行動をとると思う」

明久「えつと、怒りながら止めようとしてくれるのかな？」

雄二「ああ。そうだろうな。ただ、そのまま暴走まで行く可能性もあつてな……」

ああ、なるほど。そんなことになつたら試合戦争どころじやないね。

明久「でも、僕一人で行つても結局ボコボコになつて戻つてくるんでしょ。なつめがDクラスに攻める可能性は？」

雄二「大丈夫だ。ボロボロの状態でもお前の笑顔を見せればあいつは問題ない」

明久「だつたら一緒に行つても大丈夫だつたんじやない?」

雄二「なんだ? お前は殴られてるときに笑うのか。そんな趣味があつたのか?」

明久「ないね。どうしよう、こんな話してたらなつめが心配になつてきた」

雄二「大丈夫だろ」

明久「でも……」

雄二「心配性だな。まあ、お前が戦争を仕掛ける理由が姫路と久多羅木のためだしな。……ムツツリーーー」

康太「…………準備はできてる」

明久「?」

雄二「久多羅木に気付かれないように盗聴器を仕掛けてもらつた。久多羅木一人ではどうにもならない状況になつたらのり込むぞ」

雄二「人のことは言えないよね。

棗サイド

わたしはDクラスに向かつてゐる。歩きながらさつき教室でゆづく人に言われたことを思い出していた。言われたのは宣戦布告について。下手にはでるな。挑発はやりすぎるな。相手が力で解決しようとしてきたら反撃はせずに身を守るだけにしろ、とのこと。

どれも苦手だよ。なんか不安になる内容もあるんだけど。挑発に関しては……必要があればするつもりだったけどね。宣戦布告を受けてもらわないと戦争が始まられないのでから。でめ挑発つてすぐ苦手なんだよね。さて、そろそろDクラスにつく。相手に宣戦布告して受け入れさせる。これもある意味戦いだよね。だから始めよう。皆より先に、Fクラスが戦争ができるようにするために、わたしの戦争を。

棗「すいません。Dクラスの代表さんを呼んでもらっていいですか？」

クラスにいる人に話して代表を呼んでもらっていい。

『おい、代表。なんかちつといいのがお前に用があるってよ』

棗「ちつこに言わないで下さい」

人が気にしていることを。

平賀「代表の平賀だ。んぐ、なんの用だ」

棗「あ、はい。わたし達FクラスはDクラスに試験召喚戦争を申し込みます」

『なんだと――！』

おお、息ピッタリだ。

平賀「FクラスがDクラスに？」

棗「はい」

平賀「勝てると思つてゐるのか?」

棗「当たり前じゃないですか。じゃなきゃ戦争なんて仕掛けませんよ」

『アイツ調子にのつてないか?』

『たかがFクラスがなに言つてやがる』

『おとなしく『ハミのところに帰れよ』

平賀「そうか。だが、俺達にメリットしかないのに受けないとでも?」

棗「いいえ、そちらはメリットしかないはずですよ」

平賀「なぜ?」

棗「DクラスがFクラスに負けるわけがない。勝てて当然だと思つてこらんでしょう?」

『わかつてゐるじゃないか』

『なに当たり前なこと言つてんだ』

平賀「当然だな」

棗「なら、やつぱりメリットしかないですよ。確実に勝てるクラスで試召戦争の経験と召喚獣の操作の練習ができるしね」

わざから周りがつるやこな。

棗「ねえ、ロクラス代表。周りを静かにしてもらつていいかな」
「なんだね。一人近寄ってきた。そいつはわたしの肩に手を
のせてきた。

『なあ、平賀。もうコイツ黙らせてFクラスに投げ込んでこようぜ』

平賀「おいおい……」

なにこの人？ なんでキレんの？ わたし何かしたつけ？ う
ん、覚えない。まあ、とりあえず暴力で何とかしようとしてる感
じだし、こっちも相応の対処をしてもいいんだよね。やりますか。
わたしは自分の肩にのせられている手を掴んで足を払い、うつ伏せ
に倒し、掴んでいた手をねじり上げる。

『いてててて。何しやがる！ ていうかはなせ……』

何この人？ 威勢だけだ……。はつきり言って弱い……。

棗「何しやがるって……正当防衛だけど？ それとこっちはロクラ
ス代表と大事な話をしてるんだから邪魔しないで」

平賀「あー。すまない。そいつ沸点低いんだ……」

そうなんだ。まあなんとなくわかつたけどさ。

棗「そつか。とりあえず話の続きをよづか」

平賀「いや、もう話し合ひはいい。戦争を受けるよ」

棗「あれ？　いいの？」

平賀「ああ。これ以上やつても状況は悪化しかしないからな」

なんだ。せつかく追い込む材料を手に入れたのにさー。ま、いつか。

棗「それじゃあ、受け取って言つてくれたし、いつ開戦とかの確認をしこうか」

平賀「頼む」

棗「開戦は今日の午後からだよ」

平賀「午後からだな。わかつた」

ちなみにこの会話の間、ずっとそれをヤツの手をねじり上げたままだつたりする。さて、宣戦布告も終わつたしFクラスに帰るかな。

第四話 宣戦布告（後書き）

今回でやつと棗が活躍です。

棗「本当にやつとだね」

まあこれからは出番も増えっこくと熙つよ。

棗「それは嬉しいね。これからアキとはどうなるのかな～」

それはこれから事なのでわかりません

棗「そりですか……」

棗「えっと、次回は第五話 作戦会議 です。またね」

第五話 作戦会議

棗サイド

棗「ただいま。宣戦布告してきたよ」

明久「おかえり。なつめ」

雄一「おひ。無事なようになによりだ」

瑞希「お疲れ様です。ぐーちやん」

雄一「それじゃ、これから作戦会議にはいるか。久多羅木、明久、
ムツツリー、秀吉、姫路、島田はついてきてくれ」

「いいでするんじゃないんだ。

棗「ほら呼ばれたよ、アキ。早く後を追わないと」

わたしはアキの手を掴んで、ゆづくらの後を追う。

明久「そうだね」

瑞希「二人とも待ってください」

美波「あの一人仲いいわね……」

秀吉「そつじやの」

康太「……妬ましい」

雄二「久多羅木、開戦は午後からと伝えたな」

棗「うん。しつかりと」

美波「それじゃ、先にお皿い飯つてことね」

棗「アキ、ちゃんと持つてきてる?」

明久「大丈夫。ちゃんと持つてきてるよ」

秀吉「ん? 何の話じゃ」

明久「お弁当の話だよ」

雄二「ああ、なるほど。今日は明久が当番の日だったのか」

雄二「さて、話を試合戦争のことに変えるぞ」

秀吉「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ? 段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負にでるならAクラスだろ?」

瑞希「そういえば、確かにそうですね」

雄二「まあな。当然考えがあつてのことだ。Eクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

明久「え？ でも、僕らよりクラスが上だよ？」

棗「アキ、それは振り分け試験の時点では向こうが強かつたかもしれないけど、実際は違うんだよ。周りにいるメンバーをよく見てみて」

て

明久「美少女が三人とバカが一人とムツツリが一人いるね」

雄二「誰が美少女だと！？」

明久「ええっ！？ 雄二が美少女に反応するの！？」

康太「…………（ポツ）」

明久「ムツツリーーまでー？」

棗「まさか、アキにバカだと思われてたんだね…………」

明久「なつめまでー？ どうしよう、ぼくだけじゃツツコ//きれない！」

秀吉「まあまあ。落ち着くのじや。雄二にムツツリーーに久多羅木

アキ弄るのたまにはいいね。

雄二「久多羅木はもうわかつてるみたいだな。要するにだ、姫路に問題のない今、Eクラスとやっても勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦つても意味がない」

明久「Dクラスは厳しいの？」

雄二「確実に勝てるとは言えないな」

明久「だつたら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

雄二「初陣だからな。派手にやつて今後の景気づけにしたいだろ?
それにAクラスに勝つためのプロセスだしな」

棗「ゆづくんちよつといいかな」

雄二「なんだ」

棗「Fクラスに入るために点数をあんまりとつてないんだけど。戦
争が始まつたらみいちゃんと一緒に回復試験受けた方がいい?」

雄二「今点数はどのくらいだ。召喚獣の操作もどんな感じか教えて
くれ」

棗「全部40~60つでとこる。召喚獣はアキと同じくらいに動か
せるよ」

雄二「明久と同じくらいか……。なら、回復試験は受けなくていい。
明久と組んで時間稼ぎにまわってくれ」

棗「ん。わかった」

明久「雄二、さつきの話だけどAクラスに勝てなかつたら意味がな
いよ」

雄二「負けるわけがないさ。お前らが俺に協力してくれるなら勝て

る

雄一「いいか、お前ら。ウチのクラスは

最強だ」

第五話 作戦会議（後書き）

棗「今回、短いし酷いね」

吉川「うな。わかつてゐる。次はなんとかしてみたい。」

棗「はあ。まあいいや。次は第六話 Dクラス戦 です。またね」

第六話 Dクラス戦？

棗サイド

FクラスとDクラスの戦争が始まった。わたしとアキは先攻部隊をまとめている。他の部隊は、中堅部隊でひでちゃんとみなみがまとめていて、本隊はもちろん代表のゆうくん。ムツツリー二は一人で動いてるつて。偵察部隊らしい。それと、これはあまり関係ないけど、戦争が始まる前にみなみにみなちゃんと言わないでと欲しいと言われちゃった。

棗「一対一ではできるだけ戦わないで！」

明久「点数が少なくなつたら無理しないで、回復試験を受けてくるんだ！」

わたし達先攻部隊は十五人、Dクラスの前線部隊はまだ様子見なんか八人。

棗「アキ、あの人とやるよ！」

明久「うん、わかったよ。なつめ！」

ゆうくんも無茶言ってくれるよね。戦いながら周りの様子を確認して指示をだせつて。そして初の戦死者が出たみたい。

鉄人「さあ来い！ この負け犬が！」

『て、鉄人！？ 嫌だ！ 補習室は嫌なんだつ！』

鉄人「黙れ！ 捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな」

『た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐え切れる気がしない！』

鉄人「拷問？ そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは一富金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるつ」

『お、鬼だ！ 誰か、助けつ イヤアア （バタン、ガチャ）』

周りが沈黙してる。まあそりゃ目の前であんなの見ればね。

棗「まあ皆、補習室（地獄）に行きたくなかったら、勝つしかないよ！」

『そうだ。勝てばいいんだ！』

『もう様子見なんてやつてられるか！ 増員の要請をしろ！』

あれ？ なんかDクラスから嫌な命令が聞こえたんだけど……。増員が来るまでに敵部隊を〇か、〇に近づけないと。今まで増員はきついよ。

明久「今までと同じように一対複数で戦うんだ！」

棗「アキ、じつもやるよ」

明久「オッケーだよ」

棗・明久「サモン」

数学 Fクラス 吉井明久&久多羅木棗 43点&57点

V S

数学 Dクラス 長谷川大樹 87点

ちなみにわたしの召喚獣は、わたしの姿でデフォルメされてて、青色の着物を着ている。武器は日本刀。

相手がアキに襲い掛かってきた。アキは相手の攻撃を左に避けて、がら空きの脇腹に木刀で攻撃する。

明久「ほい。なつめ、パース」

攻撃した時の勢いでこちらにとばしてきた。

棗「オッケーだよ」

飛んでくる召喚獣に刀を横に一振り。

数学 Fクラス 吉井明久&久多羅木棗 43点&57点

V S

数学 Dクラス 長谷川大樹 0点

うん。たいした点数じゃなくてよかつた。

このくらいの点差なら召喚獣の操作経験少しあるし問題ないね。なんで操作経験があるのか言つておくね。アキの観察処分者の仕事中に召喚獣として操作の練習してたんだよね。実はわたしが観察処分

者だった、とかそういうのではないよ。

棗「ちよつときつこかな……」

わたしは周りをみて、誰にも聞こえないように呴いてみる。相手の前線部隊は残り三人、こっちも被害はあるけれどそれ以上残っているからなんとかなる。なるといいな。もうかなり近くにDクラスの増援が……たぶん十五人くらい。こっちの戦力を超えるね。

棗「（アキ、状況が悪化してきたら、最悪の状況になる前に後退するよ）」

明久「（わかったよ、なつめ）」

わたしはアキとアイコンタクトをとる。こんな不安を煽るよつた会話を周りに聞こえるようにする必要はないからね。

第六話 Dクラス戦？（後書き）

とつあえず分離していくことになった

棗「でもこれなら、今回でD戦終わらせておよかつたんじゃない」

出来ればいつしょりと離してたんだけど……。

棗「だけど？」

ぶつかけっこから先はノープランだ！

棗「はあ～。なんか思い付く」とを期待しきれ。次回は 第七話
Dクラス戦？ です。またね」

第七話 Dクラス戦？

雄一サイド

俺は今ムツツリーーーから状況を聞いている。

雄一「前線部隊は予想以上にやつてくれてるな」

康太「……久多羅木、明久は問題ない。周りは結構削られている」

雄一「そんなのはわかりきってる」

今はまだいいだろうが、必ず前線部隊は押し切られる。こいつらは援軍を前線に送つてないんだから、しうのがない。物量には勝てん。姫路はまだ時間がかかる。……久多羅木と明久には頑張つてもうつか。

棗サイド

化学 Fクラス 久多羅木棗&吉井明久 52点&53点

V S

化学 Dクラス 阿東公平&久我拓海 0点&0点

Dクラスの援軍が来てからわたし達は苦戦を強いられてる。相手の方が人数が多いから一対多の状況になかなか持つていけないしね。周りの被害もかなりだ。これ以上は無駄に潰すだけだね。後退しよう。

棗「皆、後退するよ！」

秀吉サイド

わざわざから前線部隊の状況を報告係が知らせてくれてこるのじゃが、やつぱりおそれておるらしい。

美波「前線はもう限界みたいね」

秀吉「すぐ動けるようにしといたほうがいいのう」

そんな話をしても、そんなにからずに報告がきたのじや。

『前線が後退を開始した!』

美波「前線の援護に行くわよ!」

秀吉「総員突撃じゃ!」

棗サイド

棗「あつー、ひでちゃん!」

秀吉「大丈夫かの? 今どんな状況じゃ?」

明久「僕となつめは無傷だけど、ほかはかなり厳しいよ

美波「それじゃ、なつめと吉井以外は回復試験に行って」

それじゃわたし達はつと。

棗「アキ、わたし達は」のまま戦つよ

明久「当然だね」

それはもちろんだよね。無傷なのに回復試験を受けてもしょうがない。今の点数より上を取れるなら話はかわってくるけどね。

棗「それとこれから指揮はひでりやんとみなみがよろしくね」

秀吉「わかつたのじや」

美波「任せて」

指揮を出す人が多いと混乱するからね。もう話は終わりみたい。D
クラスの群れがかなり近くに来てるよ。

雄一「サイド

ウチの中堅の戦闘が始まつたらしい。ペースとしてはなかなかだ。
それにあいつもそろそろだしな。

瑞希「お待たせしました」

雄一「おう。おわったか」

瑞希「はい。それで今どんな状況ですか？ 吉井君は？」

姫路、わかりやすいヤツだな。

雄一「今は前線部隊が中堅部隊と合流して戦っている。それと明久

は無事だ

それじゃあ二つとも動くか。

秀吉サイド

『横溝がやられた！ これで布施先生側は残り一人だ！』

『五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかいない！ 援軍を頼む！』

『藤堂の召喚獣がやられそうだ！ 助けてやつてくれ！』

『まずいのう。物凄い劣勢じや。久多羅木達は……ありえないことになってるのう。さすがに援護は頼めん。』

秀吉「布施先生側の人達は召喚獣を防御に集中させるのじや！ 五十嵐先生側の人は総合科目の人と交代しながら勝負するのじや！」

藤堂は残念だが諦めるのじや」

『了解』

とりあえず言われた事には全て指示を出し終わったあと、また別の声が聞こえた。

美春「ようやく見つけました！ お姉さまー！」

美波「げつ！ 美春」

秀吉「何じや島田。知り合いのかのう」

美春「なつー？お姉さまー、美春といつものがありながらそんな豚や……『めんなさい、間違いました。制服が違ったので女の子だと気付くのに時間がかかりました。豚野郎は忘れてください』」

秀吉「……それは、ワシの」とを言つておるのかのう？」

美春「やうですよ」

秀吉「ワシは男じゃ……！」

美波「美春、いい加減ウチのことは諦めなさいって言つたでしょ」

秀吉「ヒジケで島田よ、わつきからアヤシが言つておるお姉さまって」

美春「嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんですねー！」

美波「来ないで！ウチは普通に男が好きなのー！」

ああ。なんとなくわかつたれい。ようはあの美春とやらは女の子が、とこりか島田が好きなのじやな。島田も苦労してゐるのう……。

秀吉「セレの美春とや！」

美春「なんですか？」

秀吉「おぬしの恋愛を別に否定はしないのじやが」

美波「否定してよー！」

秀吉「今は戦争中じやから、持ち出されると困るのじや」

美波「ねえ！ 木下！」

秀吉「安心するのじや。おぬしがそつち系でないのはわかっている」

美春「なら、無理矢理奪うしかないですね。サモン」

秀吉「島田よ。いいでヤツを倒して補習室に呑き込むぞい。サモン
じや」

美波「そうね。そうすれば一時的にでも平和が、安息が。サモン」

苦労してゐるよひじやな……。

化学 Fクラス 木下秀吉 & 島田美波 63点&53点

VS

化学 Dクラス 清水美春 94点

相手の召喚獣が突っ込んできた。やつぱり島田に。今一人は鍔迫り合いでいる。ワシは鍔迫り合いでいるところに一撃を入れる。その後邪魔に思ったのか島田との戦いをやめてワシの方に襲い掛かってきたのじや。隙だらけの召喚獣に島田が一撃。

化学 Fクラス 木下秀吉 & 島田美波 63点&32点

VS

化学 Dクラス 清水美春 0点

島田は鍔迫り合いでダメージを受けたみたいじやがまあ大丈夫じや

るつ。

美波「補習の西村先生、早く」の危険人物を補習室へお願いします！」

鉄人「おお、清水か。たっぷりと勉強漬けにしてやるぞ。」つちに
来い」

美春「お、お姉さま！ 美春は諦めませんから！」のまま無事に
卒業出来るなんて思わないでくださいね！」

最後に物凄く物騒な言葉を残していったの……。

棗サイド

周りからは状況が悪い知らせが結構聞こえてくる。援護にいかない
と。

明久「ねえ、なつめ」

棗「何？」

明久「一対四と一対八、どっちがいい？」

棗「は？」

アキの質問の意味がわからない。なんでそんなでかい数字が出てくるの？ その疑問がアキにもわかつたのかある場所に指をさした。その場所には、Dクラスの生徒が八人こっちに向かってきてる……。

第七話 Dクラス戦？（後書き）

棗「わざわざモブまで名前つけてるんだね」

なんとなくね。適当に名前作るのも大変だ。

棗「それじゃ、次は第八話 Dクラス戦？ です。またね」

第八話 ロクラス戦？

棗サイド

さて、こっちに向かってきてる人はどうじょうかな。周りを確認しても手が空いてる人はいない。一人でやるしかないね。そうだね。まず確認しておこう。

棗「アキ、古典は何点くらい取れてるの？」

これは確認とかないとね。なんせ、こっちに向かって来る群れは古典の先生を連れて來てるんだから。近くの他のフィールドに逃げてもいいけどその前に捕まりそうだしおうだし。

明久「あと一戻。あとあと一戻で……」

棗「あと一戻で？」

明久「二桁になる」

棗「一対八ね」

明久「今全く悩みがなかつたよね！？」

今を聞いて何を悩むの？ どうしようかな、アキと一緒に勉強をしようかな。

棗「アキ、全部避ける自信ある？ あるなら一対八でいいけるよ」

明久「出来るよ。ていうか出来ないと僕が痛いしね」

棗「まあそうだね」

最初の出来るよ、で止めとけば好かったのに。

明久「それでどうするの？ 結構不利な状況だけど」

棗「アキ、少しは考えようね。とはいってもわたしも自信ないけど……。そうだね、簡単に言っちゃうと同士討ちでもしてもらおうかなと。あとは敵の召喚獣を盾にするつもりだし」

明久「うーん。まあ、やってみるよ」

そろそろあっちも準備出来るのかな。出来るだけ早く来てくれると嬉しいけど。

明久「敵が来たよ」

棗「始めようか」

棗・明久「サモン」

古典 Fクラス 久多羅木棗&吉井明久 58点&9点

VS

古典 Dクラス Dクラス八人 平均95点

『なんだ、あの点数』

『これならアイツはそれほど気にしなくていいな』

『さつさと潰すぞ』

アキ、散々言われてるね……。

敵が先に動き出してきた。最初は出来るだけ回避に専念して、隙をみつけて攻撃する。相手が多いんだからしうがない。それを続けていると、前と後ろからの挟みうちをしてきたよ。前から来る召喚獣から何とかした方がいいね。一步左に動いて攻撃を避けてから、攻撃してきた召喚獣の腕を掴んで後ろから来ている敵に投げつける。投げられた召喚獣と後ろから来ていたのがぶつかって倒れる。倒れて体勢を立て直してくるうちに数回攻撃して終わり。

棗「これで二つ」

アキも何人か倒したみたいだけどまだきついかな。

『たつた一人なのになんて勝てないんだ!』

『くそ！ 攻撃が当たらない！』

雄二「久多羅木、明久、あと少し持ちこたえろー！」

やつとだね。後ちょっと耐えれば状況は変わる。

『援軍だ。合流される前にこいつらだけは倒すぞ！』

おとなしくやられるつもりはないよ。

ゆうくんが合流した時には八人いた敵は三人にまで減っていた。残

つていたのはゆうくんの部隊が片付けたよ。

雄二「無事だな久多羅木、明久、秀吉、島田」

棗「なんとか」

明久「同じく」

秀吉「結構ギリギリじゃ」

美波「ウチもよ」

雄二「そつか。皆には悪いがこのままDクラスの頭を討ちに行くぞ。
やつてもうう」とがあるからな」

やること……それは皆でDクラス代表までの道を作ること。

明久「いた。Dクラス代表だ」

棗「アキ、行くよ」

わたし達はDクラス代表に駆け出した。けど邪魔が入ったよ。

美紀「Dクラス玉野美紀、サモン」

明久「近衛兵！」

わたし達の最後の仕事、近衛兵の氣を引いとく」と。代表を討つのは別の人気がやってくれるからね。

瑞希「あ、あの……」

平賀「あれ、姫路さん。どうしてここ」「元

瑞希「その……Fクラスの姫路瑞希です。Dクラス代表に現代国語勝負を申し込みます」

平賀「はあ。……どうも」

勝負は一瞬でついた。

そのあと、ゆうくんとDクラス代表で戦後対談が行われて、条件付きで設備は交換しないことになった。

明久サイド

明久「なんとかDクラスに勝てたね」「

棗「そうだね」

今僕達は戦争が終わって、なつめと一緒に帰宅している。

明久「明日は丸一日補給試験だね」

棗「そうだね。アキ、ちょっと提案があるんだけど

明久「何?」

棗「わたしとこれから一緒に勉強しない? 嫌なら断つてくれてい
いけど」

嫌どこかありがたい提案だと思つよ。

明久「うん。ありがと。お願ひするよ」

棗「これから一緒にって言つたけど、今日だけの話じゃないよ?」

明久「うん。むしろ嬉しいよ」

棗「わかつたよ。アキ、さつきも言つたよいつに今日から始めるからね」

なつめは笑顔だった。その笑顔が可愛くて……。その笑顔を見ているだけで顔が熱くなつた。

第八話 Dクラス戦？（後書き）

棗「やつとDクラス戦が終わつたね」

はい。終わりました。無理矢理な感じがありますが。

棗「まあ無理矢理だつたね。次頑張つてね。次は第九話 休息 です。またね」

第九話 休息

棗サイド

今日は疲れた。一年が始まつたばかりなのにこんなに忙しく、騒がしくなるなんてね。まあ、わたしも騒がしいのは結構好きだけど、初日から戦争するとは思つてなかつたし。でも、なんで戦争を仕掛けの気になつたんだろ？ きつかけはたぶんアキとゆうくんだよね。ん~、まあ考へても仕方ないね。そだね。明日の事を考へよう。

明日は丸一日補給試験に充てるんだつたね。わたしも「いやでちゃんとやつとかないと次はきついかも。次はBクラスらしいし。今どれくらい点数取れるのかな。アキとの勉強は今日から始めたけど、今まで一人でやつてきてるんだしね。

棗「得意科目は別にしても他は、Cクラス上位くらにはとれたらいいな」
まあテストは明日なんだし、やつてみないことにはわからないんだから、今は考えなくていいね。ああ、そうだ。明日のお弁当、わたしが当番だった。とりあえず冷蔵庫みて、何を作るか考えながら、寝よ。もういい時間だし。

棗「う、うふ。眩しい」

わたしは田を覚ました。どうじよ？ 遮光カーテンにしようつかな？ まあいいや。とりあえず起きてお弁当を作り、朝ご飯を食べて、学校に行く準備をして家を出る。それでアキの家の前でアキが出てくるのを待つ。ちゃんとアキ、起きてるかな？ そんなことを気にしていたらアキが出てきた。

明久「おはよー、なつめ」

棗「おはよー、アキ」

わたし達は挨拶をしてから学校に向かって歩いた。

明久「今田のテストはなんかいけそうな気がするよ」

棗「アキ……、一日勉強したくら^ごうじゃあ今まで変わらな^こいと思つ
よ。でも頑張つてね」

明久「もちひんなどよ」

わざわざ相手のやる気を削ぐ必要もないしね。

学校についてわたし達はFクラスにいる。

雄一「おお、明久。今日も早いな」

明久「まあね」

雄一「まあ、起きれなかつた場合、久多羅木が起^こしているんだろ
う」

棗「うん。玲さんから合鍵もらつてるし」

雄一「玲?」

明久「僕の姉さんなどよ」

『殺せ――――――』

このクラスの事はよくわからない。いったい何が原因で、今アキが狙われてるんだろ？

棗「ほら、皆落ち着いて」

『退くんだ久多羅木さん！　そいつを殺せない！』

『なぜ邪魔をするんだ！？』

棗「だから落ち着いてって。それと一つ言つておけば、アキに危害を加える人は」

『吉井に制裁を下さる者は？』

棗「嫌いだよ」

あ、皆散った。

明久「た、助かつたよ。なつめ」

棗「何が理由かわからなかつたけど、アキも災難だね」

ホントは理由はなんとなくはわかつてゐけど、まさか姉がいるってだけであそこまでなるものなのかな。

雄一「ほり、FFFF団を黙らせるとはな」

棗「何？ そのFFFF団つて？」

雄二「簡単に言ひと人の幸せが許せない奴らの集まりだ」

棗「そんな危険なのがあつたんだ……」

ほんとにこのクラスなんなんだろ……。

あとでアキに聞いたら入つてないみたい。よかつたよ、入つてなくて。

雄二「だが明久、お前の家に何回も遊びに行つてゐるが、一切見たことがないが？」

明久「それはそうだよ。姉さんアメリカに行つてるし」

雄二「ふうん」

棗「ほらアキ、ゆうくん。もう時間みたいだよ」

今はお昼休み。

棗「アキ、調子はどう？」

明久「ダメかな。振り分け試験の時と同じ感じだよ」

それはそつだらうね。一日で結果が変わるなら誰も苦労はしない。

雄二「よし、昼にするか。今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレー

にすつかな

なこそれはなシシ」//まち?

棗「はい。アキお弁当」

明久「ありがと。なつめ」

美波「なつめて吉井にしかお弁当を作らないの?」

棗「そのつもりだけど」

なんだらう。みなみが怖い。なんかみなみの後ろに黒いものが見える……。

秀吉「姫路は料理は作れるのかの?」

瑞希「私は作ることを禁止されています。条件付きでなら出来ますけど」

雄一「禁止されてるのか。何をしたんだ。てか、条件つて……」

瑞希「条件はくーちゃんが吉井くんのどちらかがいれば作つていいくつてものです」

棗「何で禁止にしたか。それは一人でやらせると何をするかわからぬいか?」

アキが震えてる。まあわたしもだけど。

棗「みいちゃんがあんな事を一度としなくなるまで、わたしかアキが見てるとこうじやないと作らせないとこうじたの」

秀吉「ちなみに何をしたんじや？」

棗「料理の味付けと言つて硫酸、硝酸カリウム、クロロ酢酸などを使つてたよ」

雄二「それは一人で作らせりゃいけないな」

ゆうくんの顔が青くなつてゐる。どうやら危険性を認識してくれたらしい。

明久「あれで入院しけたもんね」

棗「そうだね。それとみいちゃんの為に言つておけど、薬品を使わない料理は普通に美味しかつたよ」

瑞希「ありがとひざわこます」

雄二「さて、わかつと飯食つて午後に備えるか」

明久「結果は振り分け試験の時と変わらない感じだね」

棗「朝も言つたように一日くらこじや変化なんてまづないよ。焦らずこれから毎日やつていけば、必ず結果はついてくるよ」

明久「そうだね。焦らずに頑張るよ」

今は学校が終わって帰宅中。そのままアキの家に行って勉強してまた明日つて流れになる。

アキの家についてアキが勉強の準備を始める。ほんと、やる気になつたんだね～。わたしも準備し終えて、カバンの中に入れている物を手に取る。

明久「あれ？ なつめ、それって」

棗「うん。 そうだよ」

これは、アキから貰つた一番大切な宝物。誕生日とかでもプレゼントを貰つたりしたけどこれは特別、アキがわたしにくれたはじめてのプレゼント。それをいつも私は持ち歩くの。

第九話 休息（後書き）

棗「なんかタイトルと中身が違うような
いいの。気にしない。

棗「それで、わたしの大事な物出してどうするの？」

まあ気にしない。

棗「教えてくれてもいいじゃん。はあ、次は第十話
です。またね」

第十話 Bクラス戦？

美波「そういえば坂本、次の目標のことだけど」

雄二「ん？ 試召戦争のか？」

美波「うん」

Dクラス戦が終わってから一日。わたし達はお昼を食べたあと、次の戦争の話を始めました。

美波「次はBクラスなの？」

雄二「ああ。そうだ」

美波「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

なんでBクラスなのかが疑問なんだね。わたしはなんとなくやうへんが考へてることがわかつたけど。

雄二「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスに勝てない」

美波「それじゃあBクラスが最終目標？」

雄二「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

明久「雄二、やつれと書いてる」とが違ひじゃないか

雄一「クラス単位では勝てないと思つ。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

明久「一騎打ちに? どうやって?」

雄一「久多羅木。説明頼む」

棗「え? なんでわたし?」

急に話を振られても困るんだけどな~。

雄一「どうせこの後、俺がどういう方法で一騎打ちに持つていいうとしてるか、もう大体わかつてんのだろう? なら明久に説明するのも面倒だから任せる」

いいのかな、それで……。

明久「雄一、なんか酷い」と言つてない?

棗「まあ、いいのかな? とりあえず一騎打ちに持ち込むためにBクラスを使うんだよ」

明久「え? どうこうこと?」

棗「じゃあアキ、問題です。試合戦争で下位クラスが負けた場合、設備はどうなると思ひ?」

明久「え? うーん。…………」「めん。わからない」

棗「……みーちゃん、答えをどうだ?」

瑞希「下位クラスは負けたら設備のリンクが一つ落とされます」

棗「うん。正解。BクラスならCクラスの設備に落とされるんだよ」

明久「へー、なるほど」

棗「続けてアキに問題です。上位クラスが負けた場合はどうなると
思う?」

明久「悔しい」

わたしは軽く頭を横に振る。しかも溜め息つきで。

明久「なつめ、僕を見捨てないで」

棗「どう?」と、またみいちゃん。答えをどうぞ」

瑞希「相手クラスと設備に入れ替えられたりしないですよね」

棗「うん、そうだね」

明久「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられる
わけだね」

棗「そうだよ。それでそのシステムを利用して、交渉するの。やつ
くん、もうこの辺でいいかな?」

雄二「ああ。十分だ」

瑞希「交渉、ですか?」

雄一「Bクラスをやつたら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラスですむ」

明久「ふんふん。それで？」

雄一「それをネタにAクラスと交渉する。Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞって感じにな」

明久「いろいろ考えてるんだね。僕なんて何も思いつかなかつたよ」

雄一「お前と比べるな」

秀吉「しかしこの内容を久多羅木も考えておったとはのう」

棗「たまたまだよ」

雄一「んじゃま、Bクラスとの戦争に勝つぞ」

昼休み終了のベルが鳴り響いた。Bクラスとの戦争の始まりだよ。わたし達の目的は敵を教室に押し込むこと。わたし達はほぼ全戦力を投入してBクラスに向かって走ります。今回の「ひらりの主武器」は数学。数学は得意科目だからそこそこ戦えるね。

『いたゞ、Bクラスだ』

『高橋先生を連れているぞ！』

Bクラスのメンバーは十人位。様子見かな?

『生かして帰すなーっ!』

物騒な言葉とともに戦いが始まった。

VS
総合 Fクラス 近藤吉宗 764点
総合 Bクラス 野中長男 1943点

点数高いなー。つとわたしもやろひ。

数学 Fクラス 久多羅木棗 349点
数学 Bクラス 金田一裕子 159点

『何!? その点数! ホントにFクラス! ?』

棗「数学は得意なんだ」

ほかにも得意科目はあるけどね。

瑞希「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

みいちゃん。運動苦手だもんね。

『来たぞ! 姫路瑞希だ!』

明久「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」

瑞希「は、はい。行って、きます」

『長谷川先生、Bクラス山下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます!』

瑞希「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願ひします」

『律子、私も手伝つ

『サモン』

みいちやんの召喚獣はアクセサリーをつけていた。

『そ、それって!?』

『私達で勝てるわけないじゃない!』

あ、みいちやんいいなあ。腕輪持ちだね。

瑞希「それじゃあ、こきあすね」

数学 Fクラス 姫路瑞希 412点

V S

数学 Bクラス 山下律子&菊入真由美 189点&151点

瑞希「ごめんなさい。これも勝負ですので」

みいちやんの召喚獣が敵一人の召喚獣を、大剣で一刀両断し、決着はついた。

『い、岩下と菊入が戦死したぞ！』

『なつ！ そんな馬鹿な！？』

『姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！』

『それに久多羅木とかいうのも厄介だぞ！』

敵は動搖してゐる。今のうちにこの戦いを終わらせよう。

明久「なつめ、僕はちょっと教室に戻るよ」

棗「何かあったの？」

明久「ちょっと気になることがあるだけだよ」

棗「……わかつたよ。何人か連れてく？」

明久「いや、大丈夫」

明久「うん。お願ひね」

棗「そう、とりあえずわたしはここ突破に専念するよ

わたし達は廊下のBクラスを撤退させて目的通り教室に押し込んだ。
……ところで、戦争が終わったよ。どうやらBクラスと協定を結んだらしい。

棗「何これ？」

教室は酷い状況だった。穴だらけになつたちゃぶ台、壊された筆記具。

雄一「ちよつと教室を空けてる間にせりあれてな

棗「うん? 教室を空けたの? 今回の協定とかに関係あるのかな?」

雄一「ああ。その協定で空けてたからな」

Bクラス最低だね。いや、この言い方は正しいね。この言い方だとBクラス全員が最低になつちゃうしね。こんなことをやるのは少數だらうしね。

康太「Cクラスの様子がおかしい」

雄一「漁夫の利を狙つつもりか。いやらしく連中だな

明久「雄一、どうするの?」

雄一「そうだな。Cクラスとも協定を結んでおくか。久多羅木、明久ついて来てくれ

それで現在Cクラス代表を呼び出しているといふだよ。

小山「何かよつ?」

棗「あ、小山さんだ」

小山「久多羅木さん! ?」

なんでそんなに驚くんだろう？

雄一「なんだ、知り合いか？」

棗「うん」

雄一「まあいい。『クラス代表としてクラス間交渉にされた。時間はあるか？』

小山「クラス間交渉？ ふうん……」

雄一「ああ。不可侵条約を結びたい」

小山「不可侵条約ね……」

ん？ 小山さんがわたしをみてる。これはクラスのために一言言つておこうかな。

棗「小山さん。拒否権はないよ」

笑顔で言つてみた。でもどうしたんだろう。さつきからわたし達をみてたじクラスの男子がいきなり顔を赤くして、顔を背けたよ

小山「！ ……わかったわ。その条約結びましょ！」

小山さん？ なんで震えてるの？

雄一「そつか。破らないことを期待する」

小山「破らないわ。あんなのは一回もめんね」

雄二「？」 とりあえず話は終わった。帰るぞ」

明久「なつめ？ なんかあの人震えてたけど何かしたの？」

棗「一回だけね。わたしがアキの話してたら、そのアキのことをバカにしてきたから、ちょっとだけお仕置きしてあげたんだよ」

雄二「なるほど、トラウマか……」

明久「なるほどね……。とりあえず今日また帰らつか」

第十話　Bクラス戦？（後書き）

たぶん次でBクラスは終わるんじゃないかと
棗「はやいね。Dクラスは三つも使ったのに」
まあ、あくまでたぶんですから。

棗「それじゃ、次は第十一話　Bクラス戦？　です。またね」

第十一話 Bクラス戦？

棗サイド

今日はBクラスとの戦争だつたけど、Bクラスとの協定で今日の勝負は途中で終わりになつたよ。その協定をするために、クラスを空けてる時に誰かはわからないけど、教室を荒らされた。そんな姑息な手を使う人に負けるわけにはいかないよね。だから絶対に勝つ。

それで今は、アキとの勉強も終わつて自分の部屋にいる。わたしはバックの中にあるアレを探していいんだけど……。みつからない。アキの家に置いてきちゃつたかな？ でもアキの家では見てないよね？ 学校に忘れたのかな？

棗「うん。明日学校で探してみよつと」

それで次の日、学校についたら教室は大変なことになつてたよ。

『くそ！ 僕の聖典が…』

『俺もだ！ 聖典をこんなにしやがつて…』

『聖典をこんなに切り裂きやがつて…』

『畜生！ こんなことやつた奴は許さない！』

どうやらわたしだけじゃなくて他の人達も物が無くなつてたみたいだね。で、朝教室に行つたら盗まれた物が返還されてたらしい。ボ

ロボロになつてたり、壊されてるらしいね。なんだろ? 嫌な予感しかしないんだけど。でもなんだら? 聖典つて? まあいいや。わたしも探してみよ!。

棗「……あつた」

わたしが使つてるちやぶ台に置かれてた。壊された状態で。わたしの宝物。『ジーヴスで作ったプレスレット』が……。そんなものが宝物? つて疑問に思う人もいるだろ? けどわたしには確かに大事な物なんだ。

棗「あははは」

こんなことをしてくれたのは何処のどいつかな? いやどっこはわかつてゐるね。Bクラスだ。誰かは知らないけど……ゆうくんは知ってるかな?

棗「ゆうく。……ちよつといいかな?」

雄一「ん、何だ? ……どうかしたのか?」

ゆうくんがなんか警戒してる。まあそんなどつでもこゝよね。

棗「昨日、教室を荒らした奴が誰かわかる?」

雄一「……ああ」

棗「そいつ、教えてくれない?」

明久「なつめ、なんか怖いよ?」

それは、そうだよ。怒ってるしね。しかしFクラスにいる話に加わってない人が震えてるね。もしかして、わたしがかなりブチ切れ状態だつてわかるのかな？

棗「そんなことはないよ、アキ。それでゆうくん、教えてくれない？」

雄一「……Bクラス代表の根本だ」

棗「あのきのこ頭か……」

アイツはろくな噂がなかつたね。たしか、カンニングの常連。目的の為には手段は選ばない奴。例えば、『球技大会で相手チームに制服盛つた』とか『喧嘩に刃物は当然装備』とかだね。

棗「ゆうくん。一応確認しておくけど、間違いないね？」

雄一「ああ。間違いないな」

棗「わかつた。ちょっと滅ぼして来る」

雄一「久多羅木待て！.. 今は戦争中なんだぞ！」

棗「大丈夫、戦争なんだから、血が流れただって、何の問題もない」

雄一「大ありだ！」これは学園だ。紛争地帯と一緒ににするな

棗「なら、戦争を終わらせたら、滅ぼしていい？」

雄一「ダメに決まってるだろ？が！ だが虚めるくらいなら構わん

棗「納得は出来ないけど、わかったよ。出血も無く、暴力を受けた痕跡すら残さないよう虚めるよ」

雄一「あ、ああ……。それで、いい……」

棗「それじゃ、この戦争……すぐ終わらせようか。あははは

雄一・明久「……」

わたしは戦争が再開されるのを待つことにした。待つてろよ。すぐ潰しに行くから。わたしは教室を出た。

明久サイド

なつめが教室を出て行つたみたいだ。

雄一「おい、明久。なんで久多羅木は暴走しそうなんだ。あの状態はホント怖いからな……」

それはそうだよね。どうやってか知らないけどなつめの周りには黒いオーラみたいなのがみえてたからね。しかも誰の目から見ても確認出来るからね。表情とかは変わらないけど雰囲気が変わるし。普段可愛い女の子が、美少女が、ああなるとホント怖い。雄一ですら恐れる位だ。でもさっきのを見た感じ、ブチギレてはいるけどまだ暴走まではしていない。それが唯一の救いだ。

明久「わからないよ。何か理由があるとは思つけど……」

僕はちやぶ台の上にあるものをみた。

明久「あ～。これが理由かも」

雄二「ん？ なんだそれは？ ビーズの……ブレスレットか？」

明久「うん。昔なつめにあげたんだよ」

雄二「なるほど。それを壊されればああなるわな」

明久「とつあえずこれは直しておこうかな」

雄二「ああ、そうしておけ。で、これから仕事を話しておぐが、はつきり言つて、もうBクラス戦は勝ちが確定した。久多羅木があなつたからな。作戦も要らないだろ？ 問題は戦争が終わつた後だ。久多羅木を止めないといけない」

明久「そうだね。でもどうやって止めようか？」

雄二「お前が、命懸けで羽交い締めして、なんとかしろ」

明久「うわっ！？ 丸投げだよ！」

雄二「安心しろ。久多羅木は暴走はしないんだ。それならお前の頑張り次第ですぐ止まる。さて、そろそろ戦争も開始だな。頼むぞ

明久

明久「もし止められなかつたら？」

雄二「簡単だ。久多羅木に問題児のレッテルを貼られて、下手すれ

ば観察処分者になるだろ?』

明久「わかつた。全力で止めるよ!」

棗サイド

時間だ。戦争の開始だね。じゃあわたしも行こうか。Bクラスへ。

棗「Bクラスに到着つと」

今展開されてるフィールドは古典と数学ね。ならまずは、数学のフィールドの方を片付けよ。

わたしは数学のフィールドにいるFクラスの群れを無理やり前へ進んだ。少ししてやつと前線についた。戦つてるのはFクラスもBクラスも少数だね。わたしはそんなにちまちまやるつもりは無いんだよ。

棗「ちょっとどぞいてね」

わたしは無理やりBクラスに入り込んだ。

秀吉「久多羅木? どうしたのじゃ? なんか怖いぞ!」

棗「Bクラス代表をやつと潰したいから、すぐに戦争を終わらせるよ」

『アーッなに言つてんだ』

『そんなこと出来るわけないだろ?』

『調子にのるんじゃねーぞ…』

棗「うるせこな。このフィールドにいるBクラス生徒全員に勝負を申し込みます。サモン」

『こいつバカなのか?』

『バカなんだろ? な。そつじやなきやこの人数差でやひつとはしないだろ』

棗「そんなことはいいから、さっさと召喚するか逃げるかしてください。まあ、こっちは勝負を仕掛けているのだから、それを受けずに逃げたら敵前逃亡で補習室に連行ですけどね?」

『『『サモン』』』

数学 Fクラス 久多羅木棗 349点

VS

数学 Bクラス Bクラス十三人 平均168点

敵の召喚獣三体が襲い掛かってきた。けど……。

棗「邪魔」

三体の召喚獣を全て一振りで終わらせた。

『今何があつたんだ!?』

『わからない! 見えなかつた!…』

今のがわからないんじゃ『今の』わたしには勝てないよ？ 今の状態なら召喚獣の操作がとてもスマーズに出来るんだよね。それと今なら目視出来ない速度で動くなんて余裕よ？

棗「それじゃ残りもサクッとやっちゃいますか」

残っていた十体の召喚獣を一瞬で片付けた。最初の三体と同じように一振りで。

数学	Fクラス	久多羅木棗	349点
VS	Bクラス	Bクラス十三人	0点

『なんだアイツやばいぞ！』

『アイツを早く潰すぞ！』

『そこ』のFクラス女子に古典で勝負を申し込みます！』

ああ。獲物に向かつて歩いてるうちに違うフィールドに入つてたんだ。

棗「サモン」

古典	Fクラス	久多羅木棗	152点
VS			

古典	Bクラス	Bクラス十一人	0点
----	------	---------	----

古典は得意じゃないけど、それでも大丈夫みたいだね。

『後もう少しでつぶ。』

『これ以上は行かせない！』

『ソリで止める。』

『魔「どいてくれない？ わたしはここにいる」元用があるの』

『確かにアイツは「ミミだー だが今は戦争中で、アイツは一応」の
クラスの代表だ』

『やつだ。あの「ミミがやられたら俺達の負けだからな』

『あんな「ミミを守りたくないが、しようがないんだ。と云つわけ
高橋先生、そこのFクラス女子に化学勝負を申し込む』

『『『サモン』』』

『化学……ね。わたしの勝ちだね？』

棗「サモン」

化学 Fクラス 久多羅木棗 368点

V S

化学 Bクラス Bクラス近衛兵四人 平均197点

『数学だけじゃなかつたか……』

『選択を間違えたな……』

棗「それじゃ、終わらせるね

わたしは召喚獣を動かし、今までの人達と同じように一瞬で終わらせたら。

棗「後はお前だけ。化学のフィールドのままいいね。ところどりとFクラスの久多羅木です。Bクラスの代表に勝負を申し込みます。サモン」

根本「お前なんかが俺に勝てると思つてるのか?」

棗「当たり前でしょ。あんなことをしたことを後悔させてある」

根本「これを見ても勝てると思つてるのか?」

棗「どうじつ、「ミハ」はポケットから封筒を取り出した。

棗「それがどうしたの?」

根本「これはお前のじゃないのか?」

棗「残念ながら。わたしのは昨日、教室を襲撃されたあと無くなつて、今日、壊れた状態で戻ってきたから」

根本「ちつ。コイツはお前のじやなかつたのか。あつちだつたか

『おい、根本それは何だ? 教室襲撃つてのは?』

『壊れて戻つてきたとか言つてたが』

『もしかしていつもの卑怯か?』

『だからか。やつからあの女の子が常に黒い何かわからないものを噴出しているのが謎だつたんだが』

棗「とりあえずこれは預からせてもらひよ」

今わたしさはままで『』が持つていて封筒を持つている。

根本「! ? いつ盗つた! ?」

棗「盗るタイミングなんていくらでもあつたよ? それとさつあと勝負を受けてくれない? 早くこの戦争を終わらせたいんだ。そのあとやることもあるしね」

根本「く、くそが! ! サモン」

他の人と同じく一瞬で倒した。わたし達Fクラスの勝利。

棗「さてやつの『』。わたしはお前を潰すことにしてたよ」

雄一「明久! ! 久多羅木を止めろ! !」

明久「わかってるよ! !」

わたしあはアキに羽交い締めにされた。どうしよう? 今なら振りほどけるけど。

棗「アキ。何してるの? 邪魔しないで?」

明久「ダメだよなつめ。これ以上はダメだよ。ね、落ち着いて？」

わたしはアキに頭を撫でられながら説得されていた。羽交い締めにしながら頭を撫でるなんて以外と器用だね。納得はしてないけどアキに従つておくことにしようかな。

棗「わかつたよ。もう暴れないから離して?..」

明久「本当に?」

棗「心配ならわたしの頭を撫でて?..」

明久「ん。わかつたよ」

アキに頭を撫でられた。暴れないって言つたのに……。でもアキに頭を撫でられるとそんなことがどうでもよくなる。わたしは気持ちよくて、う~ん、アレだ。顎を撫でられてた猫が気持ちよさそうに目を細めてる状況、が今のわたしの状況だつたりする。ちなみにこの時のわたしの写真をムツツリー二が撮つてたらしいね。しかもその写真が過去最大の売上を叩き出したとかなんとか。それとムツツリー二がちの海に沈んでた。

雄一「ふう。なんとかなつたか。よくやつた明久。さて、Bクラスの男子も女子も、久多羅木をみて顔を赤くしてないで戦後対談といこうか? 本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵なちやぶ台をプレゼントするとこりだが、特別に免除してやらんでもない」

ゆうくんの発言に、周りがざわついてるね。

雄二「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。
ここがゴールじゃない」

秀吉「うむ。確かに」

雄二「ここはあくまで通過点だ。だからBクラスが条件を呑めば解放してもうかと思う」「うう」

根本「……条件はなんだ」

雄二「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

根本「俺、だと？」

雄二「ああ。お前には散々好き勝手やってもらつたし、正直去年から田障りだったんだよな」

普通なら誰かしら弁護するんだろうけど、やつぱり誰もしないね。そう言われる」とをやつてきたんだから。

雄二「そこで、Bクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行って、試合戦争の準備が出来てると宣言して来い。ただしあくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

根本「……それだけでいいのか？」

雄二「ああ。Bクラス代表がこれを着て言つた通りに行動してくれたら見逃そう」

ゆうくん。それをどこで手に入れたの？ それ、ここに女子の制服だよね？

『あ～。ちょっといいか？』

雄一「なんだ？」

『さつきの女の子があんなになつたのはそこのゴミが理由か？』

雄一「ああ。そうだ。想い入れのある大事なものを壊されたよつでな」

『あのゴミ最低ね！』

『女の敵ね！』

『いえ！ 人類の敵ね！』

『ああ。それでか。あの女の子のチートみたいな強さわ』

雄一「まあ、そうだな。普段はあんなじやないからな」

『てことはなんだ？ 僕達はあなたのゴミのせいで、勝ち目の戦いをやらされてたのか？』

雄一「そうなるな」

『そつか。……皆聞いたな！ 僕達は下クラスの出した条件を呑むぞ！』

『了解だ！』

『任せて…』

今の人気が代表の方がこのクラスの為になるんじゃないの？

『相手があのゴミだからな。手荒な方法を使って構わん。必ず実行させろ』

棗「ゆうくん。もう、戦後対談も終わつたみたいだし、わたしは帰るね

雄二「ん？ おお。お疲れ」

明久「待つてなつめ。僕も帰るよ」

今は帰宅中。そういうえばBクラスでの戦いを見てた人達から殲滅姫とか殲滅天使なんていう二つ名をつけられたよ。しかもその二つ名は広がりつつある状況。どこまで広がるかわからないから怖いね……。それと奪い取つたやつはみいちゃんのだったよ。

明久「そういえば、はい。これ」

そういうアキが出したのは……。

棗「あれ？ でも……」

壊れたよね？

明久「さつき僕が直しどいたんだよ。ところがで、なつめ、どう

ぞ」

棗「あ、ありが、とい」

わたしはアキが直してくれたブレスレットを受けとった。今わたしは恥ずかしさと嬉しさで顔が真っ赤だよ。恥ずかしさの理由は直すところを全く考へることがなかつたこと。嬉しさは直つてまたわたしのところにあるということ。

棗「あれ？ ブレスレットのサイズがかわってる」

明久「ああ、なつめに合つようにしてみたけど、計つたわけじゃないからもしかしたらまたダメかもだけど」

わたしはブレスレットを着けた。それはサイズがちょうどよかつた。

棗「アキがくれたブレスレット、はじめて着けられたよ」

明久「あはは、そうだね」

わたしは宝物を着けたまま帰宅した。

第十一話　Bクラス戦？（後書き）

棗「今回の、なんか無理矢理な感じがしない？」

しない？　どころか無理矢理です。

棗「言い切っちゃうの？」

まあいいじゃない。そんな無理矢理な状況でも宝物はなんとかしたんだから。

棗「まあ、それは嬉しいけどさ。さて、次は第十一話 想い出 の予定です。またね」

第十一話 想い出

わたしは今困っている。自分のいる場所が全くわからない。まあそれも当たり前なんだけどね。ここに来たのはつい最近なんだし。一人で出かけたのは間違いだつたかな。ここまででもうわかつてもらえてると思うけど。現在わたしは迷子です。人に道を聞いてみようと思つても周りには誰もいないし……。

棗「どうしよう。泣きたくなってきた……」

さつきも言ったようにわたしはここに来たばかり。お父さんの仕事の都合で引越しをしなければいけなくなつたの。うんまあ、それで会社と交渉してくれたのか、もともとなのかわからないけど幼稚園を卒園するまでは引越しはしないって。それで幼稚園を卒園して、仲のよかつた友達お別れ会をやつて、数日後、わたしは引越しをすることになつた。はつきり言つてしまえば引越しはあまり乗り気ではない。なんでわざわざ友達と別れなければいけないのかとも思う。お父さんにそのことを言つたこともある。そのときお父さんは困ったような顔をしてたつけ。そして必ず『確かにこここの友達とはお別れになるけど、それでも友達なのはかわらない。それに向こうでしか得られないものもある。とても大切なものがみつかるかもしれない』

そして引越しが終了して、ちょっと退屈になつてきたから、引越し始めたばかりのまだよくわからない場所を少し散歩でもしようかないと。親に出かけることを告げて家を出て、最初の状況になる。

棗「もう小学生になるんだから一人でも大丈夫つて思つて一人で來たけど、失敗したかも。兄さんも連れて来ればよかったな」

わたしひこの春から近くの小学校に通うことになつてゐる。

棗「でもどうしようかな。この状況で一番の行動は人に道を聞くのが一番だらうけど。……本当に誰もいないしな」

そんなことを言いつつ周りを見渡していたら一人現れた。わたしと同じくらいの背丈で髪は茶色。たぶん年は同じくらいだよね。あ、向こうがこっちに気付いたみたい

「どうしたの？ なんか困ったような、泣きそつなような顔をしてるけど」

棗「えっと、ちょっと道がわからなくて」

「そっか～。じゃあ案内するよ。どうしてくの？」

棗「え？」

しまつた！ 自分の家の住所を知らない！ 自分の家の住所が書かれてるものはない。手詰まり……ね。

「どうしたの？」

棗「えっと、実は家に帰りたいんだけど住所がわかるものがなくて……」

「ん～、そうか、困ったね」

人が見つかっても住所知らないから結局聞けないじゃん。ああどう

しょり。

わたしあとひといひ泣いてしまつた。

「えー? ちよつといびついたのー?」

男の子は急に泣き出したわたしにびっくりしたらこいかわからないうだつた。

棗「やつと人にあえて……、……」れで帰れると思ってたから

「ん~。あ、そうだ」

そういうて男の子はポケットから何かを取り出した。

「これあげるよ

棗「これはブレスレット?」

「わうだよ

わたしはその男の子が取り出した『ビーズで作られたブレスレット』をじつと見て、受けとった。それで着けてみようとしたけど小さすぎて着けられなかつた。

棗「小さく……」

「あはは……、『めんね。作るときにはサイズは全く気にしてなかつたからだね』

棗「え、作った？」

「やうだよ」

わたしは驚いた。着けられないけど作れるんだね。それになんだけ この男の子と話してると落ち着く。さっきまでの気持ちが落ちてい た状況はどうにいったのか。わたしはブレスレットをしっかりと握 つてみる。うん。気のせいかもしれないけど勇氣もやる気も湧いて くる。

「アキ君、どうかしたのですか？」

また誰か来た。今度は女人だ。女人はわたしの顔をじっと見て。

「アキ君、女の子を泣かせるなんていけませんね」

「ちょっと待って！？ 違うから！…」この子が迷子らしくて

「迷子なんですか？」

棗「ま、はい」

「なら案内しますよ。住所がわかるものはありますか？」

棗「すいません。ないです」

「そうですか。それではここまでビのよつに歩いてきたか道順は覚 えてますか？大体でいいので」

棗「え？ はい。ある程度は……」

「そうですか。それでは」」でボーとしてもしようがないですし、来た道を少しづつ戻つてみましょうか。では、いきましょう」

そういうて女のはわたしの手を取つて歩き出した。さつきの男の子も一緒に。わたしはいろいろな話をしながら二人と一緒に歩いていたら、前に知つている人が現れた。わたしの双子の兄。

棗「あ、兄さん！」

兄さんがじつに氣付いたみたいだ。もう大丈夫かな。

棗「あの、ありがと」」ぞいました。家族に会えましたのでたぶんもう大丈夫です」

「やつですか。それではお別れですね」

「じゃ～ね～」

わたしは兄さんに合流して家に帰つた。『やつや～兄さんも』」りくんを散歩していたみたい。

今は自分の部屋にいる。わたしは思い出していた。思い出すのは毎間の男の子。

棗「また会えないかな？ そういえば名前知らないや」

わたしは少しの時間しか一緒にいなかつたけど、あの男の子のことが気になっていた。

棗「名前聞いておけばよかつたな……」

わたしが知ってる男の子の名前は、女人が言つてた『アキ君』と言つことくらいしかわからない。

棗「アキ……か」

ビーズのブレスレットを握つてみる。

棗「うーん。なんかわかんないけど、また会えるような気がする」

なんの根拠もない。でも確かにわたしはそう思えた。そして男の子に貰つたブレスレットはわたしの宝物にした。それくらい大事な物。

あれから数日、あの男の子とは会えてない。そして小学校の入学式の日、入学式が終わつたあと、教室で簡単に自己紹介をすることになつた。

葵「水無月葵です。よろしくお願ひします」

自己紹介は順調に進んでいつてある男の子の番になつた。

明久「吉井明久です。よろしくお願ひします」

棗（あ！　あの子だ！）

わたしは嬉しかつた。またあえたから。学校が終わつたあと話しかけたら向こうも覚えてくれていた。わたしとアキが仲良く話してたら親が來た。わたしの親と知らない人。その人はどうやらアキの親らしい。なんか親同士で仲良くなつたとか。で、話を聞いてみたら

実は家は隣回。よく今まで会わなかつたと思ひへりこだよ。

棗「うれからよひしけね。アキ」

引越しをして友達とお別れしなくなつたばかり、今は引越ししてよかつたと思つてゐる。

わたしは田を覚ました。

棗「すいぶん懐かしい夢を見たよ。やつぱり昨日あんなじがあつたからかな?」

今日は土曜で休日。それで昨日はBクラスの後半戦があつた。そこでプレスレットが壊されて、直してもうつて。そしてわたしは宝物を見た。

棗「さて、動いたかな。どうせアキのことだから、休日だからってまだ寝てるはずだし、起っこにでもいこうかな」

わたしはアキを起こしに行くために行動を開始した。

第十一話 想い出（後書き）

森「おやか」のところの話をやるのは思わなかつたよ」

「いつまでもやるタイミングをみつけるのが大変でしたけどね。

森「恥ずかしいな～」

まあまあ昔の話もたまにはいいもんです。

森「さて、次は第十二話 Aクラス の予定です。またね」

第十二話 Aクラスでの再会

Bクラス終戦から土日を挟んだ月曜。今わたしはアキと一緒に学校に向かって歩いている。

明久「今日は丸一日補給試験だね~」

棗「うん、そうだね。たぶんBクラス戦の時と点数はそんなに変わらないと思つけどね」

明久「僕は今回はちょっと自信あるかも」

棗「あはは、そっか期待してるよ」

今日は丸一日補給試験を受けて、次のAクラスの準備をする。やつとここまできたね。わたしもテスト頑張りう。

そして教室について。

雄一「おう、明久。相変わらず早いな」

秀吉「おはようございます」

瑞希「おはようございます」

美波「アキ、たまには遅刻でもしたら?」

みなみはBクラス終戦後にアキを脅して、呼び方を変えさせたらしい。

明久「おはよう。それと美波、それはおかしいんじゃない?」

棗「おはよう。既も早いね

瑞希「はい。次の戦争の為に少しでも勉強しておこうと思いまして

齧「あはは、やる気こづぱいだね

確か一騎打ちのはずだけど、この準備は無駄にならないうつな気がする。

雄二「頼もしいな

秀吉「まつたくじや。ワシも頑張りんとの」

それからじめじめ話をしてたら先生が来て、HRが始まった。それから補給試験を受けて、準備は整った。宣戦布告は明日あるらしい。

翌日わたし達は教室でゆうくんからのACKラス戦の説明を受けていた。

雄二「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言っていたにも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力があつてのことだ。感謝している」

ゆうくんがあれね。珍しいね。

明久「ゆ、雄二、びしだのを。らしくないよ。」

雄一「ああ、自分でもやつ思つ。だが、これは偽りやる俺の気持ちだ」

「やへ。 むづくんが素直だ。

雄一「ここまで来た以上、Aクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじやない現実を、教師どもに突きつけろんだ！」

『おおーー』

『やうだーー』

『勉強だけじゃないんだーー』

いやーこのクラスって、士気の上り下りで結構簡単かもね……。

雄一「皆ありがと。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

やつと本題だね。一騎打ちに持つてるのは知つてるけど、どうやって戦うかは知らないんだよね。

『どうこうことだ?』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

雄一「落ち着いてくれ。それを今から説明する。やるのは当然俺と

翔子だ

明久「ねえ雄一、霧島さんって姫路さんより強いよね。一騎打ちでなんとかなるの？」

雄一「明久の疑問はもつともだ。翔子は学年首席。まともにやつたら勝ち目はないかもしない。だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだつただろう？ まともにやりあえれば俺達に勝ち目はなかつた。今回も同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない。俺を信じてくれ。過去に神童と言われた力を今皆さん見せてやる」

『『おお――――――』』

皆のテンションは最高潮だね。まあ、今まで不利な状況をなんとかしてきた人の言葉だからってのもあるんだろうけどね。

雄一「さて具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

秀吉「フィールド？ なんの教科でやるつもじゅうや？」

雄一「日本史だ」

日本史？ 別に苦手だとかは聞いたことはないけどな……。

雄一「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、百点満点の上限あり、純粋な点数勝負だ。俺がこのやり方を探った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ。その問題は『大化の革新』」

秀吉「何年におきた、とかかのう?」

雄一「その通りだ、その年号を問つ問題が出たら俺達の勝ちだ

瑞希「あの、坂本君」

雄一「なんだ姫路」

瑞希「霧島さんとは、その……仲がいいんですか?」

雄一「アイツとは幼なじみだ」

ああ、なるほど。さつきから霧島さんのことをアイツとか翔子って呼んでたからちょっと疑問には思つてたけど……幼なじみかあ。

『総員狙え――!』

雄一「なぜ上履きを構える!?」

全男子がゆうくんに上履きを構える。それと全男子つて言つたけどアキといでちやんは除くだよ。

『黙れ、男の敵! Aクラスの前に貴様を殺す』

雄一「ちょっと待て!――」このクラスにはもう一人美少女の幼なじみ持ちがいるじゃないか!―― アイツはいいのか!?

『アイツも許せないが……』

『吉井への制裁か、久多羅木さんに嫌われるか。比べるまでもない』

『だから我々は吉井には手を出さない!』

雄二「なんて理不尽な……」

瑞希「あの、吉井君」

明久「ん? なに、姫路さん」

瑞希「吉井君は霧島さんのことビリ思いますか?」

明久「そりや美人だよね。でも……」

瑞希「……」

明久「なんで姫路さんは僕に攻撃態勢をとるの!? それに美波はその持ち上げた教卓をどうするつもりー?」

明久「なんで姫路さんは僕に攻撃態勢をとるの!? それに美波は進んでる……。とりあえず助けよう。

棗「ほら、一人とも落ち着いて」

瑞希「どいてください、くーちゃん。吉井君におしおきしないといけないんです」

美波「そいつよ、じきなさい」

棗「なぜする必要があるの?」

瑞希「吉井君が霧島さん」に気があるみたいでしたから」

美波「そうよ。これは必要なことよ」

棗「あのねえ。確かにアキは美人だとか言ってたけど、そんなのじや攻撃する理由にはならないよ。それにアキはまだ何か言おうとしてたみたいだけど、それを一人の都合がいいところで遮つて攻撃しようだなんて。何考てるの? そんなことでアキに危害を加えないでくれる?」

瑞希・美波「…………」

うん。わかってくれたかな。

雄一「とにかくだ! 僕と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる。僕はそれを利用してアイツに勝つ。そうすれば俺達の机は」

『システム』デスクだ!』

そしてAクラスへの宣戦布告の時にわたしとアキはある人をみつけた。髪は赤茶色のショートで目は水色。ややつり目にメガネをかけた女の子。

明久「え!? な、なんで!?

棗「どうしているの?」

葵「やあ、久しぶりだね」

わたしとアキが小学生の頃に知り合つた幼なじみの水無月葵。でも、ここにいるのはおかしいんだけど。

棗「確かに入学するのがかなり大変なレベルがかなり高い進学校だかに行つたんじや？」

葵「うん。行つたよ。ただあそこは眞面目君ばかりで退屈だぞ～。それで面白がうなこ～に転校してきたわけ。今年の春からこ～の生徒だよ。よろしくね」

明久「うん。またこ～からもよろしくね」

棗「こ～からまたよろしくね」

葵「しかしまあ、こ～にアキとなつめがいるとはね。転校したのは正解かな。面白くなりそうだよ」

明久「あはは、お、お手柔らかに……」

棗「そうなるとあおいちゃんはAクラスなんだね」

葵「まあ、当たり前と言えば当たり前じゃない。なつめは……Fクラスだっけ？」

棗「そうだよ。アキと一緒にいたかつたからね」

葵「相変わらずだね～。こ～とは私達に戦争をしかけてるクラスだね」

明久「うん。 そつなるね」

葵「二人が相手だからって手は抜かないからね?」

棗「臨むところだよ」

雄一「交渉は成立した。 教室に戻るぞ」

明久「そういうのからじゃあね」

棗「またあとで」

葵「おお、またあとでな」

わたし達はおおこちやんと話してたからあとで交渉の内容をゆうべ
んから聞いた。五対五の勝負になつたらしい。兄さんとおおこちや
んは出てくれるだらうし、かなりきつくない?

学年首席は霧島翔子……」の情報、認識はもつ古いかもしけない。

第十二話 Aクラスでの再会（後書き）

葵「ところで、今回から登場の葵です」

棗「ホントに久しぶりだね」

葵「そうだね。細かいことはまたキャラ紹介書いてくれるらしいからその時で」

棗「あはは」

葵「んじゃまあ、次回、第十四話かな？ Aクラス戦 らしいね。
またな」

第十四話 Aクラス戦？

Aクラス戦が始まる。勝負は五回勝負で三勝した方の勝ち。科目選択権はFクラスが三回あるらしい。有利そうに見えるけど、きついよね～。

雄一「さあ、お前ら勝ちにいくぞ」

わたし達は誰が選抜されたかと言うと、わたし、アキ、ムツツリー二、みいちゃん、ゆうくんの五人。ムツツリーと一緒に期待だね。

高橋「それでは一人目の方、どうぞ」

学年主任の高橋先生だ。はじまるね。さて向こうは一人目は誰かな？

久保「僕が行こ」

雄一「なに！？ いきなり学年次席だと？ なにを考えている。まさか圧倒的な戦力差を見せ付けてFクラスの士気を落とすのが目的か？ まあいい、姫路頼む」

瑞希「あ、は、はい」

棗「頑張ってね、みいちゃん」

瑞希「はい。頑張ってきます」

棗「ゆうくん、その考えはたぶん当たりだと思つたけど、違つと思つ

よ

雄二「？」どういふことだ？」

棗「簡単だよ。久保君よりも強いのがいるつてこと」

明久「そうだね。あの一人は確實に久保君より強いだらうしね」

雄二「？」明久、どういふ意味だ」

明久「Aクラスには昴とあおいがいるからね」

雄二「葵つてのは知らないが昴つてのは、久多羅木昴だろ？　アイツは確かに学年の五位～十位くらいの成績じゃなかつたか？」

棗「それがそれでもないんだよ。兄さんは順位が出る試験ではいつも手を抜いてるらしいから……。実際は学年首席か、それに近い成績があるはずだよ」

雄二「まさか、それは予想外だな……。葵つて言つるのは？　去年名前を聞いたこともないが？」

明久「それはそうだね。一年になつてから転校してきたって言つてたし」

雄二「その葵つてのはどんな奴なんだ？」

棗「わたしとアキの幼なじみ。それで得意科目は無し、苦手科目も無しのオールラウンダー。たぶんだけど、霧島さんを超えるんじやないかと思つてる」

雄二「なんだと！？ まさか、予想外すぎだろ……」

明久「それじゃあ、一通り話したし姫路さんの方をみようか

棗「それもそうだね。みいちゃんを応援しないと

高橋「それでは科目はどうしますか？」

久保「総合科目でお願いします」

高橋「わかりました。それでは……」

高橋先生が総合科目のフィールドを張り、一人は召喚して、一瞬で勝負はついた。

総合科目	Fクラス	姫路瑞希	4409点
VS			
総合科目	Aクラス	久保利光	3997点

『マ、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『IJの点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！』

まあ騒ぐのも無理ないよね。Aクラスでも滅多にみれない点数だし
ね。

瑞希「ただいまです」

明久「うん。 おかえり」

一回戦はAクラスが科目を選択したけど、Fクラスが勝つたね。これならまだ勝ち田はあるね。

雄一「…………」

瑞希「どうしたんですか？」

雄一「ん？ ああ、いや、なんでもない」

れつきの話で考えてるのかな？」

棗「安心してゆづくん、もしその一人に勝てなくとも、他の戦いで勝つて三勝すればいいだけなんだから。もうみいちゃんが一勝してからあと一勝でいいんだからね」

雄一「…………そうだな」

高橋「それでは一人田の方、どうぞ」

Aクラスから出てきたのは、髪は黒色のショート、田は黒色、普通に限りなく近いけど垂れ田の男の子。わたしの兄さん。

昴「そんじやま、やりますか」

雄一「よし、明久。任せやる。頼りにしてこる」

明久「ふう……。やれやれ、僕に本気を出させてこと？」

ゆづくのアキ弄りだね。だいぶ落ち着いたのかな。

雄一「ああ。もう隠さなくともいいだろ?」この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか?』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ?』

なんでみんな、そんなに真面目に議論してるの?

昴「ん? オオ! 明久が相手か。それで本気ってのは?」

明久「そうだね。実は僕、左利きなんだ」

昴「知ってるが、それがどうした?」

明久「しまった! 幼なじみ相手じゃこれは通じない!」

幼なじみじゃなくても通じないよ。あおこちゃんなんか爆笑してるし……。

昴「まあとりあえず、久しぶりだな

明久「うん。久しぶりだね昴」

昴「ホントに久しぶりだな。てっきり避けられてるのかと……」

明久「普段あわないのは、昴との行動時間が合わないからじゃないかな」

昴「まあそれもそうだな」

明久「それで科目はどうちが選ぶ?」

昴「そうだな。明久、そっちが決めてくれ」

明久「わかったよ。高橋先生、数学をお願いします」

高橋「わかりました」

アキ、本気で言つてゐるの? わたしと同じように兄さんも数学は得意なんだよ?

昴「それじゃあ、始めるか。サモン」

兄さんのデフォルメされた召喚獣で、大剣を持って鎧を着ている。装備はみいちゃんのに近いかな。そして腕には黒の腕輪。たしか特殊系だつけかな?

明久「うわー、やっぱり当たり前のようすに腕輪装備してゐるよ。つと、サモン」

数学 Fクラス 吉井明久 134点

VS

数学 Aクラス 久多羅木昴 613点

雄二「明久。バカのお前が三桁なんて、いつそんなんに取れるようになつた？ カンニングか？」

明久「失礼だよ、バカ雄二！ そんなことするわけないでしょ。これでも戦争を始めた日から毎日勉強したんだから。かなりなつめに助けられたけど」

雄二「なるほど、久多羅木が教えてたのか。明久には効果ありそうだな」

昴「明久やるじゃないか。少しは楽しめるかな？」

葵「へえ、あのアキが勉強をね〜」

昴「明久は俺の腕輪の力がどんなのか知つてるつけ？」

明久「いや、特殊系だつてことしか知らないよ」

昴「なら見せてやるよ。腕輪の力」

明久「いいの？ 腕輪使うのって点数消費するんでしょ？」

昴「問題ない。それじゃ俺は、俺から見て左の方向に攻撃するから、絶対に避けろよ。全力でだ。じゃないと消し炭になるぞ」

そういうつて腕輪の力を使う。腕輪が光つて、攻撃が始まつた。アキはもちろん言われたとおり全力で避けた。わたしも兄さんの腕輪の力を始めてみたけど、これは反則じゃない？ 見た目は普通の砲撃系みたいだったけど、大きさがおかしい。フィールドの半分を普通に埋め尽くす程の黒い砲撃。

明久「な!? なにこれ! ? 範囲がどんでもないんだけど! ?」

昂「だから言つたる。全力で避けろつて」

明久「でもこんな高火力だし点数も結構減つてゐるはず……」

数学 Fクラス 吉井明久 134点

VS

数学 Aクラス 久多羅木昂 563点

明久「たつた50点! ?」

雄一「範囲は広いけど威力は低いとかか?」

昂「いや、威力も高いぜ。最低でも300は削れるからな」

棗「その威力で、そのコストはおかしくない?」

昂「まあ、普通ならおかしいな。特殊系の腕輪つてどういつものか
知つてるか?」

棗「いや、知らないけど……」

昂「まあ、あとで教えてやるよ。あんまり聞かれたくない話かもだ
しな」

明久「それはいいけど、そうなると腕輪の力を連續で使われるとこ
つちはなにも出来ないじゃん」

昂「安心しろ。腕輪は使わない。使うとすぐ終わつてしまらないか

らな

明久「それはよかつたよ。じゃあ始めよつか」

兄さんの召喚獣がアキの召喚獣に大剣を振り下ろした。それをアキは左に避けて兄さんの召喚獣に三回攻撃をいれた。兄さんは振り下ろした大剣を横に振つたけど、アキはそれを後ろに下がつて避けた。

数学 Fクラス 吉井明久 134点
VS
数学 Aクラス 久多羅木昂 467点

昂「召喚獣の操作は難しいな」

明久「あんまりダメージになつてない……」

そんなことを言つてから、また一人は動き出した。そしてアキが優勢で進んでた戦いにも変化があつた。兄さんの召喚獣の攻撃がアキの召喚獣にかすつたみたい。

明久「ぎやああああ――！　斬られた場所が熱いし痛い――！
！」

葵「なあ、昂。アキに何があつたの？」

まあ、疑問に思うのは当然だよね。なにせアキは今、叫びながら床をのたうちまわつてるんだから。

昂「ん？　ああ、明久は観察処分者でな。召喚獣が受けたダメージの一部を召喚者にファードバックするつていう楽しい機能がつくん

だ

葵「なるほど。それは楽しい機能だね」

明久「全然楽しくないよ！！」

数学 Fクラス 吉井明久 0点

VS

数学 Aクラス 久多羅木昂 78点

雄二「かすっただけで0点になつたか。しかしあ明久がここまでやるとは思つてなかつたがな」

棗「おかえりアキ」

明久「ただいま。うう……体が痛い」

瑞希「大丈夫ですか？」

明久「うん。なんとか」

棗「それにしても、アキがあんなに点数取れてるとは思わなかつたよ」

明久「実はあれだけ取れてるのは数学だけなんだよね。他は80～90つてところだし」

雄二「まさか明久がそんなに取れるとはな。久多羅木と一緒に勉強したのは、かなりいい方向に進んでるな」

さあ、これで一勝一敗。科目の選択権は残り一回。まだあおこりや
んもいるし……どうなるかな。

第十四話 Aクラス戦？（後書き）

昂「今回からの昂だ」

棗「ヒーリングの兄さんも登場だね」

葵「それで昂のキャラ紹介はいつなるの？」

昂「葵と一緒にやるみたいだな。Aクラスが終わってからしげーぞ」

棗「まあやうじやないとあおこちゃんのネタバレになっちゃうしね」

葵「そうだな」

棗「それでは、次回 第十五話 Aクラス戦？ です。またね」

第十五話 Aクラス戦？

高橋「それでは、三人目の方どうぞ」

今わたし達は一勝一敗、ここからは出来るだけ落としたくないよね。
さて、次は誰が行くのかな？

康太「…………（スック）」

ムツツリー二だね。ムツツリー二で、はじめて教科選択権が活きる
ね。だつてムツツリー二はたつた一つの科目で総合点数の8割を獲
得してゐるんだから。

愛子「じゃ、ボクが行こうかな」

ん？ 誰だらう？ 薄い色の髪をショートにしたボーイッシュの女
の子。あまり見たことない人だな。

愛子「一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね」

高橋「教科は何にしますか？」

康太「…………保健体育」

そうさつき言つた、総合点数8割獲得のムツツリー二得意科目。保
健体育。

愛子「土屋君だつけ？ ずいぶんと保健体育が得意みたいだね？
でもボクだつてかなり得意なんだよ？ ……君とは違つて、実技で、

ね
」

うーん。冗談だと思つけど……かなりの問題発言だね。ムツツリー
「なんか想像、妄想して鼻血を出してるし……ありえない勢いで…
…」。

愛子「そつちのキミ、吉井君だけ? 勉強苦手そつだし、保健体育でよかつたらボクが教えてあげようか? もちろん実技で」

棗「アキにその必要はないよ。わたしが一緒に勉強するから。……
もちろん、じ、じ、実技で……」

しまつたーーー! わたしはなにを言つてゐるのー? しかも恥ずかしくて実技でつて言つとき、わたしはいつつむいて、上田遣い + 泪目。それで顔を赤くしてたし。

『ブシヤアアアアーーーー!』

ブシヤアアアアーーー? わたしは『氣になつて音の方をみてみたら、ムツツリーーーが血の海に沈んでた……。なにがあつたの? FクラスとAクラスの大半もムツツリーーー程ではないけど鼻血をだしてるし。

棗「ねえゆづくん。なんか周りが大変なことになつてゐるナビ、ビリ
かしたの?」

雄一「無自覚か」

意味がわからぬ?」

明久「え、あー、えっと、そういうことなんですよいません」

愛子「それは残念。…… そつきの破壊力ははんぱじゃないね。……」

美波「アキちょっと来て」

瑞希「吉井君、ちょっと来てください」

アキは教室の外に連れて行かれて……。

明久「どうしたの二人とも。ちょっと待つて！ その間接はそっちにまがギャアアアア――――――！」

アキの悲鳴が聞こえた。全くみなみとみいちゃんは……。

棗「みいちゃん、みなみ。ちょっと来て？」

わたしは一人を教室の外に連れて行き……。

瑞希・美波「ちょっと、なにすキャアアアア――――――！」

お仕置き終了。わたしは廊下で倒れてたアキを引きずつてAクラスに戻った。

愛子「あ、あはは……。なんか大変なことになってるね」

葵「Eクラスは面白そうだな」

高橋「え、えーと。はじめていいですか？」

康太「…………問題ない」

いや、大ありでしょ。いまだに鼻血は出っ放しじゃん。

高橋「それでは、はじめてください」

愛子「はーい。サモンっと」

康太「…………サモン」

工藤さんの召喚獣は巨大な斧を持っている。そして腕輪持ち。

愛子「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤さんの召喚獣がムツツリーニの召喚獣に襲いかかるけど。

康太「…………加速」

ムツツリーニが腕輪の力を使って終わらせた。

愛子「…………え？」

康太「…………加速、終了」

保健体育 Fクラス 土屋康太 572点

保健体育 Aクラス 工藤愛子 446点

高橋「これで二対一ですね。次の方どうぞ」

葵「やつましょつか」

棗「ゆづくと、行つて来るね」

雄一「おお、行つて来い」

葵「いや～楽しみだね、なつめ」

棗「あんまりあおこちやんと点数勝負はしたくないんだけどね」

葵「そういうなよ。そのかわっこの学校の誰よりも召喚獣の操作に不慣れなんだからね」

棗「まあ、やうだけじゃ。……科田はあおこちやんが選んでね」

葵「わかったよ。どうようかな? ……何がいいかわからないし、そうだね。高橋先生、総合科目でお願いします」

高橋「わかりました」

総合科目……こぐらーつが召喚獣の操作に慣れてるからって、それは絶望的なんだけど……。

棗・葵「サモン」

あおこちやんの召喚獣はあおこちやんのデフォルメされた姿で腕に黒の腕輪。あおこちやんまで黒の腕輪なんだね……。それで装備が

……。

棗「なに? その装備?」

葵「私も最初驚いたよ。でもまあ、これもありでしょ」

高得点者とは思えない装備だった。Tシャツとジーンズのラフな格好で、右手にハリセン、左手に召喚獣の一倍くらいあるペーパーハンを持っていた。

棗「そうだね。有りつて言えば有りだよね」

そしてわたし達の点数が表示される。

総合科目 Fクラス 久多羅木棗 2164点
VS

総合科目 Aクラス 水無月葵 6551点

『『『なに――――――!』』』

わたしとアキと兄さんと高橋先生以外のすべての人の叫び。

わたしとアキはあおいちゃんがこれくらい取るのは容易に予想出来てたから驚かない。兄さんもたぶん同じ。

『なんだあの点数は――』

『霧島翔子を超えてるぞ!』

『あんな点数はじめてみた』

雄一「翔子を超えるかもとは聞いてたが、これほどとは……」

葵「何で監獣こでるの?」

棗「あおこわやんの点数がすゞこからだりうね」

葵「そつかね~。これ、結構不調だつたんだけどな
これで不調つて、何点取るつもりなの?」

葵「腕輪の力もどんなのか気になるけど、まずは召喚獣の操作に慣
れたいしね。さて、やるか」

あおいちゃんの召喚獣がピコハンを振り下ろしてきた。わたしはそれをバックステップで回避した。そこにハリセンで突きを繰り出してきたけど、刀でそらして隙だらけになつた召喚獣に攻撃したけど。

葵「まだだ」

あおいちゃんの召喚獣は体を捻つてピコハンで攻撃してきて結局二人ともダメージになつた。一応わたしはこの一回で五発のダメージをあたえたよ。

総合科目 Fクラス 久多羅木棗 1364点

VS

総合科目 Aクラス 水無月葵 4973点

棗「たつた一発でこのダメージ?
でかすぎだよ……。」

葵「うにゅ~。やっぱり操作の経験の差つて厄介だな」

経験の差？ 今見て、あるとは思えないけど。ほとんどの人はそこで体捻つて攻撃なんてしてこないよ？ ていうか出来ないよ？

葵「それじゃ 続きを楽しもうか」

今度はハリセンとピコハンを同時に振り下ろしてきた。それを刀でおさえただけど……。

棗「防御しても削られた」

点数差があるってきついね。もつこいつなつたら全部避けて、確実安全にダメージを入れていかないと。

それからわたしはおこちゃんの攻撃を避けて、攻撃をし、また逃げる……の、まあ、ヒットアンドアウェイを繰り返した。

総合科目	Fクラス	久多羅木棗	966点
VS	Aクラス	水無月葵	2257点

葵「うん。大体召喚獣の操作はわかつてきたかな。さて次は、お楽しみの腕輪だね」

そういうとあおこちゃんの召喚獣の黒の腕輪が光だした。

葵「それで、どんな力かな〜ん」

そして力が発動して光が降ってきた。上を見てみるとそれは一つだけじゃない。

フィールド全域。その無数にある光が雨のように降ってきた。フィールドが光に包まれて、何もわからない。少しして光がおさまってきて、フィールドが見えた。「ここにはあおいちゃんの召喚獣しかいなかつた

総合科目 Fクラス 久多羅木棗 0点
VS

総合科目 Aクラス 水無用葵 257点

わたしの負けだった。

葵「これが私の腕輪の力ね。うん、よさそうだ。自分の点数が200点もなくなってるのは気になるけどね」

棗「うめん。負けちゃった」

雄一「なに、負けたのは悔しいかもしれないが、いい試合を見させて貰った」

明久「お疲れ様。なつめ」

棗「うん。ありがと」

これで二対一、科目選択権はこちらが後一回ある。これでゆうくんが勝てばFクラスの勝ちだ。

第十五話 Aクラス戦？（後書き）

葵「今日は私の番だつたね」

棗「そうだね。ていうかあの装備と腕輪なに？」

葵「ああ、私も知らないよ？」

昴「装備の方はわからんが、腕輪の方はまあ、それは後々」

葵「えっと、次は……第十六話 Aクラス戦？ だね。それじゃ、
またね」

第十六話 Aクラス戦？

現在一「対」一の引き分け状態。あと一回で戦争の勝敗が決まる。

高橋「最後の一人、どうぞ」

翔子「……はい」

Aクラスからは霧島さんが出てきた。つちのクラスは当然。

雄二「俺の出番だな」

高橋「教科はどうしますか？」

雄二「教科は日本史、内容は小学生レベルで方程式は百点満点の上限ありだ！」

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確定じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるが……』

ゆうくんが言つてた勝てる可能性。あとはゆうくん次第だね。

高橋「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待つていてください」

小学生レベルの問題まで用意出来るんだもんね……。この先生もあ

る意味、なんでもありだよね。

棗「 ゆづくさ。 あとは任せたよ」

明久「 そつだね。 任せたよ」

雄一「 ああ。 任せる」

ゆづくと手を握って、わたしは頭を撫でられた。

康太「 ……（ビック）」

ムジシロー「 はペースサインをゆづくに向かた。」

高橋「 では、最後の勝負、日本史を行います。 参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください。 皆さんにはマイクでモニターを見ていて下をこ」

ゆづくと霧島さんと高橋先生は視聴覚室に向かっていった。

高橋「 では、問題を配ります。 制限時間は五十分。 満点は100点です。 不正行為等は即失格になります。 いいですね？」

翔子「 ……はい」

雄一「 わかつてないわ」

高橋「 では、始めてください」

瑞希「 吉井君、こよこよですね……！」

明久「そうだね。いよいよだね」

瑞希「これで、あの問題がなかつたら坂本君は……」

棗「その時はその時でしょ」

明久「まあ、そうだね」

棗「……あつたね」

ゆうくんが言つてた問題があつたのだ。大化の革新が何年に起つたのかの問題が。

瑞希「これで、私たち……！」

明久「うん！ これで僕らのちゃぶ台が

『システムデスクに』

Fクラスの皆の声が揃つた。皆は勝ちが確定したみたいにはしゃいでるけど、どうなるかは実際のところ最後までわからない。それに少し不安要素もあるし。

そしてテストが終わった。結果は……。

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

あ～。不安的中だ……。

わたし達はAクラスに負けて、ちやぶ台からみかん箱になった。

高橋「三対一でAクラスの勝利です」

言わなくともわかっていますよ。

翔子「……雄一、私の勝ち

雄一「……殺せ」

明久「いい覚悟だ、殺してやるー 齒を食いしばれー！」

はあ～。アキはなにをやつてるの？

棗「ほらアキ、落ち着いて」

明久「ここまで来てこの結果……。これが落ち着いていられるかなつめは負けて悔しくないの？」

棗「いや、まあ、負けたのは悔しいけども。アキ、大事なこと忘れてるようだけど、わたし達も負けてるんだよ？」

明久「それは……、そうだけど。やっぱり喉笛を引き裂くといつ体罰ぐらいならいこよね？」

棗「だから落ち着いてよー」

葵「それにアキ、喉笛を引き裂くって、体罰よりは処刑だよ」

昴「まあ明久、今回は大人しくしどけ」

明久「味方がいない……」

翔子「雄一が所詮、小学校の問題だと油断してなれば負けてた」

雄一「言い訳はしねえ」

やつぱりだね。

翔子「……ところで、約束」

棗・明久「約束？ それってなに？」

霧島さんが約束をつて言つたら、ムツツリーは凄い速さでカメラを用意し始めた。

雄一「お前ら、タイミングいいな」

昴「FクラスがAクラスに宣戦布告したときに代表同士で約束したんだよ。勝つた方の言うことをなんでも聞くってな」

棗「そんなことがあつたんだ？」

雄一「説明ありがとう。久多羅木兄」

昴「久多羅木兄は面倒だろ？ 昴でいいぞ。坂本」

雄一「助かる。」
「いちも雄一で構わない」

翔子「…………」

無視されてて霧島さんが拗ねてる……。

雄一「ん、おっと。それで、なにをさせる気なんだ。翔子？」

翔子「……雄一、私と付き合つて」

霧島さんがあくまで交際を申し込んだ。

雄一「やつぱりな。お前、まだ諦めてなかつたのか」

翔子「……私は諦めない。ずっと、雄一のことが好き」

ゆづくんは考えてから……言つた。

雄一「……わかった。付き合おつ」

翔子「え？」

霧島さんは何を言られたのかわからなかつたのか、疑問の声を出した。

葵「おおー。」

棗「ぬめでぬめでうだね

昂「そりだな」

『セヒヅレ』は何処だ?』

『『『最後の審判を下す法廷だ!』』』

『異端者には?』

『『『死の鉄槌を!』』』

F.F.F団がゆうくんを襲つてゐる。ゆうくんを助けようつか。

葵「Fクラスはかわつてゐな~」

昴「なんなんだかな……」

棗「兄さんとあおじちゃんも手伝つてくれる? 今からあの覆面被つた危ない人達を殲滅するから」

昴「いいだろ? 幸せを邪魔するやつは許せないからな」

葵「同じくだね。参加するよ」

わたしとあおじちゃんと兄さんでF.F.F団を八分くらいで全滅せた。

翔子「……本当に?」

雄二「嘘を言つてどうするんだ? ……それより翔子。その手に持つてるのはなんだ?」

霧島さんの手には黒いものが握られていた。

翔子「……マッサージ道具」

雄一「嘘をつくな。それはどうみてもスタンガンじゃないか！ そんなものどうするつもりだったんだ？」

翔子「……断られた場合、実力行使するつもりだった」

雄一「今は使う予定はないな？」

翔子「……必要なくなつた。雄一、これからデートに行こう」

雄一「構わないがその前に……」

話の途中で教室のドアが開いた。

鉄人「……なんだこの惨状は？」

西村先生が驚くのも無理はないよね。わたしとあおいちゃんと兄さんで潰したFFF団がそこら辺に倒れてるんだから。

鉄人「まあいい。さてFクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

棗「西村先生どうかしたんですか？」

鉄人「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思つてな」

ん？　『我がFクラス』？

鉄人「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『『『なに――!』』』

クラスの男子生徒全員が悲鳴を上げた。ていうかもう復活したの?

鉄人「明日から授業とは別に補習の時間を一時間設けてやろう」

そういうて鉄人は教室から出て行つた。

昂「棗も大変だな……」

葵「あ～。まあ、頑張れ」

棗「うん。頑張るよ」

他の人達は帰つたらしい。今残つてるのはわたし、アキ、ゆうくん、兄さん、あおいちゃん、霧島さん、みいちゃん、みなみだけ。

雄一「とにかくで昂」

昂「なんだ」

雄一「お前が持つてゐる腕輪の事を聞きたいんだが、後で話すと言つてたしな」

葵「それは私も気になるね

昴「ああ、そのことが。いいぞ。そもそも黒の腕輪は、本来存在しないはずの腕輪なんだ」

翔子「……存在しない？」

棗「じうじう」と…

昴「そうだな。腕輪は大分類で三つに分けられるんだが、それはわかるか？」

明久「たしか攻撃系統の赤の腕輪、防御系統の緑の腕輪、補助系統の黄の腕輪だよね」

葵「へえ～。そんなにあるんだ」

昴「そうだ。この攻撃系統の細かい分類で、砲撃系とかの腕輪があるわけだ。しかし去年、学園側が大分類四つ目の腕輪があることを公表したな」

雄一「ああ。それが、特殊系の腕輪だつたな」

昴「それでぶっちゃけるが……。黒の腕輪ってただ単にバグなんだよね」

「「「はあ?」」」

昴「去年気になつて学園長を問いただしてな、そしたらかなり慌てくれたぞ。あれは面白かったな。それでずっと追い込んでたら、『それは特殊な腕輪なのさね』とかいひだして、次の日には公表し

てた

明久「バグってなんの？」

雄二「明久……。召喚システムのバグだらつ」

昴「その通り。それで本来作るつもりもなかつた腕輪があると

美波「でもそれならバグをなくしたら黒の腕輪はなくなるの？」

瑞希「確かにそうでしょうけど、今から黒の腕輪がなくなることはないですね」

美波「ビーヴして？」

翔子「……バグを特殊系と言つて、本来予定になかつた腕輪を最初から計画にあつたもののように公表したから」

明久「……」

アキがショートしてゐる。

雄二「わかりやすく教えてやる。学園側がバグをそのまま使うことをよしとした。ただし、生徒にはバグだと知られないように、特殊系と最初から計画にあつたもののように公表したんだ」

明久「それじゃあ、そのバグは修正されないので？」

棗「学園側が認めてるんだからされないでしょうね。威力やコストの補正とかもなさそうだし」

葵「よつは簡単だ。今まで通り気にせずに使ってればオーケーだと」

翔子「……黒の腕輪つて全部あんなに強いの?」

昂「そういうことはないぞ。なかにはハイリスクローリターンなんてのもあるしな」

棗「特殊系つて厄介だね」

翔子「……雄一」

雄一「なんだ?」

翔子「……今から『テート』に行く」

雄一「話も終わつたし行くか。じゃ あな

ゆづくんと霧島さんが帰つて行つた。

葵「あのままうまくいくといいね」

棗「そうだね。そうだ、アキ。今から一緒に出かけるよ」

明久「うん。いいよ」

わたしどアキも教室を出た。

昂「さて、あの二人はどうなるかね~」

「も、見付かぬこでしょ」

第十六話　△クラス戦？（後書き）

棗「腕輪の説明無理ない？」

葵「無理ない？　どうか無理矢理だろ」

昂「無理矢理だな」

葵「まあとりあえずそういう腕輪だと言つのが何となくわかれば
オッケーだろ」

棗「そうだね。えと、次は第十七話　清涼祭準備　の予定だね。ま
たね」

水無月葵、久多羅木昂（オリキャラ紹介？）

水無月
みなづきあおい
葵

Aクラス所属の女の子。身長は155cmで胸はDサイズ。髪は赤茶色のショート。目はややつり目で色は水色。メガネをかけている。棗、明久、昂とは幼なじみ。小学校の頃から四人で行動することがほとんどだった。中学三年まで棗達と九年間同じクラスだったが、高校は入学した学校が違うため一緒ではない。葵が入学したのは誰もが知ってる高校で、一番学力が高い有名校。そこに首席合格して一年間、首席の座から動くことはなかつた。ただその学校に通つてる生徒が真面目な人、悪く言えば勉強馬鹿、しかいなくてつまらないと言うことから文月学園に高一で転校してきた。得意科目はなく、苦手科目もなしの、オールラウンダー。召喚獣はTシャツにジーンズのラフな格好で、武器は右手にハリセン、左手にピコハンを持つている。黒の腕輪を持つ。能力はフィールド全体に、敵、味方、使用者にダメージを与えるもの。ダメージは使用者200、味方300、敵400。

久多羅
くたいろさわざる
木昂

Aクラス所属の男の子。身長は167cm。髪は黒のショートで目はやや垂れ目の色は黒。明久、葵とは小学校からの幼なじみで、棗の双子の兄。小学校の頃から四人で行動することがほとんどだった。だが高校に入つてから少し行動の時間を変えていたため、最近あまり会えていない。棗に聞かれれば勉強を教えたりしている。得意科目は棗と同じく数学と化学で苦手科目は特になし。召喚獣は大剣を持つて鎧を着ている。黒の腕輪を持つ。能力は砲撃の中心に近ければ近いほどダメージが高くなる。最低300。

水無月葵、久多羅木昂（オリキヤラ紹介？）（後書き）

棗「今日は大雑把にあおこわやんと兄さんの紹介だね」

葵「そうだな。まああれでも十分だる」

棗「やうこえは……」

昂「どうした？」

棗「次は清涼祭の話に入るはずだつたけど、なんか変更するらしい」

葵「この作者はよくやるよな」「うー」と……」

昂「よくって、まだ一回だけどな」

棗「といつ事で次は……なんだろうね。わかりません。それじゃ、
またね」

第十七話 それぞれの思い

棗サイド

今わたしはアキと一緒に出かけている。まあ、わたしはお出かけなんてのはただの口実なんだけどね。

明久「それで、これからどうするの?」

棗「そうだね~。これと書いて田的ないんだよね。……うん。今日晩御飯作つてあげようか?」

明久「え? いいの?」

棗「うん。いいよ。そのかわり荷物持ちよろしくね」

明久「任せられたよ」

晩御飯を作つてあげる約束をしたし、何を作ろうかな? わたしはいろいろ考えながら歩いていたら田の前にみたことのある一人組みがいた。

棗「ゆづくさんと霧島さんだ」

雄一「ん? 久多羅木と明久か」

明久「雄一、ここ何してるの?」

雄一「翔子に引っ張りまわされてるとこなんだ」

翔子「……雄一、表現が悪い。素直に『アートと言えば』」

雄一「わ、わかつた！ わかつたから、その手に持つてる物をしまえ！」

霧島さんの手にはスタンガンがあつた……。

棗「あはは、仲良いね」

翔子「……ありがとう久多羅木。それと私は翔子でいい。私も棗つて呼ぶから」

棗「わかつたよ。ショウイチちゃん」

翔子「……ちやん付けは恥ずかしい」

ちよつとだけ、ショウイチさんの頬が赤くなつた。

棗「大丈夫だよ。慣れだから。どうしても嫌ならやめるナゾ？」

翔子「……嫌ではないからそのまま構わない」

雄一「ていうか久多羅木、さつきのやり取りを見て、仲良いはおかしくないか？」

明久「どつかうどづみても、僕にも仲良く見えたけど

雄一「明久、ならお前の目は節穴かビー玉かなんかだ」

棗「それでこれからどこかに行くの？」

翔子「これから雄一と映画をみに行く。ところがで雄一、行こう

雄一「ん？　ああ、行くか。じゃあな一人とも」

二人は映画館に向かつて歩いて行つた。

明久「やっぱり仲良いじゃん。……？　どうしたのなつめ？」

棗「え？」

一人で歩くやうへとじょひりちゃんを見てたら、アキに話しかけられた。

棗「特に何もないけど……」

アキは、さつきまでわたしが見ていた場所を見て……。

明久「なるほどね」

何がなるほどなんだろ？　よくわからない。

明久「なつめも映画がみたいんだね」

棗「は？」

何がどうなつてそうなつたの？

明久「よし、じゃあ行こう」

わたしはアキに手を引っ張られながら、それもいいかなとか思つた
りした。

? ? サイド

「アキとなつめの後をつけて来たりこんだになつてるなんて」

「全くいけないです。吉井君。お仕置きが必要です」

美波「どこに言つたかは話が聞こえてたからわかるから、すぐに行
動するわよ瑞希」

瑞希「ええ行きましょう。美波ちゃん」

この一人は明久が棗の手を引っ張つて行くのが、とうとう自分以外の異性と手を繋ぐのが許せないらしい。

棗サイド

そして映画館について映画をみた。みたのはわたしのリクエストで恋愛もの。見終わって映画の話をしながら、約束していた晩御飯の材料を買つていった。

棗「あれ? アキ?」

わざわざ隣を歩いていたアキがある店の前で止まつてゐる。そこはどつやうり服屋らしい。女物の……。そこである服を見ている。

棗「どうしたの？ もしかして着たいの？」

明久「え？ いや、そういうじやなくてね。なつめに似合ひんじゃないかな～って思つてた」

わたしは今のアキの言葉を全く聞いていなかつた。アキを上から下まで眺めて、顔に戻る。

棗「もしかしたら今でもいけるんじやないかな。うん。昔はやつてたんだし構わないよね。機会があつたらやつてみようかな」

明久「なつめ……。小声で不安になるよつなこと言わないでくれない」

棗「ん？ 不安になんてなる」とないよ。大丈夫」

明久「と、とりあえず、早く帰ろう。こつまでも止まるのもよくないしね」

棗「そだね。帰らつか」

わたしとアキは帰路についた。

瑞希サイド

少し時は遡る。

吉井類とくーちゃんが映画館に入つていぐのを確認しました。

瑞希「行きましょ~。美波ちゃん

美波「行きましょう」

くーちゃん達がなんの映画のチケットを買つか監視をかいしです。
しかし距離があつて確認しにくいです。

美波「あれは……」

瑞希「何かわかつたんですか？」

美波「ええ。あれはつい最近公開された恋愛ものの映画よ」

瑞希「恋愛もの、ですか？」

まさかくーちゃんと一緒にみて、そのまま雰囲気に任せた……。

瑞希「阻止ですね」

美波「同意見よ。行くわよ」

私達も映画鑑賞をしました。

美波「うーーーまで良い作品だとは思わなかつたわ」

瑞希「はー。凄く感動しましたー！」

私と美波ちゃんはしばり映画の話で盛り上がつてました。でも、
何か忘れてるような……。

美波「そういえば……アキとなつめはどう？」

やつでした。ユーリちゃんと吉井痴を追いかけていたんでした。

瑞希「ちゅうとわからな」です

美波「見失つたか……。じょうがない、今日はもうこのまま解散かな」

瑞希「やつこましゅうか」

第十七話 それぞれの思い（後書き）

昂「明久の昔やつてたやつてのはまたかあれか」

棗「そうだよ。兄さんも経験のあるあれだよ」

葵「おお、あれか」

棗「今から楽しみだよ」

昂「明久には同情するよ。さて次は、第十八話 清涼祭準備 の予定らしいぜ。じゃあな」

第十八話 清涼祭準備

ただいま」HR中です。今学校では清涼祭の準備で大忙しです。こ
こ一一Fクラスを除いては……。
今教室にいるのは、わたし、ひでちゃん、みいちゃん、みなみの四
人。他の皆は。

須川「吉井！　こい！」

明久「勝負だ、須川君！」

須川「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

準備を一切しないで校庭で野球をしていた。こういうお祭り系は皆
好きだと思ってたからこの行動は意外だつたかな。

鉄人「お前ら、クラスの出し物はきま……。おい、他の奴らはどう
した？」

西村先生は教室に来て、この現状を見ての質問をした。

秀吉「皆なら校庭で野球をしてあるぞ」

鉄人「アイツ等は……、ちょっと待つて」

そういうて教室から出て行つた。しばらくして……。

鉄人「貴様ら、学園祭の準備をサボつて何をしているか！」

明久「ヤバい！ 鉄人だ！ それと何をしていたかと聞かれたから、見ただけじゃわからない残念な鉄人に教えてあげます。野球です！」

鉄人「そんなんのはみればわかる！！ 吉井！ 貴様がサボリの主犯か！」

先生、遊んでたのは事実だけど、アキをすぐに主犯にするのはやめようね。まあ、疑うのもわかるけどさ。

明久「ち、違います！ どうしていつも僕を目の敵にするんですか。雄一です！ クラス代表の坂本雄一が提案したんです」

雄一「明久！ てめえ！ ちつ。しうがない」

明久「違う！ 今は球種やコースを求めているんじゃない！ しかも、それをやつたら単に僕が怒られるだけだよね！？」

いつたいどんな指示を出されたの？ 声だけじゃ判断できない。わたくしも混ざつておけばよかつたかな。……下手したら西村先生と鬼ごっこか。やつぱり混ざらなくて正解だね。

鉄人「全員教室に戻れ！ この時期になつてもまだ出し物が決まっていないなんて、うちのクラスだけだぞ！」

それからしばらくして皆戻ってきた。

雄一「さて。そもそも学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなければならぬわけだが……とりあえず、なんでもいいからやりたいものはあるか？ それと明久は出てきた提案を黒板に書いてくれ

なんかゆうくん、やる気なさそうだね。そしてムツツリーーが手を挙げた。

雄一「ムツツリーー」

康太「…………写真館」

雄一「…………どんな写真を出すつもりだ」

康太「…………秘密」

雄一「…………まあいい。とりあえず意見だ。書いてくれ」

アキが黒板に提案を書いていく。

雄一「他には？ 横溝」

横溝「メイド喫茶」と言いたいけど、流石に使い古されてると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します

雄一「ウェディング喫茶？ どんなのだ？」

横溝「普通の喫茶店だけだ。ウェイトレスがウェディングドレスを着てるんだ」

康太「…………結婚は人生の墓場」

ムツツリーー「……。

雄一「明久、書いてくれ。他には？ 須川」

須川「俺は中華喫茶を提案する。本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す」

雄一「中華喫茶か。今までの提案に比べるとまともだな。とりあえず書いてくれ」

鉄人「皆、清涼祭の出し物は決まったか?」

三つ薬が出たところで西村先生が登場。

明久「今のところ、この三つです」

- 一、写真館
- 二、ウェディング喫茶
- 三、中華喫茶

鉄人「ちゃんとやっているようだな。なら、なるべく早くやるもの を決めて準備に取り掛かれ」

それだけ言ってまた西村先生は教室から出て行つた。どうやら様子を見に来ただけのようだ

雄一「それじゃあ、この中から選ぶぞ。どれか一つに手を挙げてくれ」

結果、選ばれたのは中華喫茶になつた。しかもチャイナドレスも着るらしい。

須川「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けよ」

康太「…………（スクツ）」

明久「ムツツリー、料理できるの？」

康太「…………紳士の嗜み」

中華喫茶が紳士の嗜み？ そんなの聞いたこともないけど。たぶんムツツリーの事だからチャイナドレス目的で何度も行って、見様見真似で出来るよつになつたんだろうね。

雄二「それじゃあ、厨房班とホール班に分かれてもう。厨房班はムツツリーと須川のところに、ホール班は久多羅木と明久のところに集まれ」

明久「姫路さんはホールだからね」

瑞希「もちろんですよ」

美波「アキ。ウチは厨房にしょつかな～」

明久「うん。適任だと思つよ」

美波「…………」

秀吉「それなら、ワシは厨房にしょつかのう」

棗「ひでちゃん、それはないよ。ホールに決まつてるじゃない」

秀吉「決まつておるのか？」

明久「当たり前じゃないか！ そんなに可愛いんだからホールに決まってみぎやああ！ み、美波様！ 折れます！ 腰骨が！ 命に関わる大事な骨が！」

美波「……ウチもホールにするわ」

明久「そ、そうですね……。それが、いいと、思います……」

ホントにみなみはすぐ暴力で……。もう二度とそんなことを出来ないよう矯正するべきかな。と、それより。

棗「みなみ、ちょっとしつれいするよ」

美波「ちょっと待つて、折れる！ 命に関わる大事な骨が…」

そしてわたしはみなみがアキにしたように、同じようにやってあげた。アキにどれだけの事をやってるか一度、その身で知るといよいよもちろんやり過ぎないように手は抜いてるよ。

そして清涼祭の準備中にみなみに呼ばれた。そこにはみいちゃんを除くいつものメンバーがいた。

棗「どうしたの？」

美波「うん、ちょっと聞いておいてほしくて。ホントは瑞希に止められてるんだけど。あの子、転校するかもしないのよ」

皆、驚いている。わたしもその一人だ。

棗「転校ってどうしたこと？」

明久「そつだよ美波！ 姫路さんの転校つてどうこいつ？」

美波「どうもいつも、そのままの意味。」のままだと瑞希が転校しちゃうかもしれないの」

康太「…………」のままだと？」

秀吉「島田よ。その姫路の転校とさつきの話がビリつながるんじゃ」

美波「瑞希の転校の理由が『Fクラスの環境』なのよ

雄一「なるほどな。」の酷い環境を親側が良しとしなかったか。まあ姫路は体が弱いから特にだろ？…………そうなると、いろいろやらないといけないな」

明久「いろいろって？」

雄一「とりあえず問題は三つ」

豪「「いざとみかん箱の普通じゃありえない設備。はつきり言って学習環境じゃないよね。ちやぶ台の時ですら思つてたことだし」「

雄一「次に老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境だ。そして最後にレベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促せない学習環境だ」

問題だらけだね。このクラス。

明久「参ったね。随分と問題だらけだ」

秀吉「セイヒジやな」

雄二「そりでもないや。三つ田に關しては姫路と島田で対策を練つているんだろ?」

美波「瑞希と一緒に召喚大会に出るつもりよ」

雄二「なら三つ田は一人に任せるとして、後二つは……。久多羅木、明久、ついて來い」

わたしは転校ではないけど、引っ越しをしたからわかる。どうしようもない理由ならしようがない。でもこんなことなら、絶対に転校はさせない。

第十八話 清涼祭準備（後書き）

葵「最後にっこことになつたな」

昴「小学生の時の知り合いでから手伝えたら手伝いたいがな」

葵「一人ともあつがとう。もしかしたらお願ひするかもしれないからそのときはよろしくね」

葵「任せな。で、話は変わるが清涼祭でチャイナドレスを着るの？」

棗「着た方が寄寄せになるつてこいつのことよ」

昴「……まあ、頑張れ」

葵「兄としてほどうなんだい」

昴「ノーノメントだ」

葵「あはは。さて次は第十九話 交渉 の予定です。またね

第十九話 交渉

棗サイド

今わたしとアキはやうくんに連れられてある場所に向かっている。
今の問題を解決するために必要な場所。

明久「雄一、ビルに向かってるのぞ」

雄一「学園長室だ」

明久「学園長室? なんですか?」

雄一「あの老朽化した教室の改善要求をする」

明久「改善要求? そんなの聞いてもらえるの?」

棗「あのねアキ。ここは学校。教育機関だよ。クラスによる格差は……まあ、この学園だししようがないにしても、その方針で生徒の健康に害が及ぶような状態なら、改善要求は当然の権利だよ」

明久「はあ。なるほど」

雄一「ホントにわかつたのか?」

明久「ん。たぶん」

雄一「不安になるな……」

棗「アキ……」

明久「それで改善要求の権利があつても、聞いてもらえるかわからないよね？」

棗「大丈夫。その時はその時でまた別の方法で攻めればいいだけだから」

明久「ふうん。そつか。ん？ 何だろ？ 中から声が聞こえる」

わたし達は学園長室の前に着いた。アキが言つていたように中から話し声が聞こえる。話し合いよりは、言い争いの方が正しいかもしれないけど。

雄二「確かに聞こえるな。学園長がいるつて事だな。ならさつさと入るぞ」

明久「失礼します」

雄二「邪魔するぞ」

棗「ちよ、ちよっと二人とも！」

アキとゆづくんはドアをノックして、返事を待たずに入室した。わたしも仕方なくそのまま入室することにした。

藤堂「本当に失礼なガキどもだねえ」

そのガキどもにわたしもはいつてるの？ 口の悪い学園長だね。さて、それで学園長とお話し中なのが教頭の竹原先生だね。

竹原「やれやれ。取り込み中だと『いつの』……まさか貴方の差し金ですか？」

藤堂「馬鹿を言わないでおくれ。なんでそんなことをしなくていいけないんだい？」

竹原「学園長のことですかね。隠し事も得意なようですが。つと、もつ戾りますか。やることはいろいろあるのでね」

そう言つて教頭は出て行つた。

藤堂「でだ、ガキどもは何のよつだい？」

雄二「今日せよ学園長に話があつてきました」

棗「ゆうべ……。その前に名乗つておひつね……」

藤堂「そこの子の言つ通りだね。社会の常識だ。覚えておきな。それとわたしは今忙しこんでね。簡単に頼むよ」

棗「あ、はい。一年F組の久多羅木棗です」

藤堂「久多羅木……」

なんだか。なんか凄い嫌な顔された。学園長とはこんな風に話すのは初めてだから、どうしてか検討もつかない。…………いや、もしかしたら兄さんかな？ 確か去年、黒の腕輪の事でかなり学園長をいじつたみたいだし……。もしさうなりとばつつけは止めてほしいけど。

雄一「失礼しました。一年F組代表の坂本雄一。それでこっちが
」

そいつ言つてやうつくさんはアキを指差した。それよつゆつくさ、ちやん
と敬語使えるんだね。

雄一「一年を代表するバカです」

藤堂「ほつ……。もうかー。お前達が坂本と吉井かい」

明久「ちょっと待つてくださいー。僕はまだ名前を言つませんー。
！」

やつらの紹介もおかしかったけど、学園長もおかしいね……。二
年を代表するバカで迷わずアキだってわかつたみたいだけど、それ
でわかるって、それはそれでどうなの？

藤堂「それじゃ、わざと用件をいいな」

なんで学園長は口の端を吊り上げてこるんだら？

雄一「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

藤堂「設備の改善の要求？ それは暇そつないことで。この学園のシ
ステムがわからないのかい？ 却下だみ」

その程度の理由で拒否ですか。

雄一「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だ

らけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です。学園長のような戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます。要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さつさと直せクソババア、というわけです」

途中から我慢が出来なくなつたんだね。さすがだね、それでこそゆうくんだよ。ゆうくんが言わなかつたらたぶんわたしが言つてたと思うから、ナイスだよ。

藤堂「お前達の言いたい事はわかつた」

明久「それじゃあ、直してもらえるんですね？」

藤堂「もちろん……、却下だね」

明久「なつめ、雄一、このババアをコンクリに詰めて捨ててこりやつ」

雄一「……明久。もう少し態度には気を遣え」

棗「アキ。この程度のヤツにそんなことするのもバカみたいだからやめてね」

雄一「……久多羅木もか。バカと久多羅木が失礼しました。どうか理由をお聞かせ願いますか、ババア」

明久「そうだね。教えてください、ババア」

棗「さつきみたいにこの学園のシステムだから、なんてくだらない

理由は止めてくださいよ。こちちはそれを潰せる正当な理由がある事なんですか。却下なら却下で納得のいく理由を教えてください。いいですね？ 学園長？」

藤堂「いつたいなんなのさね。一人からはバカにされて、一人からは殺気に近いものを感じるんだが……。まあいい。却下したが条件付きでなら設備の改善を認めてやるひりじやないか」

条件？ 怪し過ぎる。なんていきなり考えを変えた？

棗・雄一「…………」

ゆうくんも警戒してるみたい。まあ当然だよね。

明久「その条件ってなんですか？」

藤堂「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

棗「知つてます」

明久「同じく」

藤堂「それじゃあ、優勝賞品は知ってるかい？」

明久「は？ 賞品？ そんなものがあるんですか？」

藤堂「ああ、あるんだよ。優勝チームから三位のチームに腕輪と如月ハイラングプレオーブンプレミアムペアチケットがね」

明久「はあ、それで？」

藤堂「なに、あんたらアペアチケットを回収してほしこのや。ちよ
いと悪い噂があつてね」

棗「ちなんみにどんな噂ですか？」

藤堂「ペアチケットでやつてきたカップルを結婚までコーチィネー
トするらしに。企業として、強引な手も使うつもりしこ」

棗「つまり条件は、そっちの不手際を隠したいから、大会の賞品と
交換なら改修してやると?」

藤堂「もの凄い悪意を感じるが……まあそここいつ」とだよ

雄二「いいだろ?。ただし、もう条件がある。召喚大会は一対二
のトーナメント制で、一戦事に教科が変わる」

藤堂「それがどうした?」

雄二「トーナメント表が出来たら科目を決めさせてくれ

藤堂「そんなことなら構わないさね。そこまでやるんだ。優勝出来
るんだろうね? 言い忘れてたけど他クラスに協力は求めるなよ?
Fクラスだけでやりな」

雄二「なに? #あいだろ?。問題ない」

科目を決められる? ちょっと不思議かな。ペアチケットで行つた
カップルを強制的に結婚まで持つしていく。いやなら行かなければ
いだけ。たかだかその程度の問題で不正つて言つてもいいことを許

す？ しかも他クラスに頼らずに F クラスだけで対応しろ？ まあ F クラスの設備の事だからわからなくもないけど、なんかおかしいよね。

雄一「設備の改善の方はこれでいいとして、あと一つ」

藤堂「まだあるのかい」

雄一「清涼祭の売り上げで机などを買い揃えるから、その許可がほしくてな」

藤堂「召喚大会の優勝で認めてやるよ」

雄一「ああ、それでいい」

わたし達は学園長室を出た。

雄一「F クラスだけでなんとかしる、か。久多羅木、明久。お前等二人で大会に参加しろ」

明久「わかつたよ」

棗「ゆうくんはどうするの？」

雄一「召喚大会には翔子と出ることになつていったんだが……。こうなると翔子とは出れないな。F クラスの誰かを捕まえるさ」

棗「いいの？ じょいこちやんのこと」

雄一「この場合はしようがない。まだ参加登録もしていないしな。な

んとか説得するわ」

棗「そう。頑張ってね」

さて召喚大会。予定になかったけどやるしかないよね。アキの点数がどんな感じか確認も出来るしね。

葵サイド

なんか翔子が荒れてる。なんかあつたのかな？ そういうえばさつき翔子の彼氏の……坂本だけ？ が来てたね。それからだね。荒れてるのは……。

優子「代表、びうしたの？ なんか怖いわよ」

葵「確かにそうだな」

昴「何があつたのか？」

翔子「……雄一が……約束を破った」

昴「約束？」

翔子「……一緒に召喚大会に出る約束。さつきいきなり、Fクラスのやつと組む事になってしまったから、ホントに悪いが約束は破棄だって」

優子「代表の彼氏に「こんな」と言いたくないけど、随分と自分勝手ね。先に約束していた方をなかつた事にするなんて」

優子はかなり怒ってるね。わからないでもないんだけど、たぶん理由があるだろうしね。

翔子「……優子。大会に参加するの？」

優子「ええ。そのつもりだけど、一緒に参加する相手がいないのよ」

翔子「……なら私が一緒に出る」

優子「いいの代表？」

翔子「……構わない。一緒に参加しなかつた事を雄二に後悔させる」

昴「想いが強いってのも考え方だな……」

葵「そうだな。それから昴。私達も大会に出ない？」

昴「葵みたいなバランスブレイカーが参加するのか？」

葵「バランスブレイカーって……。確かに点数は高いけどそれでも召喚獣の操作が不慣れだからそれほどでもないよ」

そう、不慣れだからFクラス戦で私も昴も苦戦したんだし。

優子「久多羅木君も出ればいいんじゃない？ 確かに葵と組んだら、二人ともバランスブレイカーだからゲームにならない可能性もあるけど」

優子まで……結構失礼だね。

翔子「……明らかに優勝候補」

それは言つ過ぎだよ。

葵「それに私が、こんな面白やつな事に参加しないことでも、賞品に少し興味があつてね」

昂「賞品? 確か腕輪とペアチケットだつたか?」

優子「腕輪をねらつてるの?」

葵「まさか、狙いはチケットの方だよ」

翔子「……葵には、誰か一緒に行きたい人がいる?」

葵「私じゃなによ。なつめとアキにプレゼントしあつかと思つてね」

昂「ほひ。それは……面白そつだな」

昂が凄くいい笑顔でそんな事を言つたよ。

優子「それで、久多羅木君はどうするの?」

昂「そんな樂しかつないこと、断るわけがない。確かに三位までもうれたな。よしやる気出てきた。葵、チームを組むぞ」

葵「そつこなくちやー!」

優子「……かなりヤバイチームが出来たんじやない?」

翔子「……周りから応援してもらってるなんて棗が羨ましい」

優子「代表！？ 今の話からどうやつたりそつ解釈出来るの！？」
明らかに自分達が楽しむ為じゃない！」

いや～、Aクラスって最高クラスらしいから、前の学校のように勉強馬鹿ばかりなのかと思つてたけど……違うね。結構ノリいいわ。
楽しい場所だね～。

第十九話 交渉（後書き）

葵「なつめも大変だな。学園長のパシリにされるなんて」

棗「それはそうだけど、一いちも目的があるからじょうがないよね」

昂「しかし、大会に俺達まで出るんだな。こいつたこびりかすりつむつ
なのか」

棗「まあ、それは後々でしょ。そういうわけでまた次でお会いしま
しょう。またね」

第一十話 召喚大会への会議

雄二「教室の改善と、清涼祭の売り上げでの机等の購入の約束を取り付けた。ただし条件つきだがな」

今わたしはFクラスにいる。学園長と話が終わってすぐだね。ゆうくんは一度Aクラスに寄つたらしいけど……。ちゃんと穩便に断つたのかな？ それでFクラスで待つてたみいちゃん除くいつものメンバーと会議を始めた。

秀吉「条件とは何なのじゃ？」

明久「召喚大会で優勝することだつてさ」

美波「そうなの？ 瑞希となんとかしてみるわ」

棗「大丈夫だよ、みなみ。わたし達も参加するから」

美波「そうなの？」

雄二「ああ。お前達だけじゃないから安心しろ、島田。今回の話し合いで俺達も出ることにした。チームは久多羅木と明久のペアだ。今の明久はそれなりに点数も取れているからな」

康太「……確かに、Aクラス戦でいい点数を取つてゐるのを確認した」

秀吉「他の科目も話を聞く限り、それなりに取れているようだしのう」

美波「点数がある程度取れてて、召喚獣の操作はトップレベル……」

そう、アキは点数より召喚獣の操作が最大の武器だからね。そこには点数がついてくればもっといい。

雄二「そうだ。そして久多羅木も明久並に操作が出来る。この二人のコンビネーションもなかなかだ。即席チームじゃ、相手の点数が上でも問題はないだろ?」

明久「雄二。ハードル上げないでくれない」

雄二「上げてないぞ。事実だからな」

それはわたしとアキが最高のコンビだと。そう受けとつておいで。
棗「それでゆうくんはどうするの? ショウヒヤんと参加しなくなつたんでしょう?」

雄二「それか……。秀吉、一緒に大会に参加しないか」

秀吉「ワシか? 大丈夫じゃが、ワシはそれほど点数は高くないし操作の方もそれほどではないぞい」

雄二「安心しる。操作の方はどうも出来ないが、点数なら何とか出来る。秀吉のやる気次第でな」

美波「どうこう」と?」

雄二「まだ清涼祭まで日があるので、その間に俺が勉強を教える」

今のかわくらの成績はAクラス戦の時より上がってる。なんでも次

は必ずAクラスを倒すために勉強してゐるらしい。

美波「なるほど、それで木下のやる氣次第ね」

明久「どうする？ 秀吉？」

秀吉「……わかつたのじや。雄一よろしく頼むぞ」

雄一「ああ、任せろ」

康太「……明久はどうする？」

明久「僕は今まで通りなつめと勉強するよ」

康太「……羨ましい」

美波「お仕置きが必要かもね」

棗「そうなるとわたしもお仕置きしないといけなくなるね」

雄一「落ち着け。とりあえず名曲清涼祭まで出来る事をしておけ」

とりあえず、わたしはアキとの勉強くらいしかないね。

秀吉「一つ提案があるんじやが」

雄一「なんだ？」

秀吉「皆で勉強会をしたらどうかと思ってのつ。Aクラスに知り合
いがいるのもおるし、呼んで教えてもらえたうと思つたんじやが」

棗「へえ～、面白そうだね」

勉強会か。それは面白やつ。たぶんあおこちゃんと兄さんは引っ張つてこられると思ひ。

美波「Aクラスに知り合いつて？」

明久「雄一の彼女の霧島さん」

棗「ひでちゃんのお姉さんの木下さん」

秀吉「おぬしらの幼なじみもAクラスだったの？」

康太「……意外とAクラスの知り合いが多い」

雄一「Aクラスじゃないが、姫路もAクラスレベルだしな」

美波「その中で呼べそつのは？」

雄一「翔子は無理だ。約束破つてる状況でそんなの出来るわけねえ」

まあそうだよね。もしかしたら敵として参加していくかもしれないくらいだし。

明久「秀吉のお姉さんは？」

秀吉「姉上はビービーがうつた。一応話はしてみるが……あまり期待はしないで欲しいのじや」

康太「……一人の幼なじみは？」

棗「兄さんはたぶん大丈夫だと思つよ」

明久「あおいも大丈夫だと思つ」

雄二「それじゃあ、昴と水無月に一応話しておいてくれ。ダメだつたら、それはそれでしようがない」

兄さん達は協力してくれるよ。きっと……。

雄二「となると、教師役が今のところ姫路、水無月、昴だな」

明久「なつめが入つてないけど？」

棗「いや、さすがにその二人が来たら、わたしは教えてもらう側だよ」

でも、さつきのは嬉しいね。アキからみたらわたしは教師なんだね。ちゃんと教えてあげられてる事がわかつたからよかつたよ。

雄二「久多羅木は昴と水無月が来なかつた場合にやつてもらうつもりだ」

康太「……雄二、質問がある」

雄二「どうしたムツツリーーー？」

康太「その勉強会……大会に参加しない者でも参加していいのか？」

雄一「構わない。人数が多くなると困るから、来ても後一、三人だな」

康太「……なら参加する」

なぜか知らないけどムツツリーーがやる気を出している。

秀吉「雄一よ。今電話で姉上に確認したのじゃが、姉上は無理みた
いじや」

雄一「そうか」

秀吉「それと、約束を破った事、後悔させてあげる、と霧島からの
伝言じや」

ひでちゃんはしようとやんの伝言を伝えた。声真似して。

雄一「わざわざ声真似する必要はないぞ。しかしそうか。翔子は敵
か……よし、とりあえず今日は解散だ。来る人数が決まってから
場所は考える」

それでわたし達は解散した。

棗「アキ、今からAクラスに行こう。兄さん達がいるかもしれない
し」

明久「そうだね」

わたし達はAクラスに向かった。そのAクラスについて兄さん達を
さがした。

明久「あ、いた。お~い。昴、あおい」

昴「明久か。どうした?」

明久「僕達は召喚大会に向けて勉強会をすることになつてね、それに昴とあおいが参加出来ないかと思つて聞きに来たんだ」

優子「それつて、さつき秀吉から電話で言われたやつね」

棗「うん。そうだよ」

昴「俺は構わないぞ」

葵「私もいいよ」

愛子「なになに? なんの話してるの?」

棗「あ、工藤さん。えっとね、召喚大会の為に勉強会をしようつて事になつて、兄さん達も誘えないかつて話しになつてね。それで誘いに来たの」

愛子「ふ~ん。そりなんだ。それと僕は愛子でいいよ。棗ちゃん」

棗「わかつたよ、あいこちゃん。それと気になつてたんだけど、なんでしょうこちゃんは落ち込んでるの?..」

もしかして一緒に大会に出るつていう約束を破つたことかな?

翔子「……なぜ私には、雄一からその話しが来ない?..」

そつちですか。

明久「約束を破つてゐる状況で、そんなの頼めるわけがないって雄一
は言つてたけど」

そうだな。

棗「しょ「ひ」ちゃんも来る?」

翔子「……いいの?」

棗「うん。大丈夫だよ」

愛子「ねえねえ、僕は大会に参加しないんだけど、勉強会に参加して
もいいかな?」

明久「大丈夫だよ。ムツツリーーも大会には参加しないけど、勉強
会には参加するし」

愛子「なら僕も参加するね」

棗「参加するのは兄さんとあおいちゃん、しょ「ひ」ちゃん、あいこ
ちゃんの四人だね。ゆうくんに伝えておくよ」

葵「で、それはいつ、どこでやるんだ?」

明久「まだ決まってないんだよね。どれだけ集まるかわからないから。
来る人数が決まってから場所を考えるって言つてたし」

昴「まあ、そりゃそうだな」

棗「たぶん明日には決まると思つけど」

翔子「……問題ない。場所ならある」

葵「どうしたの？」翔子」

翔子「場所ならしつかを使えばいい」

そういうてしょ「ちやんは携帯を取り出して電話をかけた。

翔子「……雄一」棗から勉強会の話は聞いた。私も参加する」

葵「なんか直接交渉を始めたな」

愛子「代表つて結構行動力あるんだね」

翔子「……大丈夫、問題ない。場所はうちを使えばいい。土日の泊まりでもオーケー」

棗「泊まりね。うん。それはそれで楽しそう」

翔子「……その点についても問題ない。泊まりを強制しない。そこまでは予定が合わない人もいるかもしれないから。泊まりでも構わないって人だけ」

昴「意外と交渉が上手くいってるようだな」

棗「そうだね」

翔子「……わかつた。それで決定」

そういうてしようじちゃんは携帯をしました。

翔子「……日と場所が決まった。場所はつち。日は今週の土曜日。
泊まりもオーケー」

しうりちゃんって結構行動力あるんだね。

棗「ならわたしは泊まりにしうりかな」

翔子「……歓迎する」

そしてここのいる勉強会参加組は皆泊まりになつた。

第一十話 召喚大会への会議（後書き）

昴「勉強会が楽しくなりそうだな」

葵「ホントだね。勉強会の話を出した秀吉。あんたは最高だ」

棗「一人とも……。勉強会では一人とも教師役だからね。ちゃんと教えてよ」

昴「もちろんだ」

葵「それでは次回は第二十一話 勉強会 の予定だな。またね」

第一十一話 勉強会？

勉強会の予定を立てた日から数日。今日はその勉強会の日です。ただほとんどの人が場所がわからないため、一度集まつてから、じょうこちゃんに案内してもらう事になったの。

棗「おはよう。眞理いね」

もう集合場所に集まつていた人達に挨拶をした。

秀吉「まあの。遅刻して迷惑かけるのも嫌じゃからな」

康太「……」それくらいは当然

愛子「ムツツリーー君も気合い入つてるね」

康太「……当然だ。これはチャンスだ。うりも……なんでもない」

美波「土屋、あんたね？」

棗「あはは……、一応聞かなかつた事にしておくよ」

康太「……助かる」

葵「やあ瑞希久しぶり」

昂「そいういえばそうだな」

瑞希「えつと、どうやら様でしょつか？」

葵・昴「おいおこない……」

昴「姫路、それはあまりに酷くないか。中学三年間と高校一年間の四年間会つてないだけでその反応は」

葵「そうだよね」

瑞希「あ、大丈夫です。あおこちゃんは覚えてます」

昴「俺だけか!？」

葵「よかつたよ。という事でまたになるけど、久しぶり」

瑞希「はい。お久しぶりです」

明久「姫路さん。昴だよ。小学生の時に僕となつめとあおこと一緒にいた」

みこちゃんは腕を組んで頭を何度も何度も傾けながら時間をかけて思い出をうつしていた。……て、そこまで覚えてないの?

瑞希「え?ああー 久多羅木君ですか」

昴「.....随分時間がかかったな。思い出してもらえたようついで何よりだ」

こんな会話をしていたらゆうくんとしょくひやんが来た。それと兄さんドンマイ。これでぐじけちゃダメだよ。

愛子「葵達は知つ合いなの？」

葵「小学生の時からの友達だよ」

愛子「僕もひやんと挨拶しつづか。戦争の時に言つたけどね。
僕は藤愛子、よしこ瑞希」

瑞希「あ、はい。姫路瑞希です。よろしくお願ひします」

雄一「皿口紹介は終わつたか」

棗「じゃあひやんと来たけど仲直りでもしたの？」

わたしあまりへんて元気になつてゐ事を聞いてみた。

雄一「ああ。説明出来る範囲で説明した」

棗「そつか。よかつたね」

雄一「なにがよかつたのかわからんがな」

まつたく照れすぢつて。

翔子「……それじゃ案内する。ついて来て」

それからひじょひじょ歩いてしょひひやんの家に辿り着いた。

棗「話では聞いてたけどんなでかいんだね」

明久「みたいだね」

やつ、話では聞いていた。ショウジョウちゃんの家はお金持つのである。

翔子「……それじゃ、上がって」

皆で挨拶をしてから上がった。

明久「へえ～。いろんな部屋があるね」

翔子「……用途別」

こんなに長い廊下もはじめて見たけど部屋が用途別って……、凄いね。

愛子「あの本が並べられてる部屋は？」

翔子「……書斎」

葵「スクリーンのある部屋もあるね」

翔子「……シアタールーム」

棗「いろいろあるね～」

翔子「……それで、ここが勉強部屋」

そうじつてしょ「こちちゃんは部屋のドアを開けた。開かれたドアのところから部屋の中を見てみた感想。ただただ広い。今回勉強会に参加するのはわたし、アキ、ゆうくん、ひでちゃん、ムツリー、みいちゃん、みなみあいこちゃん、しょうこちゃん、あおいちゃん、兄さんの十一人。それだけいるのに全員入っても狭いとは感じない

広せ。

雄一「それじゃ、勉強を始めるか」

それぞれ勉強を始めた。

わたしとアキとひでちゃんとマツシリーーとあいにちゃんが、あお
いちゃんと兄さんと教えて貢つて、しょうじちゃんとゆうくんは一
対一、みなみとみいちゃんは後でわたし達に加わるみたい。

棗「あおこちゃん。」じがわからないんだけど」

葵「ん？ あ～、それは…………で、…………だな」

棗「あ～、うん。なるほど。わかつたよ」

秀吉「久多羅木兄よ、」じを教えて欲しいんじゃが」

昴「いいぞ。それと昴でいい。でだ、…………だから、…………な
る。」これで大丈夫か？」

秀吉「大丈夫なのじや」

明久「昴、教えて」

昴「何がわからないんだ？」

明久「何がわからないかがわからない」

兄さんは右手で頭を搔いたね。それにアキ、それは問題発言だよ。

昴「そんな問題発言を堂々とするな。棗、かなり苦労してゐるんじやないのか」

棗「そつでもないけど……。普段そんなこと言わないし」

明久「なつめにそんなこと言わなによ。昴だからやつてるんだよ」「どうか、俺は特別か。と、そんなことよつ、じゃあ質問はないのか？」

明久「いや、わからないといふがあるのは本當。いじなんだけど」

なんだ、アキもちゃんとやつてるね。マッソリーとあいこちゃんはなんだろう？　あいこちゃんの手に機械がある。ボイスレコードー？」

昴「わかつたか、明久」

明久「うん。オーケーだよ」

秀吉「明久、おぬし本当に勉強が出来るよつになつておるの？　これも久多羅木との普段の勉強の成果かの？」

明久「頑張ってるからね。それでもまだまだだよ。なつめは大好きだからね」

棗「いやー？」

時が止まつた。ていうかアキは何を言つてゐるの？　変な事言つから

つこの世の口癖が出来ちゃったじゃなー。

葵「なつめのそれは久しぶりに聞いたな」

愛子「わちやの棗ちゃんの『にゃ』はよかつたね。結構破壊力あつたよ。もひにこまで来たらいつも猫耳と尻尾をつけて思いつきり愛でたーー！」

棗「にゃ—————。」

だめだ。あいにじゅんは何を言つてゐのーー？

康太「…………猫耳、尻尾のにゃーとなべットな久多羅木…………だと」

ムツツリーーーは鼻血を流しながら…………倒れた。その時の鼻血の音はブシヤアアアアアーーーーだった。もつ鼻血のレベルじゃない。それ、出血多量で命が危ないよ？

葵「まさか、にじでこきなり告白させ、予想外だな」

昴「そうだな。まあ、素直になつたんだが。いいことじやないか？」

秀吉「にじにゐる者の公認カツブルじやのーー」

美波「瑞希ーーー！」

瑞希「美波ちゃんーーー！」

美波・瑞希「やるわよ……」

明久「待つんだ!! 美波に姫路さん…!! 話を聞いて…」

雄一「なんだ明久、三股か。感心しないな」

翔子「……ちゃんと一人に決めるべき」

明久「ちくしょう! 味方がいない… そつだ! なつめは僕の味方だよね?」

棗「そうだね。味方だね。だから、さつきの事について詳しひく」

明久「まさかなつめまで敵だつた!? いい? よく聞いてよ。僕はなつめが好きなんだ。つておかしいだるう…!」

今のは言葉でわたしはショートした。

秀吉「それはさつきも聞いたのじや」

雄一「いや秀吉。大事な事だから一回言つたんだろ」

昴「ああ、なるほど。確かに大事な事だからな」

翔子「……棗が羨ましい。私は雄一に好きだと言われた事がない

明久「……ねえ、もしかしたらだから間違つてたら『メンなんだけど、今のこの事態の原因は秀吉じゃないよね?』

秀吉「うむ? なぜじゃ?」

明久「秀吉だつたら声真似が出来るからもしかしたらと思つて」

雄二「そういうや翔子の声真似もホントに似てたしな」

秀吉「残念じやが、ワシはそつやつて人を追い込んで楽しむ性格ではないんじやが」

明久「……確かにそつだね。疑つてじめん。秀吉」

秀吉「まあ、しようがないじやう」

明久「それじやあいつたい誰が……」

雄二「自分で言つたんだろ、恥ずかしいからつじまかすな」

葵「そうだよアキ。これだけの人がいるところでの告白だから恥ずかしいかもしれないけどさ。それとなつめ？ そろそろ戻つてしまい」

わたしは体が揺られる感覚で現実に戻つてきた。

葵「お。帰つてきた。お帰り」

棗「ただいま」

なんだかつ。皆がにやけた顔でわたしを見る。……そうだ、思い出した、確かアキに……。

康太「…………明久、助けてやる」

せつこつてムツツリーーーはアキの肩に手を置いた。それよりムツツ
リーー、鼻血はもう大丈夫なの？ ちやんと血は足りてるの？

明久「ありがとーー。じゃあお願ひするよ。なつめよく聞いて。僕
は 雄二 の 方が好き 。ついこのヤロー———！」

棗「アキ。そんなことを堂々と言われて、わたしはどうしたらいいの？」

泣きたくなつてきた。

葵「別に同性愛を否定はしないけど、やつぱり異性を好きになつた
方がいいと思つた」

翔子「……雄二、吉井がああ言つてるけど」

雄二「その手に持つてるものをしまえー。安心しろ。俺 も 明久
の事が好き 。 テメエエエエエ———！」

翔子「……雄二、浮氣は許さない」

雄二「までー。翔子早まるな！ あれはちがギヤアアア———」

瑞希「やつぱり坂本君なんですね」

美波「前から怪しいとは思つていたけど

明久「落ち着いて二人とも、そんなわけないじゃないか！ 僕は普
通に女の……」

瑞希「嘘ですね」

美波「嘘ね」

明久「くそ…………！ 話すら聞いてもらえない！」

昴「棗はどう思つてるんだ」

それはただ一言しかないよ。

棗「アキ、そんなことないよね？」

涙田で言つた。むしろ涙田で止まつてゐだけ、まだいじょうつな気がしなくもない。はつきり言つて本氣で泣きたい。

瑞希「では、時間ですよ。吉井君」

美波「そうね。始めましょ」

明久「待つて、その関節はそっちにギヤアアアアア…………」

普段なら助けるんだけど今回はよくわからない。というかどうすればいいの。異性から告白されて、でもそれよりも同性の方が好きって……それを真正面から言われて……もしかしてわたし遊ばれた？

康太「…………」藤、お前はまだ甘い」

愛子「…………確かにそうかも。流石に僕もここまでやるつもりなかつたし……」

それから一時間後、なんとか騒ぎが落ち着いた時、ネタバラシが
つた。

雄一「てことはなんだ。明久の告白は作り物だと」

愛子「まあ、そうだね」

棗「ねえあいこちゃん。ちょっと聞いていい」

愛子「う……、なんか怖いけど、どうぞ」

棗「アキの告白は全部作り物?」

愛子「あ~。そのことか。それは秘密。全部かもしれないし、違う
かもしねないし」

昴「もし全部じゃなかつた場合、明久の本音が混ざつてた事になる
な」

それからしばらく聞いてみたけど教えてくれなかつた。せめて全部
か一部がだけ教えてくれれば。

第一十一話 勉強会？（後書き）

葵「この勉強会はまたカオスだな」

棗「Fクラスのメンバーと一緒にだからこいつなるかなとは思つたけど、まさかあいこちゃんが引き金を引くなんて」

昴「明久の告白はどうなんだろうな」

葵「ああ？ 愛子が教えてくれないし」

昴「まあいい。いずれわかるだろ。それじゃ次は第一十一話 勉強会？だな。また荒れるのか……。とりあえずじやあな

第一十一話 勉強会？

ちょっとした？ 事件が終わってからまた勉強が始まった。それからは何事もなく勉強をしていた。……だつたらいいな。問題を……、問題つてレベルまではいかないけど、原因はみなみ、みいちゃんペアがだいたいだね。巻き込まれるのは主にアキ。たとえば……。

美波「アキ、ここがわからないんだけど……」

明久「僕じゃなくて、昴やあおい、なつめに霧島さんとかに聞いた方がいいよ」

美波「いいから教えなさい」

明久「だからその関節はそっちには…………！」

瑞希「吉井君、ちゃんと勉強に集中してくださいね」

明久「関節をきめられる、つていうか無理させてる状態でどうじろと？」

瑞希「そんなに美波ちゃんと勉強の方がいいですか？」

明久「お願いだから話を聞いて！」

と、こんな感じ。これでも数ある騒ぎの一部だけね。今更かもしれないけど、なんでFクラスの人達は話を聞こうとしないんだろう。まあ、ようじちゃんもたまにそうなるけど。それで、アキがわたし達に助けを求めて救出、……の流れを繰り返してたんだけどあま

りの頻度に、皆スルーすることにした。わたしはたまに助けるけどね。全部は無理……。それで今わたしは、テストを受けている。やつたことをちゃんと理解してるかの確認テスト。もちろん希望者のみ。テストはしょうじちゃん、あおいちゃん、兄さんの三人が協力して作ったもの。既それぞれ勉強してた範囲が違うからこいつなった。それとしょうじちゃんがテストは持ってるらしいけどそれだと出題範囲が広く、やつたことを理解出来るかの確認には不適切ということ。だからってテスト作らなくても……。で、テストを受けてるのはわたし、ゆづくん、ひでちゃん、ムツツリー、あいこちゃん。ホントはアキも受けれるつもりだったらしいけど、……やつさんの状況だし。

昴「……終了だ」

時間がきた。テストが終了。答案をしょうじちゃんとあおいちゃんが回収していく。

愛子「終わつたね~」

康太「…………（ノクノク）」

雄二「秀吉、どんな感じだ？」

秀吉「うむ。何とかなつたと思つんじやが……」

棗「大丈夫だよ。」これはあくまでも確認テストなんだから。間違えたところをそのままにしないで、ちゃんと復習すれば大丈夫」

秀吉「久多羅木は優しいのう。確かにそりじやな」

康太「…………久多羅木、頼みがある」

棗「何?」

ムツツリーーー、その手に持つてる物は何?　あいこちゃんが持つて
いた物に似てるんだけど……。

康太「…………もう一回『「いや』と鳴いて欲しい」

棗「なんで?　まさか録音するき!-?」

そりや、小さい時は…………今でも小さいけど…………。確かに言つてた
よ。口癖だったし。でも言つと毎回危ない田をしたクラスメイトと
かが近寄つて来たんだよね。それをアキとあおこちゃんと兄さんが
近づけないようにしてくれたけど。

康太「…………頼む!-」

そういうつてムツツリーーーは土下座まで始めたよ。そこまでして録音
したいの?

雄二「「び」ひじたムツツリーーー。や」まどするとは……」

康太「…………あれば」

秀吉「あれば?」

康太「…………絶対に売れる」

棗「はい!　却下!-!」

康太「…………無慈悲な！」

雄二「なんだ。今回のは録音してなかつたのか？」

康太「…………あんな、……秘密兵器を隠し持つてるとは予想外だつた！ 本当に迂闊だつた！」

秀吉「ムツツリーーがこんなに感情を込めて話してゐ姿は始めてみるんじゃが……」

確かにそうだね。迂闊だつたのといふは本当に後悔してゐみたいだつたし……。

愛子「でもムツツリーー君、音声だけだとあまり意味がないような気がするんだけど」

康太「…………問題ない。不測の事態だつたせいで完璧とは言えなが、久多羅木が鳴いてる時の写真がある。ホントは動画の方がよかつたんだが……」

棗「写真とセットで売る気？」

康太「…………写真だけでも十分なんだが、やはり音声もあつた方が……」

雄二「おい、久多羅木はそんなに売り上げに貢献してゐのか？」

康太「…………売り上げは八位くらい。かなり高い」

雄一「八位で高いのか」

康太「…………が、これは古い情報。戦争が始まつてから人気が上がつた。急激に上がつたのはBクラス戦」

雄一「Bクラス？ ああ、久多羅木に殲滅姫とか殲滅天使なんて二つ名がついた時か」

棗「それやめて……」

その二つ名はどんどん広まつてゐるんだね……。

康太「…………そうだ。それから男女問わず人気が出でている。現在の売り上げは三位。しかも一位と一位にそれほど差もない」

秀吉「それなら欲しがるのもしようがないのかもしかれんのう」

愛子「あはは。これな～んだ」

あいこちゃんは機械。ボイスレコーダーかな？ を動かした。そして流れてきたのが……。

『にや』

わたしが鳴いた時のものだつた。

康太「…………く、俺が、またチャンスを逃しただと？」

あいこちゃん。それをどうするつもり？

愛子「ムツツリーー君。」これが欲しい?」

康太「…………凄く欲しい」

愛子「なら、僕と保健体育のテストで勝負してよ。前に負けた時から悔しくてね」

康太「…………勝つたらくれるのか?」

愛子「まあね。本当は僕だけの物にしておこうと思ったけど、これを使えば早く再戦出来るかもだしね。だからこれを賞品にやらない?」

何勝手な事言つてるの!?

康太「いいだろ?」

いつものためが全くない!

棗「ゆうくん……」

雄一「なんだ?」

棗「RPG持つてない?」

雄一「RPG?」

秀吉「ゲームの話かの?」

棗「ううん。ゲームの話じゃないよ」

雄二「…………ああ。そういうこと……。そんな物騒のあるわけねえだろ！ それと少し落ち着け！ らしくないぞ！ 深呼吸し！」

言われた通りに深呼吸をした。…………うん。なんかちょっと落ち着いた。

康太「霧島、保健体育のテストを至急用意してくれ。一人分だ」

翔子「…………わ、わかった」

雄二「あの翔子が圧されてるだと…………」

秀吉「凄い気迫じゃ…………」

棗「あいりちゃん。負けたらダメだよ？」

愛子「約束は出来ないけど、頑張るよ。じゃあね、棗ちゃん」

絶対に勝つてね。お願いだから。

昂「採点が終わつたぞ～」

テストの返却が始まった。80点が合格ライン。あの三人が作ったテストでだよ。なかにはかなりの意地悪問題もあつたし……。わたしが受けたのは数学。返ってきたテストは……。

棗「うへん。68点」

合格ラインに12点届かない。でもひでりちゃんに言つたようにこれ

で終わりにしなければいい。

葵「そうがつかつする」とないよ。なつめの数学の点数は元から高かつたから少し、ていうかほとんどを嫌がらせ問題にしたしね。正直50点取れればいいんじゃない、レベルで作ったからね」

ホントにやることが酷いよね。それで返ってきたテストで合格ラインを超えてたのはゆづくとひづくやんだけだつた。

マジッリーーとあいこちゃんの勝負は引き分けが十三回で最終的にあいこちゃんが勝つた。

それからじしばりくしてお皿。どうやら皿分達で好きに作つていいらしい。だから料理はわたしとアキとあいこちゃんと兄さんで簡単にだけど作つた。

アキがパエリアを作つてたけどね。わたしが汁物、スープの方が言い方はいいかな。ああいこちゃんと兄さんでサラダなどを作つて、それを皆のところに運んだ。

雄一「ほら、美味そうだな」

愛子「ほんとだね~」

秀吉「パエリアは誰が作つたのじゃ」

明久「僕だけだ」

美波「アキが作つたの? きっと見た目だけね」

棗「失礼な事言わないの。それにアキのパエリアは最高だよ。わたしもアキのパエリアにだけは勝てないし」

葵「そうだな。アキのパエリアはホントに美味しいからな。久しぶりだから楽しみだ」

翔子「……それじゃあみんな、いたداع事にしよう」

皆それぞれ食事を開始した。

康太「…………美味しい」

秀吉「言つてた通り美味しいのう」

雄二「確かに美味しいな」

明久「そういうのもられてよかつたよ」

美波「…………」

昂「どうした? 手が止まってるけど嫌いなものでもあつたか?」

美波「……やる気なくすわね」

葵「あ~。まあ、わからんでもない」

瑞希「あの~監さん」

明久「どうしたの姫路さん?」

瑞希「私も家で作ってきたんですけど……」

そういうてみいちゃんがバックからタッパーを出した。

棗・明久・葵・昴「……」

いま……、なんて言つた？ 作つてきた？ 約束を破つたの？

棗「みいちゃん……。約束は？」

瑞希「だ、大丈夫です。お母さんが一緒でしたから」

みいちゃんのお母さん？ 大丈夫なんだらうか？ ビリやう持つて
きたのは少しだけみたいだけ……。

昴「明久、試しに食べてみてくれ……」

明久「あよ、拒否したい……」

葵「それは全員が一緒だろ……」

棗「そりだよね……」

もしこれがバイオ兵器だったら？

雄一「これが前に言つてたやつか？」

秀吉「見た目は普通じゃの」

確かに見た目はね。でもその破壊力は普通じゃない。

愛子「何を警戒してるのでしらないけど……。なら僕が貰おうかな」

葵「ダメだよ愛子！！ 友達が死ぬところを見たくない！」

愛子「そんな……料理で死ぬって。流石にないでしょ」

クツ。経験した事がないからの樂觀。それは本当に危ない。

瑞希「そうですよ。ちゃんと一人じゃなくてお母さんと作つたんですから大丈夫ですよ」

愛子「そう言つてるんだから大丈夫だよ。じゃあいただきま～す」

あいこちゃんの口にみこちゃんの作った物体が入りそうなところで横からアキが奪つた。ナイスだよアキ。そしてそれを自分の口に入れた。つて何してるのアキ！？

バタン！

「 「 「 …… 」 」

アキが口に入れてからすぐ効果が発揮された。やっぱりバイオ兵器だった。

棗・葵「アキ！？」

昴「おい、明久！ 大丈夫か！ しつかりしろ！」

みいちゃんの実力をしらない人は今までわかつたよね？

明久「昴……。僕は用事が出来たみたいだよ……。ちょっと……逝つて来る」

そしてアキから力がなくなつたようなダランとなつた。

昴「明久……！」

棗「今すぐ心臓動作と呼吸の確認をして……！」

葵「ダメだ……！ 心臓が止まつてる……！」

昴「呼吸も止まつてる……！」

棗「今すぐに心臓マッサージと人口呼吸を…… 急いで……！」

愛子「……なんか大変な事になつてるんだけど」

翔子「……普通の料理でなんでこうなる？」

雄一「……姫路、あれに何を使った……」

瑞希「ふ、普通の材料ですよ……。えっと、食塩、硫酸……」

愛子「硫酸！？」

瑞希「それから、硝酸カリウム、クロロ酢酸ですね～」

雄一「普通じゃねえよ」

翔子「……ちょっと待って、それって

美波「どうしたの？」

翔子「……王水？」

雄二「なんだとーー？」

秀吉「王水ってなんじや？」

翔子「……簡単に言いつと、硫酸や塩酸より強力なもの」

愛子「……僕は吉井君のおかげで助かったのかな？」

雄二「そのかわり明久が逝きかけてるけどな……」

瑞希「あ、あはは……」

「「「「笑い事じやないーーー」「」」」

明久「……う」

昴「明久に反応があつたぞーーー」

アキに反応があつた！ ホントによかつたよ。死ななくて……。

明久「う……。昴？ 昴まで来ちゃつたの？」

葵「違うよアキ！ 現実！」

明久「……僕は生きてるの？」

昴「そうだ生きてるんだ！」

それから泣きながらして生きてる事を、生き延びた事を理解したアキは、本気で泣いた。気持ちはよくわかる。わたし以外の経験者もきっと同じ気持ちだろう。わたしは本気泣きのアキの頭を泣き止むまで優しく撫でてあげた。そしてみいちゃんに、今度約束を破つたら無理矢理にでもたべさせると脅しておいた。

第一十一話 勉強会？（後書き）

葵「まさか瑞希が作ってくれるとは思わなかつたよ……」

昂「まさかあの恐怖をまたへりつとは……」

轟「とりあえず誰も死ななくてよかつたよ……」

葵「そうだな。次は第二十二話 勉強会？ だ。またな」

第一二三話 勉強会？

お昼の事件から数時間たつて、今は夕食後のほほんとした時間。

明久「昴、ちょっと気になつてたんだけど」

昴「なんだ？」

明久「黒の腕輪って確か予定になかった力なんだよね」

昴「そうだが？」

明久「じゃあ腕輪の力に名前？ みたいなものはないの？」

昴「は？」

雄一「お前はそんなことを気にしてたのか」

明久「だつて気になるじゃないか。姫路さんはたしか熱線とかあつたよね。ムツツリーーーのは名前かわからないけど加速でしょ。そういうのがあるから黒の腕輪はどうなのかと思つたんだよ」

昴「名前はないな。自分でつけるか、他の人につけてもらつしかないだろ？」

葵「そうなの？ じゃあちよつと考えてみよつかな」

棗「あおーちゃんノリノリだね」

葵「当然。出来ればいい名前にしたいしな」

そつこつてあおこひやんは腕輪の力の名前を考えるのを開始した。

葵「信頼、友情、愛、熱血、魂、覚醒……」

棗「あおこひやん……、本気?」

葵「冗談に決まつてないじゃないか~」

そう笑顔で言つてからまた考え出した。

愛子「そつこえばや。棗ちゃんのクラスは清涼祭、何するの?..」

棗「中華喫茶だね。あいりゅうちゃんの方は?..」

愛子「僕達の方はメイド喫茶だよ」

棗「へえ~、メイド喫茶楽しそう。時間ががあれば行ってみようかな

翔子「……せひ来て欲しい」

棗「メイド喫茶か……。やっぱリメイド服を着るもの?..」

愛子「そつだよ。そつよりもメイド服着てなかつたらただの喫茶店になつちがつよ」

棗「そつこえばまだね」

秀吉「Aクラスも大変なんじゃの?..」

棗「わたし達もチャイナドレスを着る」とになりてゐる」

秀吉「女子は大変じやな」

あれ？なんか違和感がある。なんだろう？……ああ、そつか。
ひでちやんがまるで人事のように言つからだ。

棗「人事みたいに言つてゐるけどひでちやんも着るんだよ？」

秀吉「なんじやとー？久多羅木、おぬしまでワシの性別を女じや
と思つておるのかー？」

棗「何言つてゐるの？女子っぽく見えるけど男でしょ」

なにをわかりきつた事を聞くかな。

秀吉「わかつておるならい……いや待つんじや。男だとわかつて
着せるのかの？」

棗「ひでちやん、重要なのは性別じやないよ。これはもう似合つつか
似合わないかの問題だよ。だから着て一緒に売り上げを上げよー。」

秀吉「なんなのじや……。ちやんと男と見てくれる者から、女装を
勧められておる……。数少ない男と見てくれる人から……」

愛子「ま、まあ頑張つて」

翔子「……もつとここ」とがある

康太「…………撮影なら任せろ」

ムツツローー、「それはおかしい……。

棗「あ、と。そうだ。ひでちゃん、ちょっと協力して欲しいんだけど」

秀吉「うむ? 何を協力するんじや?」

棗「それじゃちょっと耳をかしてね」

そういうてわたしはひでちゃんに耳打ちをした。

秀吉「それは面白がりじやが、いけのかの?」

棗「わたしからみていけると悪い。ひでちゃんせびつ悪い。」

ひでちゃんは考えて、答えが出たみたい。

秀吉「問題がないの?」

棗「それで、そのことひでちゃんに協力してもらいたい。いい?」

秀吉「それなら協力するのじや」

「にわたりしとひでちゃんの協力が約束された。

愛子「なに? なにか面白い話?」

翔子「……私も気になる」

棗「そうだね……。清涼祭当番をお待ちください」といって「うかがな

秀吉「そりじゃな

棗「それでこれは問題なくすすむね。ただ後一つ問題が残つてゐるんだよね……」

翔子「…………問題つて?」

棗「清涼祭での設備の貸し出し申請の事なんだよね

愛子「あれつてほとんど断られないはずだけど

設備の貸し出し申請……清涼祭でだけのものだけ、これは貸し出して欲しい物を用意されている紙に書いて自分のクラスの担任・教頭・学園長の許可を貰わないといけないもの。全員の許可を貰つてようやく貸し出して貰える。

翔子「…………無理な要求したとか?」

棗「それはないよ。テーブルハ個が無理な要求だとは思わないよ

愛子「まあそれくらいなら問題ないはずだけど……その申請誰がしたの?」

秀吉「久多羅木じやな

翔子「……それはおかしい。Fクラスの数少ない常識人が出しているのに。条件も無理なものじやないし」

数少ない常識人つて……。まあ、事実常識人が少ないので確かだから認めるけどさ……。

秀吉「そうなのじや。鉄人すら通つてあるんじやが。教頭はなんなんじやうつかのう？」

棗「喫茶店だからやりたくないけど、テーブルを二まかすしかなくなつたし」

翔子「……棗、テーブル八個、Aクラスのから貸してあげる」

棗「いいの？ しょいこちやん達も必要な分しか申請してないんじやないの？」

それは嬉しい提案なんだけどね。

愛子「大丈夫だよ。予備込みで申請してるからね」

秀吉「Aクラスが教師から睨まれたりせんかのう？」

翔子「……問題ない。クラス同士での貸し出しぶ何も言われていな
い」

棗「わかつた。ありがとう。後でゆづくと言つておくね」

翔子「……棗」

棗「なに？」

翔子「……頭撫でていい？」

棗「いいけど」

そういうたら、しうりちゃんは頭を撫でた。

翔子「……小さくて可愛い」

！ 今なんかボソッととんでもない事言われたような気がする……。
ま、まあ。いいかな。これで問題は全部クリアだね。後は喫茶店の
売り上げと召喚大会を頑張ればいいだけ。

葵「決まつた～！」

棗「にやー…？」

急に大声ださないでよ。驚いたじゃない。それでしうりちゃん。
なんでわたしは抱きしめられてるの？

秀吉「水無月。何が決まつたのじゃ？」

葵「腕輪の力の名前だよ」

棗「……今までずっと考えてたの？」

葵「当然」

愛子「それでどんなになつたの？」

葵「天の裁きと名付けたよ」

棗「名前負け……って事はないか。あれだしね……」

葵「他にもいろいろ案があつたんだけどね。悩んだ結果これになつた」

明久「他にはどんなのがあつたの?」

あ、アキだ。眞もいつちの話に参加するんだね。

葵「ほかには、稻妻キック」

棗「あの演出でキック?」

葵「神風」

雄一「それはそれでどうなんだ?」

葵「ダメだ、腐つてやがる」

昴「それは止めとけ。それにそれは台詞だ」

葵「どこへ行く?」

愛子「今度は城が空飛んでるやつかな?」

もういろいろだめだよ、あおいちゃん……。しかもピックアップしたのそこなの? もっと有名な台詞があるでしょ?

明久「えー……」

康太「…………これなら悩む必要がない」

瑞希「あおいかやさん。じつにこれが相変わらすなんですね」

葵「いろんな感じだね。じつから悩んで最初のにしたよ」

棗「……そつか、いい名前付けられてよかつたね」

葵「ちなみに熙のも考えてみた」

昴「余計な事を……」

兄さん。小声じゃなくてはつきりいいなよ。まあ兄さんには同情するよ。

翔子「……どんな名前になつた?」

葵「神の息吹」

昴「そんなの言つたら、イタイ人確定だな」

また小声ですか。でも同意します。

葵「なんだつたら他の案も聞く?」

昴「い、いや。いい」

こんな感じでのほほんとしながら残りの勉強会を過ごして、勉強会は終わつた。それから数日、清涼祭が始まつた。それとあおいちゃんから言わたんだけど、もしわたしの腕輪も黒の腕輪だつたら名付けてあげることに。もし腕輪を持つことになつたら、黒の腕輪

だけは本氣で遠慮したいと思つた。

第一二三話 勉強会？（後書き）

棗「これで勉強会も終わりだね」

葵「次からは清涼祭だな」

昂「まあ、棗は喫茶を頑張れ」

棗「頑張るよ。それじゃ第一十四話 清涼祭開始 の予定です。またね」

第一十四話 清涼祭開始

雄一「なんとか形になつたか。テーブルも「まかさなくてよくなつたしな」

今日は清涼祭初日です。清涼祭で喫茶店をするついで問題だつたテーブルも、勉強会の時にしようとあい「わわわんが貸してくれると言つてくれたので、それで解決したしね。

棗「ムツツリーーー、厨房の方はどう?..」

康太「…………味見用」

そつこつてムツツリーーーは木のお盆を差し出してきた。そこにあつたのはお皿に載つた胡麻団子と陶器のティーセットだつた。

秀吉「美味しいわ~じやの~」

美波「土屋、これウチらが食べちゃつていいの?」

康太「…………(「クリ)」

瑞希「では、いただきますね」

わたし、ひでちゃん、みなみ、みいちゃんの四人で胡麻団子を食べてみた。

棗「美味しいね~」

瑞希「ホントに美味しいです。私も作ってみたいですね~」

……みいちゃん、恐ろしい事言わないで……。あれを見てた人はみんな青い顔してるじゃない。

棗「みいちゃん」

瑞希「くーちゃん。だ、大丈夫ですよ。約束は守りますから」

それはよかつたよ。

美波「表面はカリカリで中はモチモチで食感もいいし」

秀吉「甘すぎないところもいいの?」

食べた皆からは大絶賛だね。わたしもそう思つし。お茶も美味しいし。さて、胡麻団子は残り一個。どうしようかな。

雄二「そんなに美味しいのか? どれ」

そういうつてゆうくんが最後の一個を食べた。

明久「ちよ、何やつてるの? 雄二! 僕の分がないじゃないか!」

棗「アキ、これよかつたら食べる?」

明久「いいの? ありがとう。いただきます」

美波「ちよ、待ち……」

みなみが何か言おうとしてたけど、気にせずニアキは胡麻団子を食べた。

美波・瑞希 ああ――！！

明久一 うん！ 本当に美味しいね

瑞希「吉井君じりして食べちゃつたんですか!?」

明久「ん？ もしかしてさつきの胡麻団子は姫路さんが作ったの？ だとしたら効果がないのはおかしいし……。いや、でも、なつめが一緒にいたのなら……」

なんかアキが考えながらブツブツ言いはじめたね。
みいちゃんが作ったものじゃないから。
大丈夫だよアキ。

美濃一そんじやなくて、わざわざ下井が食べたのはなーめの食べかけ

棗「それがどうかした?」

美波「だつて間接キスになるじゃない！」

は
あ
?

棗「えっと、そんなことで騒いでるの？」

その程度で騒ぐなんてどうなの？ 直接するんなら流石に騒ぐかも
しないけど、この程度に騒ぐのはどうかと……。まあ、わたしは
アキにしかしないつもりだけね。

美波「そんな」とじやないわよー。」

瑞希「そんな」とじやありませんー。」

棗「全く、アキからもなんとかい……」

振り向いてアキを見たら、アキの顔が真っ赤だつた。ていうか、アキもなんだね。

明久「え？ な、なに？ なつめ？」

棗「……なんでもないよ」

雄二「さて、開店時間も近い。女子達は着替えて来てくれ

そして着替え中

さつきからなんか視線を感じる。なんだらう？ もしかして覗き？ だつたらけないとね。覗いた人の……。とまあ、冗談は置いといて、見られてるのは確かなんだよね。しかも嫉妬とか、羨望とかいろいろ混ざつたやつ。で、その見ている人がいるであらう場所を確認すると……。いた、なんか怖い雰囲気のみなみが。

美波「何で皆そんなに……」

みなみは何を言つてるの？

瑞希「美波ちゃんどうしたんですか？」

美波「なんでそんなデカイの二つもつけてんのよー！？」

「デカイ? 一つ? なんのことだろ?」わたしはみいちゃんを観察して、自分も見て、美波を観察した。

繭一ああ、なる程

美波一な、何よ……

黙・なんでもなしよ」

笑顔で言へてあげた

珍者 おもて 桜がりまじか 脱てくわ

悪魔かにさうしたがちに悪魔かにさうしたがちに悪魔かにさうしたがちに

美源 ·

「ああ、みなみが発狂した。なくさめてあげたいけど……わたしがやつても火に油だよね、たぶん……。だってわたしは小柄だけど胸はあるから。ちなみにわたしの理想はあおいちゃんくらいなんだよね。身長155cmのDサイズ。羨ましいよね。わたしは145cmのDサイズ。この10cmが……。たまに……いや、「めん、結構な頻度で小学生に間違われるし。

さて、こんなことを考えてゐつたに着替えも終わつたし戻るうかな。

棗「一人とも着替え終わつた？」

わたし達は教室に戻った。ムツツリーーーが凄い勢いで写真を撮り始めたし、周りは騒ぎまくして静かにするのが大変だった。例えば……。

『久多羅木さん、こいつに向いて…』

『お願い久多羅木さん、付合つてください…』

『バカヤロウ。是非俺と…』

とかこんな感じ。その時のみにちやんとみなみが凄く怖かった……。
だって。

美波「ねえ。なんでウチらは何も言われないの？」

瑞希「さあ、どうしてでしょう。皆さんの声を聞いてたらわかるかもしがませよよ」

美波「そうね。原因の説明どこせましょつか」

瑞希「原因をみつけたらお仕置きしましょつか」

美波「当たり前な事いわないでよ瑞希」

なんて会話を隣でしてるんだから怖いよホント……。とりあえず」「んな事があつたんだよ。

雄一「着替えが終わつたか」

秀吉「よく似合つておるの?」

ちなみにみいちゃんが赤色のチャイナドレス、みなみは青色のチャイナドレス、わたしは黒色のチャイナドレスだよ。

雄一「……明久、いつたいどうした?」

どうかしたの? 気になつてアキを見てみたら。

明久「…………」

なんかわたしをジッと見て、何かブツブツ言つてる。何を言つてる
かわからないけど。

棗「アキ~、どうしたの?」

明久「…………」

反応がない。

棗「アキ~、ホントにどうしたの?」

今度は肩を揺すつてみた。

明久「はつー!」

雄一「明久、やつと戻ってきたか?」

棗「どうしたのアキ?」

明久「な、なんでもないよ……」

なにがあつたとしか思えない反応だよね。まあ信じてあげるよ。

雄二「さて、明久も戻ってきたし、次だ。秀吉、これに着替えてくれ

秀吉「やはり着ないといけないのかのう

明久「当たり前じゃないか！ 秀吉は似合ひだから…」

なんか納得いかないね。そういえばわたし、チャイナドレスの感想貰つてないような気がする。

秀吉「納得いかんのう」

そろそろ計画を始めようかな。

棗「ひでちゃん、準備出来てる？」

秀吉「出来るぞい」

雄二「？ なんの話だ？」

秀吉「なに、明久にもチャイナドレスを着て貰おうと思つてのう」

明久「何言つてゐのや。僕が着たら店の悪評になるじゃないか」

棗「そんなことはないよ」

明久「またまた」。そんな冗談を

棗「大丈夫。絶対似合つから」

明久「似合わないって。それにもうチャイナドレスはないんじゃないの？」

秀吉「大丈夫じゃ。演劇部の衣装をかりてきただのじゃ」

棗「とにかくひでちゃん、後よろしくね」

秀吉「任せられたのじゃ」

そういうひでちゃんはアキの襟首を掴んで引っ張つて行った。

明久「着るわけないじゃん！　ていうか振りほどけない！？　秀吉
つてこんなに力があったの！？　くそ、離せ————！」

雄一「なあ、久多羅木。明久に着せて大丈夫なのか？　下手したら
さつき明久が言つたように悪評に繋がる可能性もあるんだが……」

棗「大丈夫だよ。戻つてくるのを待つてね」

ゆづくんは心配しつだけど、大丈夫だよ。それからしばらくしてひ
でちゃんが戻つて来た。

棗「うん。ひでちゃんやつぱり似合つ」

秀吉「あまり嬉しくないの？」

美波・瑞希「…………」

雄一「明久はどうした?」

秀吉「セレブの。それでは主役の登場じゃ」

そう言つてひでちゃんはクラスのドアを開けた。そこには腰まである長い黒髪に黒のチャイナドレスを着たアキが立っていた。どうやら少し化粧もしてゐみたいだね。はつきりいつて美少女にしか見えない。

明久「なつめ、これでどう? 全く似合わないでしょ」

棗「何言つてるの? 憎く似合つてるじゃない」

そりぢやなかつたら、ゆづくらやマッシュコーネが顔を赤くする」とはなによ。

棗「ひでちゃん。いい仕事したね」

秀吉「うむ。ワシもここまでなるとは思わなかつたのじゃ。美少女と言つても過言ではないの」

明久「過言だよ!」

もう今のアキを見て、その人が吉井明久だと思える人はまずいないくらいの出来だね。

秀吉「いやいや、あそこをみてみるのじゃ」

そういうつてた、ひでちゃんの指差した場所にいたのは、膝と手をついて凄く落ち込んでるみなみとみいちゃんだった。その他の場所をみてみたら意識をとばしてる人がいたり、鼻血を出している人がいたり、前屈みの人人がいたりとさまざま。

雄二「よ、よし。明久。そのまま接客しろ。俺が許可する」

明久「嫌だよーー。何でこんな格好で……」

棗「アキ、ちょっと耳かしてね」

明久「どうしたの？」

棗「（これも中華喫茶の売り上げのためなんだから我慢しないとね）

」

明久「（いや、でも、僕がこんな格好してたら……）」

棗「（大丈夫。それはクラスの反応を見ればわかるはず）」

明久「（もしかして、なつめもそう思ってるの？）」

棗「（うん。とっても可愛によ）」

明久「（……わかった。やるよ。といひでなつめ）」

棗「（なに？）」

明久「（これって耳打ちするよつな話かな？）」

棗「（アキも同じでしょ。ノリノリでわたしに会わせて小声で話してるんだから）」

明久「（…………確かに）」

棗「ゆうくん。アキは了解してくれたよ」

ん？ もうゆうくんの顔は赤くない。頑張いいね。

雄二「そうか。久多羅木とアキちゃん……明久がいれば大丈夫だろ？」「そりでもないみたい。田茶苦茶動揺してるね。

雄二「このレベルの高い美少女一人に、姫路、島田、秀吉がいるんだ。これは期待出来そうだな」

明久「なんかサラッと僕を女扱いしたよね」

雄二「いや、すまない。久多羅木の時は前もって準備してたから問題なかつたんだが、まさか予想外に明久がこんなことになるから動搖してな。似合いすぎだろ」

康太「…………（ノクノク）」

どひやらムツツリーもゆうくんと同じ用に準備してたみたいだね。

明久「嬉しくない評価だよ。それとなつめをどんな風にみてたのさ？」

雄二「や、やあ。おまえら復活しろ！ 清涼祭が始まるぞ」

明久「逃げやがつたな」

棗「まあまあアキ。落ち着いて」

『気してくれるのは嬉しいけどね。』

第一十四話 清涼祭開始（後書き）

昴「…………」

葵「どうした、昴？」

昴「明久はいいんだ」

葵「はあ？」

昴「棗に告白したやつ潰してくる」

葵「ちよ、待つて！ 落ち着いて」

昴「離せ——！」

棗「あ、あはは。えつと次は第一十五話 召喚大会一回戦
です。またね」

第一十五話 召喚大会一回戦

棗サイド

棗「胡麻団子を一つと烏龍茶を一つですね」

今わたしはウェイトレスとして働いてます。何で詰つかウェイトレス少くないですか？アキとひでちゃんを女装させたけどそれでも五人だし……。もちろん男子のウェイターもいるけど、なぜかウェイトレスに声をかけてくるし。いや、なぜでもないね。しかも中華喫茶のウェイトレスは誰が一番かを決めるとか言い出しあじめたせいか、みなみとみいちゃんが妙に張り切ってるし。

明久「なつめ、そろそろ召喚大会の時間だよ」

棗「うん。わかった。すぐ行くよ」

雄二「秀吉、俺らもだぞ」

秀吉「うむ。わかったのじゃ」

美波「そう」え巴アキ達も大会にでるのよね？」

明久「？ そうだけど？」

その話ならしたよね？ なんだろ？

美波「あの時、聞いてべきだったかな……。誰と幸せになりに行くの？」

明久「何の話？」

あれだね。如月ハイランダのペアチケット。結婚までをプロトコールするつて言つやつだよね。一応回収が目的だから狙つてるのは確かだけど……。アキはどうするのかな？

美波「ペアチケットの話よ」

明久「ん~。そうだね……。……なつめと行こうかな」

ええ！？ ほ、本気！？ いや、もちろん、これは本当の事が言えないから幼なじみのわたしと行くつて言つて、場を收めようとしてるんだと思うけど。わかつても嬉しいね～。アキの好きな人って誰なんだろうね？ 気になるな。

瑞希「へえ～。その話詳しく聞かせて欲しいです」

美波「そうね。坂本や木下じゃなくなつめだつて事も気になるしね」

明久「なんでそこド雄二」が出てくるのか。秀吉ならともかく

秀吉「あ、明久。ワシはそんなことを言われても困るのじゃが……」

ひでちゃんも大変だね。ひでちゃんの認識はほとんどの人が女だからね。でもわたしは、ちゃんと男の子だつてわかるから元気を出してね。

雄二「たぐ、お前らは……、漫才してないでさつとと行へば。不戦敗なんてやつてられないからな」

確かにそれもそうだね。

明久「早く行くよなつめーーー！」

そういうてアキは、わたしの手を取って走り出しました。

美波「待ちなさいーーー！」

瑞希「待ってくださいーーー！」

アキも大変だね。

明久サイド

僕達は一人の鬼をなんとか振り切って、今、大会会場にいる。でも
なんで、美波と姫路さんに攻撃されなくちゃいけないんだろう?
僕何かした? 何もしていないよね? 理不尽な攻撃ばかりだし……。
嫌われてるのかな?

棗「そういうえば、一回戦の相手って誰かわかる?」

明久「いや、僕もしらないよ

棗「そつか。時間なかつたから確認してなかつたんだよね。ん~、
まあ、何となるよね」

明久「うん。たぶん、なんとかなるよ

まあ、これで一回戦から雄一とかだったら、どうすんの? つて話

だけど。

数学教師「それでは一回戦を始めますので来て下さー」

棗「それじゃ行こつか」

明久「うん」

僕達は対戦相手を待つた。ちょっとしたら対戦相手が来たけど……
あの一人なんだ……。

小山「久多羅木さんが相手ね」

根本「…………」

根本君が少し怯えてるね。そして僕も今、少し怯えてるんだ。だって……僕の隣、なつめだね。なつめがもう臨戦態勢、下手すればそのまま攻撃を始めるんじゃないかなって感じだし。

数学教師「えー。観客がいますが、緊張せずいつも通りでいいですよ」

どうやら先生は僕と根本君が緊張してると勘違いしてるんだね……。

数学教師「それでは始めてください」

小山「久多羅木さん」

棗「なに? 小山さん」

小山「今日は久多羅木さんの幼なじみのバカがいないみたいだけどどうしたの？」

小山さん。戦いの内容はそれでいいの？まさかの舌戦だね……。
それにさつき言つてたなつめの幼なじみのバカつて僕の事だよね？
僕はいるよ？わからないの？……そういえば、中華喫茶で仕事をしてそのまま来たんだつけ。と、いうことは……。僕は黒髪のカツラをつけたままで、チャイナドレスを着ているわけで。

明久「チャイナドレス着たままじゃん……」

小山「ほら、どうしたの？ 幼なじみのバカはー！」

ブチッ！

今何か切れる音したよね？ 僕は隣を見てみると……。

棗「アハッ！」

物凄くいい笑顔で笑つてるなつめがいた。あの笑顔だけなら、ほとんどの人が見惚れてたかもしれないけど、そうもいかない。だつて、なつめからよくわからない黒いものが出てるんだもん……。なつめが怒ってるんだね。

根本「お、おい。もうやめる。これ以上挑発するな」

小山「なんですよ。たかがFクラスでしょ。生身では負けたけど、召喚獣なら話は別よ。絶対あの時の事をやり返すんだから！」

小山さんとなつめに何があつたんだろう？

棗「小山さん……前にも言つたはずだよ。アキをバカにするなって」

小山「ふん。バカな事は事実でしょう」

根本「どんどん勝ち田がなくなつていいく……」

根本君、「」愁傷さまです。それと少し違つよ。もう既に勝ち田なんかないんだよ……。

棗「オッケー。わかつたよ。滅ぼしてあげる」

明久「なつめ、呪喚獣で戦うだけにしてね」

棗「……善処するね」

ああ、心配だ……。

小山「たかがFクラスが調子に乗らないで。サモン」

根本「もう……。無理かな。サモン」

棗「わたし一人でやるよ。いいよねアキ?」

明久「もちろん」

今になつめて、逆らうなんて選択肢が存在しないから。

棗「ありがと。それじゃ、すぐに終わらせるよ。サモン」

そしてなつめが召喚して、僕も一応召喚した。この後ははやかった。なつめが先に動いて一瞬で終わらせた。Bクラス戦の再現だった。

数学教師「えー。勝者。久多羅木、吉井ペア」

棗「アイツを見ていたくない。さっさと教室に戻ろう」

明久「わかったよ」

僕はなつめの頭を撫でながらFクラスに戻った。

秀吉サイド

雄二「さて一回戦だ。気合を入れていこうぞ。秀吉」

秀吉「うむ。了解じゃ」

ワシらはこれから一回戦をはじめるのじゃ。そういうれば相手は誰かのう?

秀吉「雄二、一回戦の相手は誰なのじゃ?」

雄二「二年のBクラスのペアだ」

むひ。初戦からBクラスかのう。これは大変そうじゃ。

数学教師「それでは一回戦を開始します。選手は来て下せご」

雄二「よし、秀吉行くぞ!」

秀吉「了解じゃー。」

「うむ？ あれが対戦相手かのう？」

真由美「がんばりうつね。律子」

律子「うん」

対戦相手の女の子一人が頷きあつたのう。微笑ましい光景じやな。

数学教師「それでは始めてください」

真由美・律子「サモン」

相手の召喚獣は西洋の鎧に剣をもつてるのう。

秀吉「ワシのりもやるのじや」

雄二「そうだな」

秀吉・雄二「サモン」

数学 Fクラス 木下秀吉&坂本雄一 103点&179点

VS

数学 Bクラス 岩下律子&菊入真由美 179点&163点

秀吉「雄二の点数が高いのう」

雄二「秀吉も結構取れてるじゃないか」

秀吉「これも勉強会のおかげじゃな」

あの勉強会のおかげでワシもいくらか成績が上がったのじゃ。あれはなかなか大変じゃつたが楽しかったのう。

真由美「律子！」

律子「真由美！」

真由美・律子「行くわよー！」

そういうて二人は同時に襲い掛かつてきただのじゃ。息がピッタリじやな。そして一人とも剣を振り下ろしてきたのじゃが、それをワシも、雄一も後ろに下がつて避けたのじゃ。

雄一「いいチームワークだが、しょせんは女の子の仲良しじつこだな」

挑発してあるなあ。

律子「失礼ね！」

真由美「私達のチームワークは最強よー！」

それはどうじやろう。久多羅木と明久のペアをみた事があるのじゃが、明らかに久多羅木、明久ペアの方が上じやな。

雄一「さて秀吉、久多羅木や明久は初戦がBクラスが相手だが、問題なく勝ち進むだろう。俺達はどうする？」

秀吉「無論。こんなところで負けるつもりはないのじゃ」

実はこの召喚大会でやりたい事があるのじゃ。それは久多羅木や明久と戦つてみたいというもののじゃ。普段は同じクラスだから戦う機会もないしのう。あの二人に自分がどこまで通じるか試してみたいのじゃ。雄一もワシの目的をしつているのじゃ。

雄一「いい返事だ！ やるぞ秀吉！」

今度はワシらから討つてたのじゃ。雄一が点数の高い律子を、ワシがもう一人の方を担当する一対一で戦う事にしたのじゃ。

ワシは薙刀を上から振り下ろしたが簡単に避けられた。じゃが手を休めるつもりはない。距離を詰めて横に一降りしたら相手の召喚獣に当たったのじゃが、また距離をとられてしまったのじゃ。

数学 Fクラス 木下秀吉 103点

V S

数学 Bクラス 菊入真由美 142点

真由美「点数が低いからって油断は出来ないね」

秀吉「むう……まさかこれほどダメージにならんとは……」

さつきのは当たったんじゃなくてかすっただけかのう。そういえば雄一の方はどんな状況なんじゃ？ そつちを見てみたら雄一が圧倒しておった。いつも負けてられるのう。

真由美「余所見？ 隨分余裕だね」

秀吉「……」

相手の召喚獣がもう剣を振り下ろしておるのじや！ 今から避けるのは……むりじやな。ワシは薙刀で相手の剣をおさえたのじやが、わずかに削られたのう。

秀吉「ここからは本氣じや」

もううん最初から本氣じやつたが気持ちの切り替えに驚いてみたのじや。それからワシは相手と打ち合つたり、回避したりとして戦つて、しばらくして決着がついたのじや。

数学	Fクラス	木下秀吉	47点
VS	Bクラス	菊入真由美	0点

雄一「秀吉、よくやつた」

そう雄一は言つてくれたのじや。どうやら雄一の方は既に勝負がついていたようじやのう。

数学教師「そこまで。勝者。木下、坂本ペア」

雄一「よし、秀吉。クラスに戻るわ」

秀吉「わかったのじや」

ワシはここんどここで負けられないのじや。

葵サイド

葵「さて始まつたね。大会が！」

昂「テンション高いな」

葵「そういう昂だつてやる気満々だろ」

昂「まあな」

私はこの大会で手に入るペアチケットを目的に参加してるけど、他にも目的がある。ただ単純に楽しみたい。楽しめる時に楽しまないのは人としてどうかと思つ。それに私は騒がしいのは大好きだ。祭とか最高だよね。

葵「そういうえば一回戦の相手どいか知つてる？」

昂「たしか三年のAクラスらしいぞ」

葵「ふーん。三年か。楽しめるかな？」

昂「どうだらうな。なにせバランスブレイカーだし」

葵「もうそれはいいって……」

数学教師「一回戦を開始します。選手は来て下さー」

昂「呼ばれたな」

葵「んじゃまあ、行きましょうか」

あそこにある男一人が相手かな。

数学教師「では、始めて下せー」

葵・昴「サモン」

数学 Aクラス 水無月葵&久多羅木昴 882点&679点
VS

数学 Aクラス 南条薰&相川元氣 299点&325点

試合は……あつという間に決着がついた。三年だというから少し期待したんだけどな。

数学教師「しょ、勝者。水無月、久多羅木ペア」

葵「なんかいまいちだな」

昴「確かにそうだな」

葵「これならなつめ達の方が強いんじゃないのか?」

昴「おお。そうだ。なら葵にいい情報だ」

葵「どうしたの?」

昴「棗と明久が組んで大会に参加してるぞ」

葵「ホントに!..」

昴「ああ。ただブロックが違うみたいでな。当たるのは決勝だらう

葵「なつめとアキ、あの二人と戦えるんだ。楽しみだねえ」

昂「棗達が決勝に来る前に負ける可能性もあるがな」

葵「大丈夫だよ。なつめ達なら」

この大会、更にやる気が出てきたよ！」

第一一十五話 召喚大会一回戦（後書き）

棗「あおこわやんと兄さんも一回戦突破したんだね」

昴「当然だな」

葵「相手にならなかつたな。なつめも勝つたんだよね」

棗「うん。そうだよ」

昴「でもあれはどうなんだ。ブチ切れ状態じゃないか」

棗「だつてアキがバカにされたんだもん……」

葵「なつめ頑張れよ」

棗「？」

葵「それとこれからも勝ち進んでね」

棗「あはは。頑張るよ。それじゃ次は第一一十六話 営業妨害 の予定です。またね」

第一十六話 営業妨害（前書き）

バカテスらしさって出すの難しいよね。

P V 5 5 0 0 0
ユニーク 1 0 0 0 0

突破です。

見ていただきありがとうございます。

第一十六話 営業妨害

わたし達は一回戦が終わって今教室に向かって歩いている。頭を撫でられながら。ホントはもう機嫌はなおてるんだよね。でも撫でられるのが気持ちいいから機嫌の悪い振りをしてるんだよ。そんな状態で教室に向かってたらムツツリーーと遭遇した。

棗「ムツツリーー、ビリしたの？」

明久「そうだね。お店の方は大丈夫？」

康太「…………その店の事で話がある」

棗「お店がどうかしたの？」

康太「…………営業妨害が発生した」

そんなことする暇な人がいるの？

明久「学園祭の出し物で営業妨害？ そんなのいるんだね……」

棗「それで、どんな人？」

康太「…………うちの学校の三年で、坊主とモヒカンの男」

明久「スッゴイ特徴だね」

本当だね。それならすぐみつけられそうだ。

棗「ムツツリー」。今の情報をゆうくんにも伝えてくれる

康太「…………（「クリ）」

ムツツリーは頷いてから、ゆうくんのところに行つた。

明久「それじゃあ、急いで教室に戻ろうか

棗「うん。営業妨害してるなら、その対応しないといけないし」

わたし達はFクラスに走つて戻つた。

明久「なんか教室が賑やか、といつよつよつむせーね」

棗「まだ営業妨害してる人がいるって事でしょ」

わたし達は教室についた。妨害者は確かモヒカンと坊主だったね。さがそうと思つたけど、さがす必要もなかつた。だつて大声で文句言つてるもん……。

常村「ここ料理は不味いなー」

夏川「全くだ。よくこんなので営業してくるよな」

常村「なんで豚の餌を飲食店で扱つてんだよ」

夏川「最低のFクラスだからだろう。豚の餌ぐらいしか出せないんだろうよ」

あー、それ以上言わないほうがいいと思つた。他のお客様が凄く怖い

顔で睨んでますよ？

棗「……アキ、ちょっと行つて来るわ」

明久「大丈夫なの？」

棗「大丈夫。時間を稼ぐだけだから」

明久「何かあつたら僕も動くからね」

棗「うん。その時はよろしく」

わたしは迷惑二人組みに向かつて行つた。

棗「お客様。周りのお客様の『迷惑になりますので騒ぐのはお控えください』

夏川「ああ？ なんだ？」

常村「俺らがどうしようが勝手だらうが」

棗「そういう訳にもこきません。ただでさえ他のお客様の『迷惑になつてします』

夏川「ていうかさー、こいつ可愛くね？」

常村「だよなー」

舐めるようにみないで欲しいんだけど。気持ち悪い。この二人どうしようかな？

夏川「こんな不味い物しか出せない店の店員なんかしてないで、俺らと祭を楽しもうぜ」

常村「そりゃいいなー。どうだ、店員さ。こんな不味い店ほとりでよ」

もしかしてナンパされてる？ おつかしいな。何がどうなつてこんなこと……。

棗「お断りします。わたしにも選ぶ権利がありますので」

夏川「なんだ？ 俺らじや不満だつて言いたいのか？」

不満しかないと。

常村「そうだぜ。俺ら以上のやつなんていいないんだからな

これ以上ないと言わんばかりのドヤ顔で言われても……。そんな自信はどうから出てくるんだ？ ～～しうつがない。少し挑発でもしてみようかな。

棗「たいした自信ですね。一度鏡で、自分をよく観察した方が賢明かと思いますよ。ナルシストさん達」

夏川「てめえ、調子に乗つてんじやねえぞー。」

常村「下手にでたりや調子に乗りやがつてー。」

ナルシストさん達が激昂しながら席から立ち上がりがつたよ。何て言つ

が、恐ろしく沸点が低いね。さっきの俺ら以上はいない、は正しいと判断したよ。ナルシストさん達より沸点の低い人はいないと思うもん。さて、この一人はどうしようかな？ 今にも殴りかかってきそうだし。…… ゆうくんが来るまで待つてよつかと思つたけど、潰しといた方がいいかな。…… これ以上店に迷惑かけて欲しくないし、滅^ヤろうか。

夏川「グペッ」

ん？ 坊主のナルシストが奇妙な声を上げながら吹っ飛んでいった？ わたしあまだ何もしてないけど……。

雄一「代表の坂本雄一です。何か問題でもございましたか？」

ああ、ゆうくんが来たんだ。なら大人しくしてよつかな。……いや、更に追い込む？ ゆうくんとアイコンタクトで確認したらアキの後ろに隠れて怯えた振りをしててくれとの事。言われた通りアキに駆け寄つて、後ろに小さくなつて服を少し握つて隠れた。

常村「……連れが殴られたんだが」

雄一「それは私のモッターの『パンチから始まる交渉術』に対する冒涜ですか？」

斬新な交渉だね。

常村「ふ、ふざけんなよこの野郎……！ 何が交渉術ふざやあつー！」

雄一「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後に……その前に」

ん？ やひしたんだやひ。

雄一「お客様の罪を確認しましょうか。アキちゃん、このお客様は何をしていました？」

ゆづくんが「うちをむくとお客もいつけを向いた。

明久「あ、はい。ここのお客様はお店へクレームを言つてきました。それと同時に今、当店でお食事をされていたお客様を侮辱されました。最後に……」

アキがわたしをみて。

明久「こちらのウーホイトレスをお店の事を理由にセクハラをしようと、いまくらいかなかつたら今度は暴力で言つことを聞かせようとしていました」

今のアキの発言を聞いてお客様からも声が上がる。その全部が、わたしをなぐさめるものやナルシストさん達を避難するもの。どうやらお客様はゆづくんが殴る前のわたしのやつとりはみてなかつたみたいだね。

雄一「これが、お客様の罪です。では最後の交渉を始めましょう」

夏川「ち、ちなみにどんな交渉をするんだ」

雄一「たいした事はあつませんよ。『プロレス技で締める交渉術』です」

常村「わ、わかった。こちらの夏川を交渉に出すわ」

夏川「ちょっと待てや常村！　お前、俺を売のうとしたのかー？」

雄一「それで常夏コンビとやら、交渉を続けるか？」

なるほど、常夏コンビね。ナルシストさん達より言いやすいね。

常村「い、いや、もう充分だ。退散させてもらひ！」

雄一「そうか。それなら……」

ゆうくんは坊主の方にバックドロップをきめた。うん。綺麗にきまつたね。

雄一「アキちゃん、鉄人を呼んできてくれ」

常村「鉄人だと…！　〔冗談じゃない〕…！」

そういうて常夏コンビは逃げ出した。三年だから西村先生はあまり知らないと思ってたけど、そうでもないんだね。まあこれで問題解決。お客からはなぜか歓声があがつてゐるし。

雄一「お客様方、お騒がせしてしまい大変失礼しました。問題は解決致しましたので、『ゆうくんとおくつわきくださ』」

ゆうくんがちゃんと代表やつてるよ。なかなかレアかもしねり。なん？　なんで教頭がいるんだろう。あんまりこうこう行事には関心がないって噂だけど……。何もたのんでないし。あ、席を立つて、出て行つた。いつたい何しに来たの？

第一十六話 営業妨害（後書き）

昂「営業妨害とは……暇人だな」

葵「ゆるせないな」

棗「まあまあ落ち着いてあおいちゃん。一応は解決したんだから」

昂「しかし雄一の交渉術は新しいな」

葵「確かに聞いた事ないな。どうかと思つ」

棗「さて、では、次は第一二十七話 召喚大会二回戦 の予定です。
またね」

第一一十七話 召喚大会一回戦

棗サイド

営業妨害が逃げ出してからまたお店でウェイトレスとして働いてます。営業妨害のせいで少しお客様の入りが悪くなつてゐるのか、それほどいない。

明久「なつめ、大会に行くよ~」

ん。もう時間なんだね。

棗「うん。わかった。ちょっと待つてね。……それじゃあ大会に行つてくれるから後よろしくね」

わたしはお店を既に任せて、大会会場に向かつた。

葵サイド

さて、これから大会の一回戦だね。次の相手はどんなのかな~。せめて私の点数をみても驚かないような相手がいいな。

昂「いや、それ無理」

!! あっれ~。考へてること読まれた?

昂「葵の行動は結構単純だ。そつ難しいことじやないだろ」

葵「はあ、全く、単純とは言つてくれるじやない。まあ否定はしな

「いけど」

昴「しないのかよ」

葵「そんなことはいいのさ。で、次の相手ってわかる?」

昴「さあな、他の試合を見たわけじゃないから、どじが勝ち残ったかわからないし」

まあそんなの、実際に戦う時になればわかるよね。

物理教師「それでは第一回戦を始めますので選手は来てください」

昴「それじゃあ」

葵「いこいも」

葵・昴「サクッと終わらせようか」

私達が戦いの場に行つたら対戦者らしき一人組がいた。

物理教師「では、召喚大会一回戦を始めてください」

葵「昴、相手は何年だ?」

昴「たぶん三年だな」

葵「よく三年とあたるな」
相手が召喚獣を召喚した。

葵「Cクラスじゃありえない点数だな」

昂「Aクラスでも滅多にみない点数だよ。まあ得意科目なんだろ」

会津つて言つのは得意科目だからあーだ」「だなんか言つてる。

葵「確かに高い点数だけど、まあ大丈夫だな」

昂「ああ、問題はないだろ。それじゃあ……」

葵・昂「サモン」

物理	Aクラス	水無月葵&久多羅木昂	893点&547点
VS	Cクラス	会津坂下&勅使河原司	632点&134点

前回はすぐに終わっちゃったし、今回はちょっと時間かけて倒してみようかな。

葵「昂、会津つていうの私がやるよ」

昂「マジか。てことは俺はあっちね。わかった、任せぬ」

私は召喚獣を動かして会津の召喚獣に向かって行った。どうやら迎え撃つつもりなのか攻撃をしてきたけど、その攻撃を避けて相手の右腕をハリセンで叩いた。そのあとは、反撃する暇を与えず左腕、右足、左足と攻撃して最後、頭にピコハンで全力で叩いて、相手の召喚獣は消滅した。

物理 Aクラス 水無月葵&久多羅木昴 893点&547点

V S

物理 Cクラス 会津坂下&勅使河原司 0点&0点

物理教師「勝者。水無月、久多羅木ペア」

葵「今日はちょっと遊べたね」

昴「お前はそうだろうな」

葵「あー。やつぱり一撃?」

昴「ああ……」

次は強いのが来るといいね。

雄一 サイド

秀吉「次の相手はどこかわかるかのう?」

雄一「ああ、トーナメント表を見る限り一年のBクラスだな」

秀吉「よくBクラスとあたるのう?」

物理教師「第一回戦を始めますので選手は来てください」

雄一「うし。行くかのう?」

秀吉「うむ。行くかのう?」

さて、相手は……あれか。

『相手はFクラスだし余裕だろ』

『そりよね。さつあと片付けよ』

物理教師「それでは始めてください」

『『サモン』』

雄一・秀吉「サモン」

物理 Fクラス 坂本雄一&木下秀吉 187点&101点

V S

物理 Bクラス 金田瞬&藍田京子 158点&155点

雄一「よし、秀吉。やるぞ」

秀吉「了解じゃ」

俺と秀吉は召喚獣を動かした。俺の狙いは男の方。まずは挨拶でパンチを一回撃つてみたんだが……。

雄一「はあ?」

何の抵抗もなく喰らった! ? コイツまさか素人か? だがBクラスには戦争を仕掛けたから経験が無いなんて事は……あるな。久多羅木がキレた状態で初勝負なら何も出来なかつたはずだし……。まあいい、好都合だ。下手に慣れられる前に片付ける。そのあと俺は、ひたすらただ殴るだけだった。そこに細かい操作はない。それでも

片付けられた。

雄一「やべ、こいつは終わりだな。秀吉は……それから片が付くか
それから少しして。

物理教師「そこまで、勝者。坂本、木下ペア」

雄一「今回のは楽だつたな」

秀吉「セイジヤのつ」

これであと少しで秀吉は田的に辿りつくわけだ。しかしここからは大変だぞ。トーナメント表を見る限り、次はあいつらだ。それに秀吉の目標の前にはどんなでもなく高く分厚い壁があるからな……。

棗サイド

棗「お店は大丈夫かな?」

明久「そこまで妨害する暇な人はいないんじゃない」

棗「だと」「けど」

アキの言つてる事が普通の意見なんだろ「けど」なんか引っかかるんだよね……。ん~。いや、今は考えるのはやめよう。それに何かあつても、アキとゆづくんがいるから大丈夫だよね。

物理教師「それでは一回戦を始めます。選手は来てください」

今度は女の子の一人組が相手みたいだね。

美紀「アキちゃん！！」

棗「アキ、知り合い？」

明久「いや、知らないけど」

それだと、凄いと言つた方がいいのかな……？ 前にも言つたかも
知れないけど今、アキは女装をしていて、男のアキとはわからない
完成度なのにわかるなんて……。

美子「ちょっとたまちやん。落ち着こ'つよ」

美紀「そつだよね。うん。落ち着くよ。アキちゃん」

明久「なんですか？」

美紀「この服を着てみない？」

そういうて、たまちやんと言われてた人はどこからかわからないけ
ど服を取り出した。えーと、メイド、ナース、スクール水着、他に
もいろいろ。……いや、待とうよ。たまちやんとやら。アキにメイ
ドやナースならありだけど、スクール水着は完全にアウトだから。

棗「そうだね、メイドとナースなら似合つかもね」

明久「なつめも！？ 絶対に着ないからね！？」

美紀「そんな恥ずかしがらないで！ アキちゃんなら絶対に似合つ

から!」

明久「なんで男の僕にそんなのを着せよとすのー?」

美紀「なにを言つてのアキちゃん! この荒廃した地に降り立つ唯一の癒しのアキちゃん以外に誰が着るのー!」

あのー、たまちゃんとやら、なんか暴走してませんか……?」

明久「絶対に着ない! そして僕はいつたいなんなんだ!! 僕と癒しは絶対イコールにはならない!」

わたしはアキは癒しだと思つよ。

美紀「いいえ。アキちゃんは癒しです! そしていづれは坂本君と……」

明久「話が飛んだ! なんでそこで雄一が出てくるんだ! それと雄一と何だつてのさー?」

棗「勉強会の時に言つてた事は本当だつたんだね……」

明久「なつめまでーーー! 誰か助けてくださいー!」

うん。たまにはアキをいじらないとね。しかしたまちゃんつて人、結構危ないかも……。

棗「あなたのパートナー……いつもあんな感じなの?」

美子「ううん……はじめてみた……」

なんかどうしたらいいかわからないうて顔してるね。

物理教師「あの、もう始めていいでしょうか?」

棗「はい、お願ひします」

美子「はい、私も大丈夫です。ほら、たまちゃん正気に戻つて」

物理教師「不安もありますが、始めてください」

棗・明久・美子・美紀「サモン」

物理 Fクラス 久多羅木棗&吉井明久 241点&136点

V S

物理 D、Eクラス 玉野美紀&三上美子 135点&93点

相手の召喚獣が現れた。玉野さんの召喚獣は刀を持っていて、三上さんの召喚獣は貫頭衣に本を持っている。

美紀「行くよ、アキちゃん」

玉野さんがアキに突っ込んで行った。それじゃあ、わたしは三上さんの方をやろうかな。さて、三上さんはそれほど点数が高いわけじゃないけど、どんな攻撃をしてくるかわからないから、危険と言えば危険なんだよね。今まで、武器が本人なんて見たことないし……。

美子「来ないの? だつたら」ちから行くよ」

三上さんの召喚獣の周りに三つの光の球が現れた。何をするつもりなんだろう? もう少し観察したら、三上さんの召喚獣が手を横に振った。そうしたら光の球がわたしの召喚獣に向かつて飛んできた。

棗「で、飛んできた――?」

わたしはそれを全部避けた……けど、なぜか光の球と当たった。おかしいな。確かに全部避けたはずだけど……。

美子「まだまだ行くよ!」

そうじつて三上さんは第一射を撃つてきた。今度は余裕が出来るくらいに避けた。それでさつきの被弾のからくりがわかった。あの光の球、ただ飛んでくるだけじゃなくて追尾性能もあるみたいだね。遠距離で追尾ありね。もうだいたいネタはわかつたはずだし、そろそろやりましょうか。わたしは召喚獣を動かしたけどどう簡単には近づけない。もうたくさん撃つてくる。避けながら近づくのは大変だ。ここはアキと協力してなんとかしよう。そう思つてアキの方を見たら……。

美紀「アキちゃん。わたしが勝つたらメイドやナースを着てもらいますからね!」

明久「絶対嫌だ! なつめ手伝つて――!」

やばい。アキが圧倒されてる。召喚獣の操作でアキを圧倒するなんて、やつぱり暴走してると強くなるものなのかな? しかしそうなるとどうする? アキの助けは借りられないし……。いや、三上さんの点数はそんなに高くないし……。よし! ダメージを喰らつても

いいから速攻で突破する。そしてわたしはダメージを気にせずに突つ込んだ。三上さんに近寄り足を払つて、倒れた召喚獣を掴んでアキを襲つてる玉野さんの召喚獣に投げつけた。結果、玉野さんと三上さんの召喚獣はバランスを崩して倒れた。倒れたところをわたしとアキで袋にして相手の召喚獣は消滅した。

物理 Fクラス 久多羅木棗&吉井明久 137点&46点

VS

物理 D、Eクラス 玉野美紀&三上美子 0点&0点

美子「そんなん……」

物理教師「勝者。久多羅木&吉井ペア」

なんとか一回戦も勝てた。次からはまた相手が強くなるんだし大変だね。

でも、目指せ優勝！ だね。

第一一十七話 召喚大会一回戦（後書き）

葵「なんか作者が玉野で結構悩んだみたいだぞ」

昴「なんでだ？」

棗「たしか玉野さんの召喚獣の装備どうもつて悩みだつたかな」

葵「ああ。原作では刀使つてるし、かと思えば杖持つて三角帽を被つてるのもあるしで悩んだらしく」

昴「なるほど」

棗「まあ、そんなことがあつたんだよ。それじゃあまた次回です。またね」

第一一十八話 小さなお客様

召喚大会二回戦が終わり現在Fクラスの教室にいます。

秀吉「久多羅木に明久、二回戦はどうだったんじゃ？」

明久「なんとか勝てたよ」

棗「凄くギリギリだつたけどね」

秀吉「うぬ？ お主らでギリギリだつたのかのう？」

棗「なんていうか……」

明久「いろいろ危ない人だつたよね……」

あれはホントに何だつたんだろうね……。欲望に忠実といつかなん
といつか。

明久「そういう秀吉達はどうなの？」

秀吉「安心するのじや。もちろん勝ち進んであるぞ」

それはよかつたよ。チケットの回収をしないといけないからね。

棗「んつと……、なんの疑問もなく話してたけど、お店にお客がい
ないんだけど……」

お店にお客が一人もいない。

秀吉「いないからゆづくり話せるのじゃね? とまあ、冗談は置いといで、ワシも大会から戻つてきた時には既にこんな状況だったのじゃ」

棗「ムツツリー! あれからまた営業妨害でもあつたの?」

康太「.....いや、営業妨害は発生していない」

明久「じゃあ、なんでこんな事になつてゐるの?」

棗「ijiじやなくて、他の場所でつかの営業妨害してゐるのかもね」

もしやつない、なるべく早く解決しないと。

棗「ゆづくとは?」

秀吉「トイレに行つておるわ」

明久「なら待つしかないね」

噂がどこから流れてるかわかれいいんだけど.....。

「お兄さん、すいませんです」

雄一「いや、気にするな。ちびっ子」

葉月「ちびっ子じやなくて葉月です」

ゆづくんが戻つてきたみたいだね。なんか女の子の声が聞こえたけ

ど？　葉月？　ん？　どうかで聞いたよつな……。

秀吉「雄一が戻ってきたよ」
「じやな」

明久「そつみたいだね。なつめ、わたくしの話に聞き覚えがあるんだ
けどなんだつけ？」

轟「「」めん、わたしも思に出せな」

なんか「」……思に出しちゃうなんだけど……。

雄一「んで、探しのせばんなやつだ？」

教室のドアが開いたら、廊下にはお兄ちゃんと小柄な女の子がいた。

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄ちゃんと付き合わない？』

『俺はむしり、今だから』
『付き合った』

二人はあつという間にクラスの皆さんに囲まれていた。まあ、お密さんがいなくて暇なんだろ？ それと一番最後の人は黙つてようか。

葉月「葉月はお姉ちゃんとお兄ちゃんを探してます」

雄一「お姉ちゃん？　お兄ちゃん？　名前はなんて言つんだ？」

葉月「あ、……。わからないです」

雄一「？」 家族の姉や兄じゃないのか？ それなら、なにか特徴は？」

「へへ。ゆうくんって意外と優しいんだね。その優しさを少しでも、アキにやってあげて欲しいもんだよ。アキが騙されて怪我するなんて事はよくあるし。

葉月「えっと……バカなお兄ちゃんでした！」

「めん葉月ちゃんって子。その検索ワードじゃ、ヒットするのが多過ぎてわからない。ゆうくんは周りを見渡して。

雄一「沢山いるんだが」

「そりだよね。このクラスのほとんどが対象になるね。

葉月「えっと、じゃあ……」

雄一「まだ特徴があるのか？」

葉月「はいです！ 小さなお姉ちゃんと優しくお兄ちゃんでした」

雄一「優しくお兄ちゃんで該当するやつは知らないが、小さいお姉ちゃんで該当するやつは……久多羅木だな」

「え？ わたし？」

棗「確かにわたしは小さこじは、わたし並に小さこ子の知り合には確かいないよ？」

葉月「あー 小さなお姉さんです！」

そうこうして葉月ちゃんはわたしに駆け寄つて抱きついてきた。

雄一「久多羅木と同じくらいの小さな知り合いはないんじゃないじゃなかったのか」

棗「そのはずなんだけど……。つて、あの時の子かな。人形をプレゼントした時の」

葉月「はいです」

満面の笑顔で答えてくれた。うん、いい笑顔だね。ん？ なんだろう。葉月ちゃんがわたしに抱きついたまま周りを見てる。何か探しているのかな？

棗「葉月ちゃん、どうしたの？」

葉月「優しいお兄ちゃんがいないです」

ん？ ああ、アキだね。

棗「優しいお兄ちゃんだね。ちょっと待つてね。アキ、来て」

明久「どうしたの、なつめ？」

アキがわたしの隣にたつた。

葉月「……お兄ちゃん？」

明久「なんで疑問形なの？」

それはそうでしょう。

棗「自分の格好を見てみればわかるよ」

アキは言われた通りに自分の格好を確認して……。

明久「そつか……。女装してたんだっけ……」

アキがなぜか知らないけど落ち込んでる。

葉月「……もしかしてバカなお兄ちゃんですか？」

葉月ちゃんはわたしに確認してきた。

棗「そうだよ。あの時のバカなお兄ちゃんだよ」

葉月「でも、なんで女の子の格好してるですか？」

棗「バカなお兄ちゃんの趣味だよ」

明久「そんなわけないでしょ……」

雄二「明久、無理に否定しなくていいぞ。皆お前が、女装が趣味なのは知っている」

おお、ゆづくんも乗ってきた。

明久「僕に女装の趣味はない！！ しかも周知の事実のように言つ

な……」

雄一「なんだと? 明久が周知なんて言葉を知っていたのか……」

ゆづくん、それはバカにし過ぎ。

明久「……雄一は放つといて、なつぬ。その子は誰? 知り合に?」

葉月「忘れちゃったですか?」

明久「忘れたといつか……、会つたことあつたつけ?」

あ~あ。地雷踏んだね……。

葉月「バカなお兄ちゃんのバカ! バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、『バカなお兄ちゃんを知りませんか?』って聞きながら来たのに!」

雄一「明久……じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな?」

秀吉「そうじやな。バカなお兄ちゃんはバカなんじや。許してやつてくれんかの?」

棗「バカなお兄ちゃんはバカだからね。思い出すまでもうひょつと我慢して付き合つてあげてね」

わたしは抱きついている葉月ちゃんの頭を撫でてあげた。

明久「なんなんだ……? このかつて無い、バカの連呼は……。しかもなつめにまで……」

葉月「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのにあはは、あつたね。そんなのも。でもあれって、約束って言つのかな？」

美波「瑞希ー！」

瑞希「美波ちゃんー！」

美波・瑞希「殺るわよー！」

明久「いじぶあー！」

みなみとみいちゃんはまたなんだね……。止めに行きたいけど葉月ちゃんに抱きつかれてて行けないし。

美波「瑞希。そのまま首を真後ろに捻つて。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

瑞希「こ、こうですか？」

みいちゃんがアキの首を捻つてる……。あれ、ホントに死んじゃうよ。

明久「ちょっと待つて！ 結婚の約束なんて、僕は全然……」

葉月「ふええん！ 酷いです！ ファーストキスもあげたのにー！」

そんな事もあつたねー。

秀吉「久多羅木は落ち着いておるがいいのかのう」

棗「？ いってなにが？」

秀吉「明久を明らかに狙つてるのが増えたみたいじゃからな」

棗「ああ、そのこと。それなら大丈夫だよ」

雄一「たいした自信だな」

自信とかじやないけどね。

美波「坂本は包丁を持つてきて。五本あれば足つると思つ」

……！ それ以上自由にやれやるのは危なそうだね。

棗「みなみ。それ以上やるならわたしも動くよ？」

美波「なつめが動いたらなんだつて言つの？」

棗「今からみなみがアキにやられとこむことを、みなみにやつてあげる」

美波「嫌よ！ ウチが死ぬじゃない！」

棗「それがわかつてやろうとしてるんだ。ふーん。アキはよくて自分はダメなんだ。随分自分勝手だね」

本当にみなみは……。こんなことをしようと思わなくなるように洗

の……もとい、教育した方がいいかな？」

棗「今すぐやめるよ！」。じょな」と本当に実行するよ？」

美波「……わかつたわよ」

みなみはしふしふだけど離してくれたね。あとは……。

棗「みいちゃんも離してね」

笑顔で言つてあげた。

瑞希「わかりました」

なんでもみいちゃんは「」まで「クラスに染まつちやつたかな？」

明久「ありがと。助かったよ、なつめ」

棗「どういたしまして。それとアキ、ホントにこの予覚えてないの？」

明久「……思い出すための情報が欲しい」

棗「去年の春頃、人形を買ってあげたでしょ」

明久「去年の春、人形……」

一所懸命悩んでるね。

明久「……おお。思い出した。あの時の人形の子か！」

葉月「人形の子じゃないです。葉月です」

明久「そうだね、葉月ちゃん。それにしても、よく僕の学校がわかつたね？」

葉月「お姉ちゃんとお兄ちゃんが同じ制服を着てましたから」

美波「あれ？ なつめとアキって葉月と知り合いなの？」

明久「去年ちょっとね。美波こそ葉月ちゃんを知ってるの？」

美波「知ってるもなにも、ウチの妹だもの」

棗「へえ。そういうえば似てるね。全く気付かなかつた」

瑞希「吉井君はずるいです……。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？ 私はまだ両親にも会つてもらつてないのに……。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になっちゃつたり……」

やつぱりみいちゃんはFクラスに染まつてゐるな。

雄一「とにかくこの密の少なさはどう事だ？」

わたしあれは知りたいね。

葉月「やつぱり葉月、ここに来る途中でいろいろな話を聞いたよ」

棗「どんな話？」

わたしに抱きついたままの葉月ちゃんに優しく聞いてみた。

葉月「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

第一十八話 小わなお客様（後書き）

棗「今日は葉月ちゃんの登場だったね」

葵「そうだな。しかし今日は見事に出番がなかつたな」

昴「まあ、次に出番があるらしいぞ」

葵「なら、いいのかな。そんじゃ次回もよろしくね」

第一十九話 常夏の終わり

葉月ちゃんがどこかで聞いた噂を教えてくれた。

雄一「ふむ……。例の連中の妨害が続いているんだろうな。探し出してシバき倒すか」

明久「例の連中つて、常夏コンビ? そこまで暇じゃないでしょ」

雄一「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

そうだね。そして場合によつては……。

棗「噂がどれくらい広まってるのか、確認もしたいしね」

明久「結構な勢いで広まってる可能性もあるしね」

葉月「お姉ちゃん、お兄ちゃん。葉月と一緒に遊びにいこ」

葉月ちゃんは抱きついたまま言つてくるけど、ちょっと難しいよね。今、問題が何もなければそれでもいいんだけど。……ていうか、いつまで抱きついてるの?

明久「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなくちゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

葉月「む~。せっかく会いに来たのに~」

葉月ちゃんが不満顔だ。ん~。

雄二「それなら、ちびっ子も連れて行けばいい。飲食店をやつて他のクラスを偵察する必要もあるからな」

棗「そうだね。今から一緒に遊びに行こうか」

葉月「うん」

不満顔が満面の笑みになつたね。

康太「…………島田、姫路、秀吉、雄一も行つて来るといい」

秀吉「うむ、いいのかのう?」

康太「…………どうせ密がいない。なら休める時に休むべき」

秀吉「そういう事なら遠慮なく受けよつかのう?」

雄二「すまないな」

棗「それじゃ、わたしはちょっと着替えてくるね。さすがにこの格好で行くと潰す時にすぐバレちゃう」

明久「そうだね。やつと男の服装に戻れる」

一時的にね。

棗「そんなわけで着替えるから、葉月つけやん。抱きつくなをやめて離してくれるかな?」

葉月「はいです」

葉月ちゃんが離れて行つた。そしてわたし達チャイナドレスを着ているメンバーは急いで着替えて、また教室に戻ってきた。

雄二「揃つたな。そんじゃちびっ子、さつきの話はどういう辺で聞いたか教えてくれるか?」

葉月「えっと……短いスカートをはいた綺麗なお姉さんが一杯いるお店です」

雄二「それはどこのクラスだ?」

明久「いつたいどうしたの雄二? 雄二「だつたら『綺麗なお姉さんがいる』で走り出してそうなもんなのに?」

雄二「それはお前もだらう」

明久「だつて……」で走り出したら……」

なぜか、アキはわたしをみたね。いつたいどうしたの?

雄二「ああ、なるほど。まあ俺も似たようなもんだ」

何を分かり合ひてるの? 是非教えて欲しい。

葉月「どうしたですか? バカなお兄ちゃん。それと聞いたのは、確か一年A組だつたはずです」

Aクラスねえ。丁度いいね。しょうじちゃん達の所に遊びに行こう

と思つてたし。

棗「それじゃ、Aクラスに行つて妨害者の排除をしようか」

明久「そうだね」

雄二「そんじや行くか」

わたし達はAクラスに向かつて行つて、それほど時間もかららずに到着した。相変わらずAクラスつてデカイよね。さて、あいこちやんからはメイド喫茶をやるつて聞いてたね。

雄二「…… Aクラスは何を…… 翔子は何を考えてるんだ?」

ゆづくんはメイド喫茶の名前を見て、どう言つていいか困惑している感じだね。そのAクラスの出し物。その名前は……。

棗「メイド喫茶『』」主人様とお呼び!』か……。これは新しいね

明久「もう、メイドなのか、主なのかわからない

ホントだね。

美波「それで土屋は何してるの?」

ん? ムツツリーーは店にいるんじゃないの? わたしは辺りを見回してたら見つけた。

康太「…………!! (パシャパシャパシャパシャ!)」

凄い勢いで写真を撮つてゐるムツツリーーを……。

秀吉「……ムツツリーー、何をしておるのじや？」

康太「……人違い」

うわっ。堂々と言ひ切つたよ。

美波「どこからどうみても土屋でしうが。アンタ何しておるの？」

康太「……休憩」

雄二「そのカメラは？」

康太「……敵情視察」

最近の敵情視察はローアングルから女の子を撮影することを言つんだ？　さすがムツツリーーだね。

明久「ダメじゃないかムツツリーー。盗撮とか、そんなことしたら撮られている女の子が可哀相だと」

康太「……一枚百円」

明久「二ダースも……違つ！……買わないよ！」

雄二「おお。明久が買わないと」

秀吉「驚きじやな」

アキが買わなかつただけで「」までも言われるとはね。

康太「…………そりやうの番だから戻る」

ムツツリー一はやうこつて悔しそうに戻つて行つた。

秀吉「それじゃ、いい加減入るとするかの？」

棗「そうだね」

美波「それじゃお邪魔しまーす」

みなみが一番にドアをくぐつた。

翔子「……おかえりなさいませ、お嬢様」

瑞希「わあ、綺麗」

秀吉「それじゃワシらも」

明久「そうだね」

そういってアキとひでちゃん、みいちゃん、葉月ちゃんが入つて行つた。そしてしうづちゃんは。

翔子「……おかえりなさいませ、『主人様にお嬢様』

みんなの時と同じように出迎えてくれた。最後にわたしとゆづくんが入る。

翔子「……おかえりなさいませ、お嬢様。それと今夜は楽しみましょ。あ・な・た」

とんでもないアレンジがされていた。

雄一「……すまない。来る場所を間違えたよつだ……」

ゆうくんは来た道を戻りつとしたり、しょっぴりちゃんに襟首を掴まれた。

翔子「……雄一、ビルに行くの？ ビルに用があつて来たんじやないの？」

雄一「……人生の墓場に来た覚えは無いんだが？」

翔子「……大丈夫。きっといい」と

雄一「……翔子、とりあえず離せ」

しょっぴりちゃんはゆうくんを離して、あこじりちゃんとおこじりちゃんを呼んだ。

葵「おお、来たか。なつめ」

愛子「こひらしゃこ、棗ちゃん」

棗「うん。遊びに來たよ」

しかしあ、しょっぴりちゃんもおこじりちゃんもあこじりちゃんもメイド服似合ってるな~。

翔子「……愛子、皿を席に案内して」

愛子「じゃ、席に案内します」

そうじつて歩いて行くあいりちゃんが、皿と一緒に歩いて行いつと
したんだけど……。

葵「なつめはいつわだわ」

わたしひしょひりゅうさんとあおこひゅうんに腕を引つ張りられて別の場
所に連れて行かれた。

棗「……で、わたしはなんじるかなと」

今、わたしが連れ込まれたのは、メイド服が置いてある衣装部屋だ
った。

葵「簡単だよ」

翔子「……棗にメイド服を着てもいい」

棗「なんで？ 着るのは別にいいけど、なんで？」

葵「まああれだ。なつめのメイド姿が見てみたいと」

翔子「……棗は可愛いから絶対に似合つ

まあ、着るだけならいいよね？」

棗「わかった。着るよ。でも、着るだけだよ。」

翔子「……大丈夫。それでいい」

それからわたしはサイズの合ひメイド服を渡されて、着替えた。なんでわたしにピッタリのサイズがあるかな？

翔子「……うん。よく似合つ」

ショウジちゃんに抱きつかれた。なんか、よく抱きつかれる日だな。

葵「ほら、翔子、落ち着いて。とりあえずはなつめ。皆のところに
戻るぞ」

棗「それじゃあ、ちょっと待ってね。着替えてくるから」

葵「何言つてるんだ？ そのまま行くんだぞ」

は？

棗「聞いてないよ？」

葵「そりやそうだろ。言つてないからな」

何を堂々と……。まさか、そのまま働くとかじゃないよね？

翔子「……安心して、働く必要はないから」

棗「……わかったよ。じゃあ戻るつか」

わたしはアキ達のところに戻った。

棗「ただいま~」

明久「うん。おかえ……どうしたの?」

アキがわたしを見て、どうしたらいいのかわからぬ感じだね。

棗「あおこちゃん」としようとあやんに着るように言われてね。それより、問題の妨害者はいたの?」

さつきから周りの視線がなんかイヤ。実はアキ達と会流するまでに何回も声をかけられていたりする。ほとんどがナンパ……。そんなのは他所でやつて欲しいよ。そしてわたしを巻き込まないで欲しい。

雄一「いや、まだだ」

まだ来てないか。それよりもホントにこのクラスなの?

棗「葉月ちゃん。葉月ちゃんの言つた場所つけてよかつたの?」

葉月「うん。ここに嫌な感じのお兄さん一人がおつきな声でお話し始めたの」

秀吉「びつやら来たみたいじゃぞ」

ひぢちゃんが見ている場所を見ると、確かにいる。坊主とモヒカンの男が一人。常夏コンビだ。

『おかえりなさいませ。』主人様

『おひ。一人だ。中央付近の席は空いてるか?』

葉月「あ、あの人達だよ。さつき大きな声で中華喫茶の悪口言つてたの」

常村「それにしてもここののは美味しいな!」

夏川「そうだな。さつき行つた一年F組の中華喫茶は不味かつたらな!」

常村「全くだ。人が食つもんじゃなかつたな!」

へえへ。人が多い喫茶店の中央で、わざわざ、大声で言つた。そんなことしてましたか。

雄二「待て、明久

アキが常夏コンビを殴りに行こうと立つたところを、ゆうくんに止められたね。

明久「雄二、どうして止めるのさー。あの連中を早く止めないと!」

雄二「落ち着けって。こんなところで殴り倒せば、悪評は更に広まるだけだ」

その通りだね。

明久「けど、だからってこのまま指をくわえて見ていいなんて……」

棗「アキ、何言つてるの？　あの一人は潰すよ？」

明久「え？　どいつ」と？」

雄二「勉強が出来るようになつてきても、これは変わつてないのか……。そうだ久多羅木の言うように、あの一人は潰す」

明久「でも、わざと止めたじゃないか？」

雄二「やるなら頭を使えと言つ事だ。翔子！」

翔子「……なに？」

しょ「ひちやん……。どいつも現れたの？　全くわからなかつたよ。

雄二「あの連中が来たのは初めてか？」

しょ「ひちやんが首を横に振つて、明らかな嫌悪をあらわしてゐる。

翔子「……わづき出て行つてまた入つてきた。話の内容もわづきとかわらない。ずっと同じような事を言つている」

わたし達だけじゃなくAクラスにまで迷惑掛けてるんだね。ホントどうしようも無い人達だね。

雄二「そつか……よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

翔子「……わかつた」

この一人はお似合いだよねって、まつて！

瑞希「霧島さん！？ こんなところで脱ぎ始めちゃダメです」

翔子「……雄二が欲しこりで言つたから」

棗「そういうのはゆうくんと二人きりの時にやつてね。予備のメイド服があつたら貸してくれないかな？」

翔子「……ちよつと待つて」

しょ「ちやんが慌てて戻つていった。いつたいどうしたの？」

雄二「久多羅木、お前は何を言つてるんだ？」

なんでわたしは、ゆうくんに睨まれてるの？

雄二「……まあいい。久多羅木に姫路に島田、櫛を持つてはいけないか？」

瑞希「？ 持つていますけど……」

棗「ゆうくんが何をするつもりかはわかるんだけど……。それを誰がするの？」

雄二「明久だ」

明久「え？ 僕？ 何させられるの…？」

アキか……。適任だとは思ひナビ……。

棗「それは難しいんじゃないかな?」

雄一「なんでだ?」

棗「営業妨害の時に見られてるから、しかける前にばれるかも」

雄一「…………やうこやうつだな。なら他に使えそつなやつを知らないか?」

ふつふ~ん。もちろん知っていますとも。

棗「任せて」

秀吉「全く話についていけんの?」

明久「大丈夫。僕もだから……」

なんで一人とも落ち込んでもの?」

翔子「……持つてきた」

雄一「おつ。すまないな」

棗「しょ~いちゃん、もつ一つ貸して欲しいんだけどいいかな?」

翔子「……構わない」

棗「なら、兄さんを貸して欲しいんだけど」

翔子「……待つて」

「うこうこうしょ「ひ」わやんは兄さんを呼んでくれた。ホント協力あります。」

昂「こいつ何の用だ？」

棗「ゆづくと、来たよ」

雄一「確かに悪くないが……いけるのか？」

棗「アキと同じパターンだよ」

雄一「なるほど、それならいいけるな」

昂「なんか……、嫌な予感がするんだが……」

兄さん。それ大当たり。兄さんからしたら嫌な事だからね。

雄一「嫌な予感？まさか、そんなに大変なものじゃない。ただ、これを着てもらつだけだ」

ゆづくとは堂々とメイド服を見せる。

昂「……やっぱりか。断る。棗が着ているんだからそれでいいんじゃないか？」

棗「兄さんはもう一回、わたしにあんな思いをさせつもつなんだね……」

昴「？ 何があつたんだ？」

雄一「久多羅木が、あそこで騒いでるヤツらにやらしい田で舐めるように見られて、ナンパされていたな。断られたら力で無理矢理つてやつらだった」

うわー。確かに事実だけど、わざかな嘘も混ざってる。

昴「それで、メイド服を着るのとやつらのがどう関係するんだ？」

雄一「あそこで騒いでいるやつらを潰すため……」

昴「よし、着みつ

おお、急に変わったよ。

葵「昴はホントになつめに甘いな」

秀吉「シスコンじゅな

美波「シスコンね」

瑞希「シスコンですね」

昴「そこまでじゃねえよー」

かなり言われてるね兄さん。

雄一「助かる。早速だ、秀吉。昴の着付けを頼む」

秀吉「任せられたのじゃ」

ひでちやんは、兄さんを連れて教室から出て行った。

葵「しつかし、昂に女装させたか。見るの久しぶりなんじやないか
？」

棗「そうだね」

明久「昂も僕と似たようなもんだからね」

そう。アキと兄さんは小さい頃から親に、女装をさせられてたから
ね。似合つんだからしそうがないよね。

翔子「……戻ってきたみたい」

教室の入り口にはメイド服を着て、赤髪セミロングのかツラをつけ
た兄さんがいた。うん。似合ってる。どこから見ても女の子だね。

美波「……ねえなつめ？」

棗「なに？」

美波「どうしてアンタの周りは、女装せたら女より綺麗な男がそ
んなにいるの？ ウチは自信無くしそうよ……」

瑞希「美波ちゃん……私も同じ気持ちです」

ホントに一人ともどうしたの？ 落ち込んで？

兄さんは……問題の一人のところにいるね。席を立たせてから、全力で殴った。殴られたのは坊主の方だね。そのあとモヒカンの方が兄さんの肩に触った。そして触られた兄さんは……。

昂「！」この人、今私の胸を触りました！

さあ、お仕置きの時間。反撃の開始だね。

常村「まて、お前はもともと触るほど無いっていうか、そもそもおと……ぐばあ！」

雄二「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

ついでにセクハラ発言もあつたね。

常村「まで、何を見ていたんだ！？ 明らかにひがいし……！」ふー…

明久「はあ～。痴漢しておいて言い逃れ？ 最低だね」

雄二「それにお前らはこのウェイトレスの胸を揉みしだいていただろうが！ 僕の手は節穴じゃないぞ！」

とんでもない節穴だと思う。わたしに出来る事はあるかな～。

棗「しょ「う」ちゃん。縄とかある？」

翔子「……持つてる」

聞いといてあれだけビ……何で持つてるの？

棗「それじゃあ、縄を貸して欲しいんだけどいいかな?」

翔子「……はい」

しょりいちゃんは縄を渡してくれた。いつたいどにから出したの?
常に持ち歩いてるの? まあいいや……。わたしも動じづ。わた
しひやうくこの隣まで行つて。

棗「いかがをお使いになりますか?」

雄一「……それは助かるんだが、なんでそんなもん持つてんだ?」

棗「しょりいちゃんから借りた」

雄一「……なんでアイツはこんな物持つてんだ? まあいい、なら
そののウヒイトレスと一緒に、そこで気を失つて坊主を動けない
よつに縛つてくれ」

棗「わかりました」

わたしさは兄さんのところに行つてから、兄さんと一緒に坊主を縛り
に行つた。

雄一「さて、痴漢行為の取り調べの為、ちよつと来て貰おつか」

ゆうくんが指を鳴らしながらモヒカンに近寄つてこつてゐる。

常村「ぐー、状況が悪いか! とつあえず先ずは」

そういうつてわたし達の方に走つてくる？あれ？逃げないんだ？この坊主の回収をするつもりなのかな？でもそつはいかないよ。

常村「げぱあ！」

あおいちゃんがモヒカンの顔を殴つた。モヒカン、この短時間で顔に三発目。

葵「お客様。お店と店員への迷惑行為の覚悟はよろしいですか？」

棗「あおいちゃん。モヒカン、もう氣絶してると

葵「勘弁してよ。そんなに強く殴つてないぞ。……どれだけ弱いんだ」

あおいちゃんはまだ納得いってないようだね。この後ひでちゃんが、わたし達のクラスの喫茶は大丈夫だった。って噂を流して、Fクラスにまたお客が戻ってきた。

わたし達は西村先生に事情を話して、常夏コンビを補習室に叩き込んだ。西村先生が言つには三年の生活指導の先生と徹底的に見張るらしい。今日と明日、清涼祭中は補習室からは出さないそつだ。これで問題は解決だよね。

第一十九話 常夏の終わり（後書き）

棗「やつと営業妨害を終わらせたね」

葵「なつめ達は苦労してるようだな」

棗「全くね。なんであんな事をしたのかわからないけど」

葵「ま、解決したんだし。後は祭を楽しむだけだな」

棗「そうだね。それではまた次、会いましょう」

第三十話 召喚大会三回戦

棗サイド

常夏コンビを補習室に叩き込んでから、また中華喫茶に人が来るようになつた。むしろ妨害が発生する前よりお客の入りがいい。きっとAクラスでひでちゃんが流した情報を聞いて、試しに来たお客が良い噂を流してくれたりしたんだろうね。

そういうえばそろそろ召喚大会三回戦の時間だね。

棗「アキ、そろそろ召喚大会に行くよ」

明久「ん。わかつた」

ちなみに、今わたしは、チャイナドレスを着て接客をしている。まあ、当たり前だな、みたいな声が聞こえそうだけど。それとアキとひでちゃんもチャイナドレスを着て接客をしているよ。かなり渋つてたけどね。そして何故か、葉月ちゃんもチャイナドレスを着て中華喫茶のウエイトレスとして働いてる……。ホントに何故?

わたし達は今大会会場に向かって歩いている。

明久「ねえ、なつめ」

棗「なに?」

明久「また営業妨害が発生したらどうする?」

アキも心配性だね。まあ、わたしもだけどね。

棗「そうだね。もし、次があつたなら、みいちゃんの料理を食べさせてる」

アキ「マジ?」

棗「さあどうだらう? 本気かもしれないし、冗談かもしれないしどう。さて、どうだらうね?」

明久「冗談であつてほしい……」

アキ、そんなに深刻そうな顔しなくていいんだよ。いくら周りに迷惑をかけるようなやつでも、死んでいいとは思つてないから。……つと、話してたら大会会場についたね。まだ、相手は来てないみたいだね。対戦相手を待つとしよう。

十分後。

古典教師「もう一つのチームが来ませんねえ……」

もつすでに三回戦が始まってる時間なのにまだ相手が来ない。担当教師も困ってるみたいだし……。対戦相手どうしたんだろう?

更に十分後。

古典教師「……対戦相手が来ませんし、ここは久多羅木、吉井ペアの不戦勝でいいでしょ?」

三回戦は不戦勝だった。わたし達は会場から離れて教室に戻つてしま

す。

明久「……ねえ、なつめ。わたくしの二回戦なんだけれど……」

棗「うん? ビーフしたの?」

明久「もしかして対戦相手って常夏コンビだったんじゃないかなって思つて」

ああ、なるほど。その可能性もゼロじゃないよね。

棗「もし常夏コンビだったら、同情はないね。他の人なら話は別だけどね」

明久「あはは、それもそうだね」

葵サイド

しかし、まさか学園祭であんな妨害してくるやつがいるなんて思わなかつたよ。『』一部の人のせいであくの人気が不快になるのは、私は許せない。やつぱり補習室に足を込むだけじゃ軽いような気がするんだよね。

葵「……まあ、いい。終わつた事だしね。とつあえずは次だな」

昴「やつと戻つてきたか」

戻つてきたつて……ちょっと考え込んでただけじゃん。

葵「さて、次の相手はどんなかな~?」

昴「楽しめるといいな？」

葵「どうせ無理だと思ってるんだろ？」

葵「ああ、そうだな」

古典教師「三回戦を始める。選手は来てくれ」

それじゃ気分を変えてやりますか。私は会場にいる対戦相手をみつけた。たぶん、また三年かな？

古典教師「それじゃ、はじめてくれ」

まず対戦相手の三年が召喚した。

古典 Aクラス 穴戸五郎&坂下四郎 546点&521点

葵「へえ、高いね」

穴戸「そつやそつだ。得意科目だからな」

坂下「おまえらも運がないな」

なんかもつ、私たちが負ける事前提で話してゐるな。

葵「どうある、昴？」

昴「確かに点数は高いけど、それだけだらうな。一撃でやられりつてだけじゃないか？」

葵「まあ、そりだらうな」

宍戸「生意気な」と言つてゐるけど、てめえらはどいつなんだ?」

昂「今みせるよ。サモン」

葵「サモンつと」

古典 Aクラス 水無月葵&久多羅木昂 877点&569点
VS

古典 Aクラス 宮戸五郎&坂下四郎 546点&521点

点数は近いけど……それだけだった。戦いはすぐに終了。

古典教師「勝者。水無月、久多羅木ペア」

昂「んじゃ、戻るか」

葵「そうだね」

私達はAクラスに戻ることにした。その戻つてゐる時に気になるもねがあつた。ガラの悪い男達が校舎に入つて行く光景。はつきりいつて浮いてる。昂も見つけたみたいだね。まあ、いいか、見た目あんなでも祭を楽しむ事はするだらうし。

棗サイド

棗「ただいま~」

秀吉「うむ？ 隨分早かったの？」

明久「うん。相手が来なくて不戦勝だったんだ」

雄二「まあそうだろうな。お前らの三回戦の相手は常夏のはずだつたからな」

ふくん。だつたら……。

棗「別に気にしなくていいって事だね」

明久「そつだね。常夏だし」

棗「それで、ひでちやん達の三回戦は？」

秀吉「これからじゅうじや」

雄二「もう時間だな。大会に行くぞ」

秀吉「うむ。それじゃお店を少し抜けるのじゅうじや」

明久「わかった」

棗「頑張つてね～」

ひでちやんとゆうくんが教室を出て行つてすぐ、みなみに声をかけられた。

美波「なつめ、悪いけどウチ達も召喚大会だから抜けるわ」

みなみ達もなんだ。

棗「うん。わかった。頑張ってね~」

みなみとみいちゃんも教室から出て行った。……これってもしかして、ゆうくん達の相手って……。まさかね。

棗「アキ、接客に戻るよ。ウェイトレスが三人も大会でいなくなつたからね」

正確には違つけどね。

明久「ん。そうだね」

雄一「サイド

たぶん相手はあいつらだからな、これは苦労するや……。

秀吉「対戦相手が来たようじやな」

雄一「ああ。来たな」

やつぱりあいつらだ。まあ、そつ簡単に負けるとは思つてなかつたしな。……予定通りか。

秀吉「なんじや、次の相手はおぬし達なのか?」

美波「みたいね。同じクラスだからって手は抜かないから」

瑞希「そうですね」

秀吉「むへ……。」れきしきひじやのう

雄一「まあ大丈夫だ。今まで通りやれば問題無い」

美波「坂本、たいした自信じやない」

雄一「そりゃそうだろ。俺達の勝ちが決まってる試合で何故、不安にならなければいけない」

瑞希「坂本君、私達は強いですよ?」

それはどうだらうな。この三回戦では島田さいないと一緒だ。

美波「そりよ。三回戦はウチの得意な数学なんだから負けるわけないわ」

秀吉「? ひょっと待つんじや。三回戦は数学だとありますけど?」

……

瑞希「でも、トーナメント表に三回戦は数学だとありますけど?」

まさか姫路まで氣づいてないとは思わなかつたな……。お前らが持つてるトーナメント表は俺が作ったものだ。数箇所、いじつてあるがな。

秀吉「そもそも数学は一回戦であつたじやね」

美波「……そりやられてみればそりね」

姫路「そうですね。じゃあ三回戦の教科はなんですか?」

雄一「召喚してみればわかるぞ」

瑞希「それでは」

瑞希・美波「サモン」

古典 Fクラス 姫路瑞希&島田美波 399点&9点

美波「うそー? 古典ってウチの苦手科目……」

姫路の点数が心配だったが、あれなら大丈夫だな。

雄一「9点しかない召喚獣なんて、いないのと同じだな。秀吉」

秀吉「そりじゃな。これなら勝てそりじゃ」

雄一「そんじや俺らも」

雄一・秀吉「サモン」

古典 Fクラス 坂本雄一&木下秀吉 211点&136点

古典 Fクラス 姫路瑞希&島田美波 399点&9点

古典教師「それじゃ、始めてください」

雄一「俺が姫路をひきつけろー。秀吉は島田を片付けろー。」

秀吉「わかったのじや」

召喚獣を動かして姫路の召喚獣に攻撃をした。姫路は避けようとはしたんだろうが、攻撃がかすつた。だが姫路もただやられるだけじゃなく、しつかり攻撃してきてるがな。俺はそれを難なく避ける姫路の方が操作の経験は多いから警戒してたんだが、どうやらそれほど、警戒なんてしなくていいレベルだな。さて、次はどう攻めようか？ 秀吉もそんなに時間がかからずにじつちに合流できるだろうしな。ま、あと数回攻めときますか！

また姫路の召喚獣に向かって動かす。今度は仕掛ける前に攻撃してきた。剣を振り下ろしてきたな。とりあえず右に避ける。振り下ろした剣を横に振ってきたから後ろに回避した。そして剣を横に振り切つた隙だらけの召喚獣に近寄つて顔に攻撃して、距離をとつた。

秀吉「待たせたのじゃ」

雄一「おう。待つてたぞ」

古典 Fクラス 坂本雄一＆木下秀吉 211点＆130点

VS 古典 Fクラス 姫路瑞希＆島田美波 367点＆0点

秀吉は少し点数が減つてるが、これなら大丈夫だな。

雄一「秀吉、ここからが本番だぞ」

秀吉「わかつておるのじゃ」

瑞希「私一人でも負けません！」

姫路もやる気だな？ もしかしたら苦労するか？

俺と秀吉は姫路の召喚獣に向かつて行った。俺が攻撃して、姫路は避けたが、秀吉がそこに攻撃してダメージを与えて、姫路の攻撃が秀吉の召喚獣に直撃しそうな時は、俺が防ぎに行つたりしながら戦つていた。そんな戦いをしばらく続けてたら……。

瑞希「あ……」

古典 Fクラス 坂本雄一＆木下秀吉 57点＆32点

VS

古典 Fクラス 姫路瑞希＆島田美波 0点＆0点

古典教師「勝者」坂本、木下ペア「

一対一に持ち込んでギリギリとは……。一対一の時はギリギリになるとは思つてなかつたんだがな。姫路の火事場か？ とんでもないな。

第三十話 召喚大会三回戦（後書き）

棗「皆、勝ち残ってるね」

葵「楽しみな戦いがあるからね。そこまでは負けられないよ」

棗「あおいちゃんが本気なのも怖いね……」

葵「いいの、いいの。また次で会いましょう」

棗「またね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9692t/>

バカと幼なじみと召喚獣

2011年10月9日07時33分発行